

池の平遺跡群

——八千穂村大反遺跡・塩くれ場遺跡の尖頭器文化——

1986年3月

八千穂村池の平遺跡発掘調査団

池の平遺跡群

——八千穂村大反遺跡・塩くれ場遺跡の尖頭器文化——

1986年3月

八千穂村池の平遺跡発掘調査団

○大坂地點 二〇四十九号地點

序

八千穂村池の平遺跡発掘調査報告書の発刊に際して

長野県南佐久郡八千穂村地籍、北八ヶ岳山麓竜枯山（標高2,386m）の東北面傾斜のなだらかな山麓地帯八千穂村高原池の平地籍に、旧石器時代の人々が同地籍から産出する黒曜石を原石とした石器が発見され、学術的な調査が行なわれるに至った。

この遺跡は、戦後地元考古学愛好有志により表採され、また、1971年に発掘調査がおこなわれたという記録があるが、本格的な調査は1983年に第一回発掘調査が村教育委員会により行なわれたのが最初である。この調査の成果の概要は、「池の平遺跡発掘調査概報」として出版された。

引きつづき第二回調査が1984年夏に行なわれ、今回、一回・二回の総まとめとしてこの報告書が刊行されることとなった。

この発掘調査地点は標高1,650mの高地にあり、ゆるやかな斜面が古代狩猟の適地だったと考えられ、また同地山岳部から黒曜石が産出されており、この黒曜石を原石とした狩猟具（尖頭器等）の製造の場であったことが推定されるに至った。同地籍山峠には水流も多く長期的な生活の場もあったと考えられ、今後の調査についても検討されている。

八千穂村高原池の平地籍は前述のとおりゆるやかな東北面傾斜をなして千曲川支流大石川の清流をつくり、樹林は白樺の自生林とカラマツの人工林に覆われた一大美林を形成しており、昨年からはスキー場の開設もあり、旧石器時代から現代に至る長い歴史の変遷に人と自然の繋りを感じるものである。

今回の一回・二回の発掘調査により八ヶ岳山麓一帯の古代遺跡群の中に本村の池の平遺跡の存在が明らかとなり、単に学術的資料のみでなく本村の歴史の原典が明らかにされつつあることは極めて意義深いものと感ずる次第である。

この調査は、信州大学理学部地質学教室熊井久雄先生の御指導を得て野尻湖友の会、八ヶ岳団研会員、また村内有志の方々の御協力により地質学的、考古学的に極めて優れた調査が行なわれた。ここにその完結編としての報告書を発刊できることに望外の喜びを感じるものである。

今後における一層の御指導御協力を願いし、本発掘調査に御協力頼った各位に重ねて感謝申し上げて御挨拶とする。

1985年12月

八千穂村長 佐々木 澄雄

例　　言

1. 本報告書は長野県南佐久郡八千穂村大字八ヶ岳下2,049番地に所在する池の平遺跡群の大反地点および塙くれ場地点の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は1983年から2ヶ年計画で実施され、1983年・1984年のそれぞれ夏期に7日間および9日間の発掘が行われた。
3. 1983年の第1回発掘の成果は、1984年8月に「池の平遺跡——八千穂村池の平遺跡発掘調査概報」として公表された。
4. 本報告書でとりまとめられた発掘の成果はすべて巻末に記した発掘参加者全員のものであるが、報告書作成にあたって執筆を分担した者の氏名を目次に示し、文責を明らかにした。
5. 本報告書に関する編集は下記の編集委員会の責任において行われたものであるが、遺跡の性格等の考察に関しては必ずしも全員が一致した結論を得ているものではないことを付記する。
6. 発掘出土品、写真等はすべて八千穂村教育委員会が保管している。
7. 発掘調査にあたっては、多くの方々のご協力やご援助を得た。深甚なる謝意を表する。ことに、千葉大学文学部麻生 優教授および東京農業大学第三高等学校新堀友行教諭には貴重なご助言を得た。また、発掘資材ならびに施設の利用などで野尻湖発掘調査団、野尻湖博物館、八千穂村公民館、八千穂村教育委員会、八千穂村婦人会、信州大学理学部地質学教室にお世話になった。さらに、本報告書のとりまとめに関して、森鴎一氏からは以前の発掘についてのご教示を得、石井伸明、町田勝則の各氏には整図等を手伝っていただいた。なお、第一回発掘に際して、発掘地選定に係わる測量を実施していただいた八ヶ岳団体研究グループの日下部 寧、菅野 匠、柴崎直明、関口尚志、内山 高、趙 哲済、飛田健二、角谷邦明、長津 聰の各氏に謝意を表する。

(編集委員)

石塚二侍子、大金 齊、柿原仁志、鶴田知幸、木村純一、熊井久雄*、小浦和子、小林雅弘、小宮山一美、近藤洋一、數土美幸、竹内 健、田辺智隆、中村敦子、中村由克、野井 健、増田信吾、矢口裕之、矢嶋勝美

*印：編集責任者

目 次

1	調査の経過	
A	調査に至る経過	(小宮山一美・佐々木徳治) 1
B	調査の方法	(増田信吾・柿原仁志) 4
C	発掘日誌	(熊井久雄・大金 齊) 6
2	地形	
A	立地・所在地	(小林雅弘) 9
B	遺跡群周辺の地形	(小林雅弘) 9
C	発掘地の地形	(近藤洋一) 12
3	地質	
A	地質概要	(小林雅弘) 14
B	佐久ローム層	(木村純一) 17
C	発掘地周辺の地質	(小林雅弘) 20
D	発掘地の地質	(末永和幸・森 幸尋・小林雅弘) 21
E	佐久ローム層の砂粒組成	(矢口裕之ほか) 26
F	"デカバミローム" 中の全窒素量	(田辺智隆) 33
G	火山ガラスの屈折率について	(小浦和子) 35
4	遺跡・遺物の概要	
A	大反遺跡	(小浦和子・矢嶋勝美・深沢哲治) 37
B	塩くれば遺跡	(石塚二侍子・竹内 健・深沢哲治) 43
C	尖頭器製作に伴う碎片の特徴	(坂本孝洋・中村由克ほか) 61
5	池の平遺跡群の分布	(中村由克・関本真一・佐々木徳治・小宮山一美) 65
6	池の平尖頭器文化の特徴	(中村由克) 71
A	尖頭器の形態と変遷	
B	尖頭器の製作過程	
C	池の平尖頭器文化の組成	
D	池の平遺跡群の立地と性格	
7	池の平尖頭器文化の編年的位置	(鐵笠 昭) 77
8	まとめと今後の問題点	(熊井久雄・小林雅弘・中村由克) 79
あとがき		(編集委員会) 82
引用文献		83
参加者名簿・発掘組織		86

1 調査の経過

A. 調査に至る経過

a. 遺跡の発見

八千穂村池の平遺跡は比較的早い時期から注目されてきた。すなわち、第2次大戦後の本格的旧石器文化研究の出発点とされる1949年の岩宿遺跡の発見から間もない頃に、すでに地元の故與水利雄等によって表掲が行われている。與水等の招致によるものと推定されるが、1954年には芹沢長介が来訪し、駒出池付近で片面加工の尖頭器などを表掲したという(井出、1982)。また、同じ頃に佐藤達雄もこの付近で尖頭器、石刃等を表掲している(井出、1982)。

八ヶ岳周辺の遺跡が次々と調査されていった1960年代には、池の平遺跡もその一環をなすものとして、各種の遺跡分布の中に明示されるようになった。その一例として、小松 康(1967)による八ヶ岳周辺の遺跡分布図の中には、矢出川、御所平などと並んで、池の平牧場遺跡と無名の遺跡(駒出池付近)2ヶ所の遺跡が記載されている。池の平牧場遺跡の位置は現在の池の平遺跡の位置である。これらの遺跡の遺物保管者は、前記の故與水利雄、佐藤達雄のほか、佐々木隆蔵であるという(井出、1982)。

b. 1971年の発掘調査

この発掘は林道八ヶ岳線の工事に伴って遺物が発見されたために急換実施されたものである。発掘調査受託者は八千穂村教育委員会であり、1971年(昭和46年)6月1日から6日までの6日間実施された。発掘地点は八千穂村大字八郡八ヶ岳下2049番地の塩くれ場地点、トリデロック地点、湧水地点の3ヶ所であった。調査団は故與水利雄を団長にして、長野県考古学会会員や信州大学の学生が中心となって編成された。

当時、八千穂村役場に勤務していた本報告書執筆者の一人佐々木徳治は、この発掘に参加した。6日間の発掘期間中3日間も雨に降られ、困難の多い発掘であった。発掘参加者は八郡の高見沢宅に宿泊し、夜は学習会も開催された。

発掘の成果については、公表されたものがないので、確実ではないが、大略以下のとおりであったという。すなわち、発掘した各地点のうち、塩くれ場地点は最初道路東側にグリッドを設定し発掘したが、遺物は何も出土しなかった。ついで、道路西側へ発掘位置を移動させ、ここにグリッドを新設した。新設したグリッドからはスクレイパー3点と彫器1点が出土し、加えて、表掲でも尖頭器1点が得られた。湧水地点は塩くれ場地点より西へ500m林道沿いに登った標高1,740m地点に位置し、グリッドのすぐ西側に湧水がある地点である。ここでは、200m離れた地点で剝片が表掲されたが、グリッドからは何も出土しなかった。トリデロック地点は湧水地点と塩

くれ場地点の中間に位置する。この地点の道路山側側壁のローム層中から剥片が発見されたため、その位置にグリッドが設定された。出土遺物は剥片3点、大型石刀1点、縄文早期の土器片3点（茅山式土器、黒土中から）であった。

c. その後の状況

1971年の発掘終了後、八千穂村教育委員会は、塩くれ場地点とトリデロック地点とに発掘調査の概要にもとづき、遺跡表示板を建立した。

また、この発掘に参加した故郷原保真は他の地域の試料と一緒に、塩くれ場地点の“デカバミ”中の黒曜石破片を鈴木正男に送り、フィション・トラック年代の測定を依頼していたが、その結果がSUZUKI(1973)によって公表された。それによれば、この黒曜石の年代は、 $11,600 \pm 450$ Y.B.P. および $13,000 \pm 650$ Y.B.P. であるという。

執筆者の一人佐々木徳治は、発掘以降、塩くれ場付近でたびたび表採した。とくに、道路の方面に注目し、ここを中心に行なった結果、多くの遺物を得ることができた。塩くれ場地点より林道沿いに50~60m登った地点の山側面では、雨あがりには細かい無数のチップを見ることができた。この地点は、今回の発掘地点となつた大反地点(O.S.ア-20付近)であるが、発掘以前に多数の尖頭器が表採されている。

池の平地域では、池の平遺跡だけではなく、かなり広い範囲で遺物の分布が見られる。後述するおり駒出池付近や八千穂レイクの盛土部分などからも遺物が多く表採されている。

d. 今回の発掘の経過

今回の発掘の発端には次のような背景がある。すなわち、1971年の発掘終了後、発掘で得られた遺物やその研究成果が村内に残されておらず、村の歴史の始源の様子を知りたいという村民の要望に答えられずにいた。また、10年間に渡る発掘後の、主として、佐々木徳治による表採の遺物の考古学的・地質学的検討を行うためにも、実際に発掘を行って、その詳細を明らかにしなければならない、という実際的な課題もあった。

このような背景の中で、当時信州大学の学生であった角谷邦明は、卒業研究のために八千穂村の地質調査を行なっていたが、池の平遺跡の現状を佐々木から説明されるにあたり、この研究に協力することを約した。その後角谷の紹介によって、中村由克が八ヶ岳団体研究グループの協力によって、表採遺物の記載を主とした報告書を出版することを示唆した。1975年のことである。しかし、このときは諸般の事由から、この計画は実現しなかった。

1981年になって、佐々木の指摘をうけた八千穂村文化財調査委員会においても、池の平遺跡の尖頭器密集地点の存在は、村の文化財研究の上でも重要な地点であることが認識され、発掘調査を含む研究の必要性が確認された。佐々木は、発掘を行うとすれば、地元主義に徹した住民参加

*SUZUKI(1973)によれば、採取地点は茅野市のIkenodairaとなっているが、これは誤りで、採取者の故郷原保真氏は生前この訂正を要望していた。

のいわゆる「野尻湖方式」が最も良い方法だと考えた。また、少なくとも、発掘された遺物が村に残り、住民が自由に観察できることを願った。

1982年の夏、八千穂村で卒業研究のための地質調査を行っていた執筆者の一人小林雅弘は、佐々木から池の平遺跡の発掘計画を相談された。前述の経過もあり、小林はこのことを自身の所属する八ヶ岳団体研究グループならびに野尻湖発掘調査団の中南信野尻湖友の会に計り、協力を要請した。各団体とも、この計画に快諾を与え、地元と協力して発掘を行うことを決定した。このことはすぐに佐々木をとおして文化財調査委員会に伝えられ、発掘を翌1983年に開始すべく、八千穂村の教育委員会を中心として準備が進められた。

e. 八千穂村池の平遺跡発掘調査団の結成

発掘を進めるに当たって、発掘主催団体は八ヶ岳団体研究グループ、野尻湖人類考古グループ中南信野尻湖友の会、八千穂村の各団体とし、調査団の結成にむけて動きだした。発掘調査の立案や運営を検討すべく、各団体から運営委員が選出されて、運営委員会が結成された。

第一回運営委員会は、1983年（昭和58年）3月12日に八千穂村福祉センターで開催された。運営委員会の構成は、前述各団体から選出された委員からなるが、八千穂村の運営委員として、教育委員会、文化財調査委員会、史談会の各代表が参加した。

この会では、発掘への参加およびかけ、運営体制、発掘方法等が細かく討議された。この中で調査団の名称がきまり、団長に八千穂村教育長の出浦 深が選ばれた。

第二回運営委員会は6月6日に開催され、測量結果や「発掘参加のご案内」、「発掘参加申込書」などの様式、およびかけの範囲などについて話し合われた。

第三回運営委員会は7月19日に開催され、発掘の具体的スケジュールに沿って検討が行なわれた。とくに、100名以上の参加者の宿泊や食事の件で頭をいためた。結局、福祉センター全館を宿泊所にして、朝夕の食事は婦人会のみなさんにお願いすることになったが、婦人会のみなさんは、以後、お盆の期間を含んで大変お世話になってしまった。

発掘直前の7月30日には、地元の小・中学生の参加希望者のために事前学習会がもたれた。講師は熊井久雄と中村由克であった。

B. 調査の方法

1. 発掘地の設定

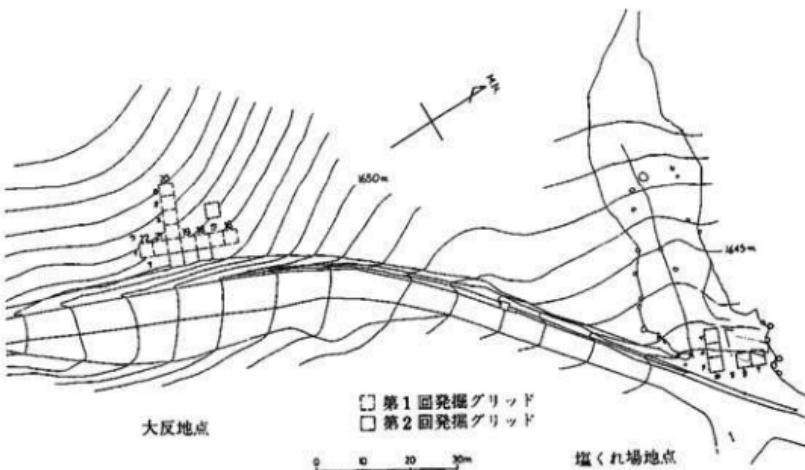
本発掘に先立って、これまでの調査を参考にして発掘地を選定した。大反地点では表掲により判明している遺物密集地を中心に道路に接したグリッド列を設定し、塩くれ場については遺跡の広がりとスポットを確認するためにし字型に配した。1グリッドの広さは1辺3mの正方形とした。グリッドの設定は、基準杭からトランシット、テープを使って行い、区画杭は設置後すぐに色ペンキを塗布し不注意からの転倒を防いだ。又、区画杭が倒れても復元できるように区画線の延長方向に50cm離して補助杭を打った。区画設置後すぐに区画杭の地盤高の測量と発掘地の地形測量を行った。

2. 発掘班の編成

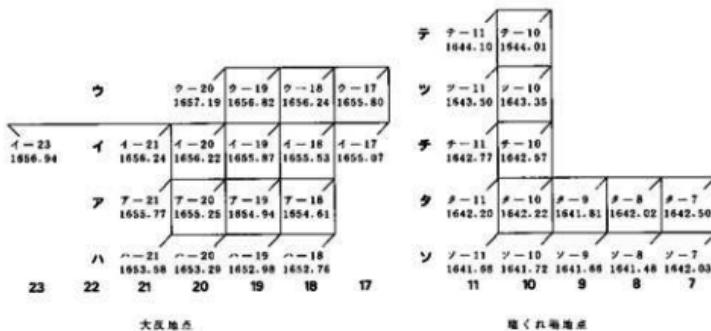
発掘区画の設置後、発掘参加申込を受けて調査団が編成された。発掘の経験者を中心に班長、記載係(2名)が編成された。この班長のもとに10名からなる1発掘班が1グリッドを発掘する。各発掘班には、記載係の他に資材・おやつ・食事などの各係があり、地質・出土遺物の記載、資材の整理・調達、おやつや弁当の配布をする。

発掘班内の係とは別に発掘全体をサポートする設営・受付・コンバなど14の係が編成された(詳細は発掘組織図を参照)。それらの係による工夫のいくつかを以下に記す。

発掘地には水道設備が無いため八千穂村から農業用ポリタンクをお借りして飲料水を運搬した



第1回 発掘位置図



第2図 区画杭地盤高標高(単位:m)

(資材係)、雨天でも発掘を行えるようにグリッド列にビニールハウスを設けた(設営係)、前日の成果やその日の予定、発掘地付近の自然などを載せた新聞「池の平タイムス」を発行した(新聞公社)、などである。

発掘では、地質・人類考古の各班が専門班として編成された。このうち地質班は、試掘溝の地層判定をし、これに基づく地層区分をした。また、発掘現場周辺で試掘坑を掘り、発掘地周辺の各層の分布を追跡し、分析用サンプルを採取した。人類考古班は、出土した遺物を鑑定し、かつ、その分析状況を検討した。又、表採による遺物の分布状況を調査し、周辺への遺跡の広がりを検討した。

3. 発掘方法

調査団が編成され発掘が開始されると、まず表土はぎが行われる。表土はぎは、草の根などがあった土壤部分をはぎとり保存して発掘後の修復・現形復旧を完全に行うための重要な作業である。ここでは、グリッド面をいくつかのブロックに切り、ブロックごとにはぎ取った。はぎ取ったブロックは日陰にかためて積んで、時々散水して養生を行った。ついで、上げ土を置く予定地にむしろを敷き、雨天時の土の流失を防ぐためのビニール製カバーを用意した。

発掘は、掘り進む地層を確認しつつ進められなければならない。そこでグリッドの一辺に幅1mの溝を先行して深く掘り下げる。これを試掘溝と呼ぶ。試掘溝の壁面は地質断面の観察用に平滑にされ、この面をスケッチして、地質断面図として遺物の出土層準の確認に用いられる。また、この面からは各種分析用の試料が採取される。

試掘溝が完成した後グリッド面の発掘が行われるが、その際には試掘溝で地層を確かめつつ層理面に沿って草かき鎌や移植ごとで丁寧に掘る。遺物が出土すると班長の指示に従って記載係が地質・遺物を記載する。

発掘終了後、埋め戻しが行われるが、これは発掘と逆の順序で行われ、まず、資材や仮設物が撤去される。その後、箕や一輪車で上げ土を戻して踏み固めた。最後に雨で土が流れないように

表土をかぶせた。

4. 記載の方法

グリッド内で発見された遺物は、次の手順で発掘現場で記載・整理された。すなわち、発見された遺物のうち剝片・破片以外の遺物については、まず人類考古学による鑑定が行われる。出土遺物は、その近傍に目印のために番号札のついた竹ぐしをさされ、同じ層準の中である程度遺物が発見されると記載係が1つ1つ遺物を記載カードに記入する。記載カードの記載項目は、遺物番号・発見者・遺物の種類・深度・グリッド内での位置・遺物のスケッチ（必要あるもののみ）である。記載カードの記入と同時にグリッド平面図にも遺物の出土位置を記入する。記載が終了した遺物は番号札といっしょにサンプル袋に入れ、試資料整理班によって集められる。その後、遺物と記載カードとの間に誤りが無いかどうかの確認は宿舎で試資料整理班によって行われた。

このような遺物の記載は各グリッドの記載係によって行われたが、一度に多くの遺物が出土した場合はグリッド内の班員全員で分担して記載を行った。又、大反地点では大量の剝片や破片が発見されたため、それらが集合して出土した場合に限り、1まとまりの遺物として記載された。

C. 発掘日誌

a. 第1回発掘

1983年（昭和58年）8月10日（水）から同月16日（火）までの第1回八千穂村池の平遺跡発掘調査の模様を簡単に振り返ってみると次のとおりである。なお、この期間中、毎朝「池の平タイマス」が発行され、前日の成果や解説、当日の目標やスケジュールなどが掲載されて、参加者全員に配布された。発掘終了後の毎夜、その日のまとめの会が福祉センターで開かれ、「そくほう」にその日の成果を図入りで記載して討論が行われた。ここでは、それらをもとにして、日ごとの成果を中心に述べる。

8月10日 午後1時集合、宿舎の福祉センターと発掘現場に別れてそれぞれ発掘の準備を行う。現場ではグリッド割出しの測量や発掘現場への道作り、テントの設営などを行う。夜は結団式を行ったあとコンバ。

8月11日 午前9時からくわ入れ式を行う。発掘参加者の佐々木宗昭さんが現職の神主なので式をとりしきってもらう。続いて表土はぎ。午後にわか雨のため発掘作業が一時中断したが、イー22グリッドで巨礫の層準が決定する。ア-20グリッドで多数の遺物が出土するなどの成果がある。とくに、ア-20グリッドから出土した尖頭器先端部は以前表採された基部とぴったり接合する。全グリッドで試掘溝さく。

8月12日 当初予想していたより出土層準が多いことがわかった。少なくとも3層準から遺物が出土する。ア-20グリッドでは前にも増して多量の遺物が出土。巨礫の存在する部分からは遺物の出土しないことが判明。試掘溝が完成して遺物の出土層準がはっきりしてくる。

8月13日 ア-20グリッドで尖頭器3点、イ-18グリッドで尖頭器2点、スクレイパー1点、石核1点など出土。出土層準の相異による尖頭器の形態の変異が問題になる。ア-20グリッド、イ-20グリッド、イ-21グリッドを中心とする遺物密集区とイ-18グリッド、ア-18グリッドを中心とする遺物密集区があることが判明。

8月14日 巨礫の分布と遺物密集区との関係から、古地理的に尾根状になった部分より少し低いところに点々と密集区が分布することがわかった。このことはこの遺物の性格上重要なことであると、この日参加した麻生 優さんより示唆される。

8月15日 午前中発掘。午後から埋めもどし。遺物密集区では相変わらず多量の遺物が出土。ほとんど尖頭器とその製作過程のチップ。この遺跡の性格にも関連するが、全日程を通して尖頭器が圧倒的に多い。しかも、ほとんど未完成ないし破損品である。ア-20グリッド、イ-20グリッド、ア-18グリッド、イ-18グリッドは発掘できず、来年再発掘することをきめる。台風の雨の中で埋めもどしに手まる。

8月16日 午前中埋めもどしと宿舎の片づけ。午後解散。台風のさ中の埋めもどしで予定より遅れたが、事故もなく発掘を終了する。

b. 第2回発掘

第2回池の平遺跡発掘は、1985年8月2日より9日まで、8日間の日程で行われた。この回の発掘では、前回の発掘地である大反地点に加えて塩くれ場地点の発掘も平行して進められた。発掘は6班6グリッドが編成された。ここではその様子を日を追って簡単に紹介する。参考は発掘期間中毎日発行された「池の平タイムス」による。

8月2日 午後1時、八千穂村福祉センター集合、合宿形式の発掘が始まる。主に現場の設営（テント・看板等の設営、グリッド測量）を行なった。途中にわか雨に悩まされる。夜は顔合わせの団結コンバ。

8月3日 午前9時、塩くれ場地点にてくわ入れ式を行なう。大反地点では前回埋めもどしの掘り上げ、塩くれ場地点では表採から始める。初日にもかかわらず各班から遺物が出土する。広

範囲な遺物の分布から大規模な遺跡である、との見通しが強くなる。この日からグリッドに雨よけのビニールハウスが取り付けられる。

8月4日 アー20グリッドから断面が非対称の尖頭器が出土する。これは前年のものに比べて時代の古いものであることが判明した。また大反地点と塩くれ場地点の地層の対比が明らかになる。

8月5日 大反地点アーコーディッドから使用された剝片が大量に出土。これにより、それまで石器の製作跡であるとされたこの場所が生活跡でもあったことが浮き彫りになる。また、塩くれ場における尖頭器には製作技法の差異による3つのタイプがあることがわかる。

8月6日 塩くれ場地点、大反地点の層序がほぼ確立する。また、出土した遺物の層準は、検討した結果、10の出土層準が確認される。

各班とも今回発掘できる最終到達層準を示し、そこで発掘を打ち切ることを確認する。

8月7日 アー20グリッドが明らかに技法の異なる2つの尖頭器が出土する。各グリッドからも使用された剝片が出土。塩くれ場地点では遺物分布の状態が明らかになる。この日から地質班による分析用試料の採取が始まる。

8月8日 午後から埋めもどしが始まる。しかし遺物密集区のアーコーディッドでは一日数百点の遺物が出土、このグリッドは人類考古特別班により遺物包含層の完掘を目指して発掘を延長する。

8月9日 埋めもどし終了。参加者のべ人数678人。多くの方の協力を得て、また一人一人が力を十分に發揮して、8日間に渡る第2回池の平遺跡発掘調査は無事終了した。

2 地 形

A. 立地・所在地

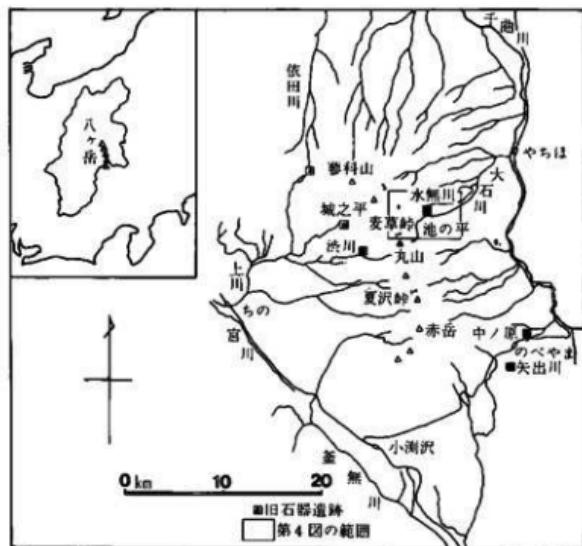
八千穂村池の平遺跡群は、長野県東部にある八ヶ岳火山の北東麓に位置する。北東麓縁辺には千曲川が北流し山麓をいくつかの河川が南西から北東方向に千曲川にそいでいる。遺跡は、これらの河川のうち、水無川と大石川にはさまれた帯状の地域の標高1,300m~1,800mにかけて点々と立地しており、池の平遺跡群を構成している。

1983・84年の発掘は、大反遺跡及び塙くれ場遺跡において行われた。両遺跡とも、国道299号線から奥地林道大石川線へ通ずる林道大河原峠線沿いの標高1,650m付近に位置する。

本遺跡は行政区画上、南佐久郡八千穂村大字八ヶ岳下2049番地にあり、八千穂村村有林内の林地および原野である。

B. 遺跡群周辺の地形

遺跡群が立地する周辺の地形を構成するものは、主に北八ヶ岳火山に由来する火山噴出物とそ



第3図
池の平遺跡
群位置図



第4図 池の平遺跡群およびその周辺

これらを挟在する水成堆積物であり、地形は次のように区分される。すなわち、i) 北八ヶ岳山陵部、ii) 2,100m高原面、iii) 開析山麓緩斜面、iv) 松井面、v) 池の平溶岩面である。

i) 北八ヶ岳山陵部は蓼科山(2,350m)から茶臼山(2,360m)に至る稜線部分で、高山帯である。急峻な山腹をもついくつかの独立した峰を形成し、原生林と一部の露岩地帯とからなる。後述するとおり、これらの峰は、後期更新世の火山活動による熔岩円頂丘である。

ii) 2,100m高原面は、上述熔岩円頂丘の基部をなす高原状の平坦面で、麦草峠や雨池などの付近に広く発達する。草原や森林に被われているが、小規模な湿地や池が多く存在している。これらの凹地のうち、雨池などは明らかに爆裂火口の形態をもち、後述する後期更新世の最末期の火山活動に由来するものである。

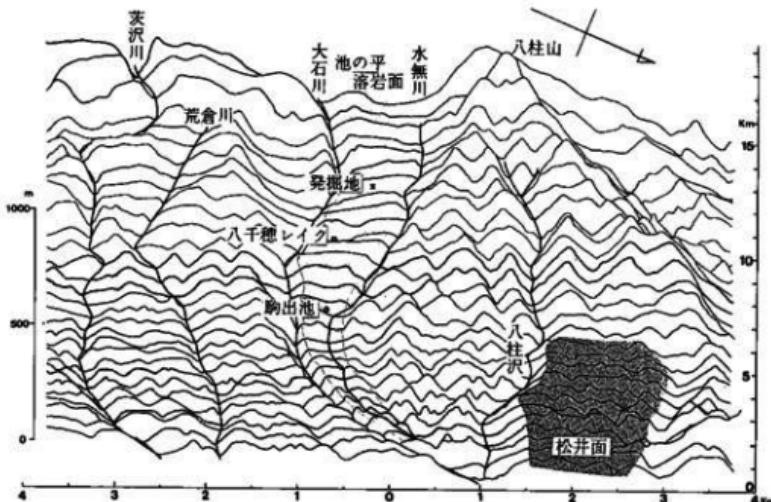
iii) 開析山麓緩斜面は、この地域の大半を占める地形であり、下部更新統の火山噴出物より構成される。大石川・水無川・八柱沢をはじめ、深い谷が南西から北東方向に刻まれている。後述の池の平熔岩も南西から北東方向に分布していることから、溶岩堆積前には同様な方向に深い谷が存在していたと推定される。

iv) 松井面は、発掘地の北東にある八千穂村松井付近の標高1,140~990mの平坦面であり、北東方向に約4度傾斜している。後述の松井くされ疊層より構成される。

v) 池の平熔岩面は、池の平遺跡群が立地している地形面である。周囲の開析山麓斜面に較べ

てはるかに平坦な地形(平均傾斜6.7度)であり、南西—北東方向の帯状の地形面である。後述の池の平熔岩より構成される。この地形面をさらにくわしくみると、平坦な部分と比較的急な部分とがあり、標高1,530m付近(八千穂レイク西側)標高1,530m付近(駒出池西側)を境にして、平坦面が三分される。このことは、この地形面が池の平熔岩のいくつかのflow unitによって構成されていることを示している。

以上の地形区分のうち、iii)・iv)・v)に関しては、第5図の投射地形断面図にその区分を示した。



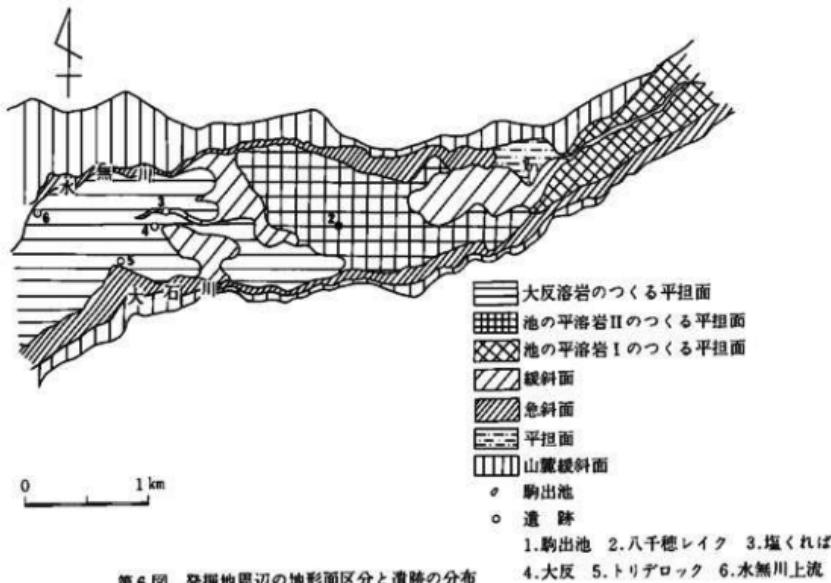
第5図 発掘地周辺の投射地形断面図

C. 発掘地の地形

大反遺跡・塩くれ場遺跡は、大反熔岩のつくる地形面上に位置している。大反熔岩は、池の平熔岩の1つのflow-unitであると考えられ、およそ標高2,250mから1,550mにかけて巾800m、長さ4.5kmの範囲に分布している。大反熔岩のつくる地形面は、北側端崖の水無川から南側端崖の大石川にかけて南北方向の傾斜角が2°、熔岩の流下方向である東西方向の傾斜角が8.5°で、地形断面図（第5図）にもあらわされているように、周辺地形に比べ比較的平坦な緩斜面を形成している。

池の平熔岩のつくる地形面には、いくつかの緩斜面と急斜面が認められ、何枚かの熔岩流が、茶臼山付近を噴出源とし、ゆるやかに蛇行するように流下方向を変えながら、ほぼ北東—南西方向に流れたものと推定される。標高ごとに、流下方向の変化を第1表に示す。大反熔岩の傾斜角は、池の平熔岩の平均傾斜角7.6°に比べやや大きく、大反熔岩のつくる地形面は、池の平熔岩全体からみるとやや急な斜面をつくっている。

大反遺跡は、この大反熔岩のつくる地形面のほぼ中央部、標高1,660m、北側端崖の水無川より420m南に位置している。塩くれ場遺跡は、水無川より270m南に位置しており大反遺跡より北東方向に120mの地点にある。これらの遺跡のある地形面上には、空中写真によると、何本からの谷



第6図 発掘地周辺の地形面区分と遺跡の分布

第1表 池の平溶岩の流下方向の変化と傾斜角

標高(m)	流下方向	傾斜角(°)
2,370-1,950	東西	6
1,950-1,750	北東-南西	9
1,750-1,550	東西	8.5
1,550-1,450	東西	5.7
1,450-1,300	東北東-西南西	9.0
1,300-1,100	北東-南西	5.0

が形成されていることがわかる。塩くれ場遺跡は、この谷の中に位置しており、ほぼ東西方向にのびるこの谷は八千穂レイクまで続いている。大反遺跡は、大反熔岩のつくる平坦面上に位置しているが、すぐ南東方向には緩斜面が形成されている。この緩斜面の傾斜変換線は明瞭ではないが、ゆるやかな斜面は南へむかって高度をおとし急斜面となって大石川の谷へと続いている。谷の形成は雨水等の侵食によるものと推定されるが、緩斜面は、熔岩が流下した時の堆積面を反映したものではないかと考えられる。いずれにしろ、大反熔岩のつくる平坦面の中で、谷および緩斜面との境付近に遺跡が分布することは、立地条件を考察する上で興味深い(第6図)。

3 地 質

A. 地質概要

a. 八ヶ岳火山の地質概要

八ヶ岳火山は、南北21kmにわたって標高2,000mをこえる火山が、東西2重の弧をえがく火山列である。この火山列はその地形および構成地質から南、中、北八ヶ岳に三分される。それぞれの境界は南から夏沢峠と麦草峠（大石峠）である。

河内（1961）によれば、八ヶ岳火山の活動は、まず北八ヶ岳で始まり、その後東列に沿って中八ヶ岳、南八ヶ岳へと活動の中心を移し、さらに、西列に沿って再び北八ヶ岳へ移り活動を終息したとされている。したがって、北八ヶ岳は、新・旧2回の火山活動が重複している場所といえる。

この火山山麓には、火山活動に伴って湖盆が形成され、ここに膨大な火山噴出物とこれらを挟在する湖成層が堆積している。これらの地層は八ヶ岳団体研究グループ（1982）及び同団研のその後の研究により、第2表に示すような層序区分がなされている。すなわち、風成ローム層は2つの不整合によって大きく3分され、最下位のローム層はさらに2分される。ローム層区分は下位より八千穂ローム層、松井ローム層、広瀬ローム層、佐久ローム層である。火山灰層位学の手法によって山麓の堆積物も区分され、八千穂ローム層を挟在する水成層は八千穂層群に、松井ローム層を挟在する水成層は松井くされ疊層に、広瀬ローム層を挟在する水成層は南佐久層群に区分されている。佐久ローム層が被覆および削剥・挟在する水成層は主として段丘疊層であり、段丘区分によって層序の基礎が立てられている。

また、これらの水成層は、化石や放射年代の測定によって年代が推定され、第2表に示すとおり、松井くされ疊層以下の各層は前期更新世に、南佐久層群は中期更新世に形成された地層とされている。

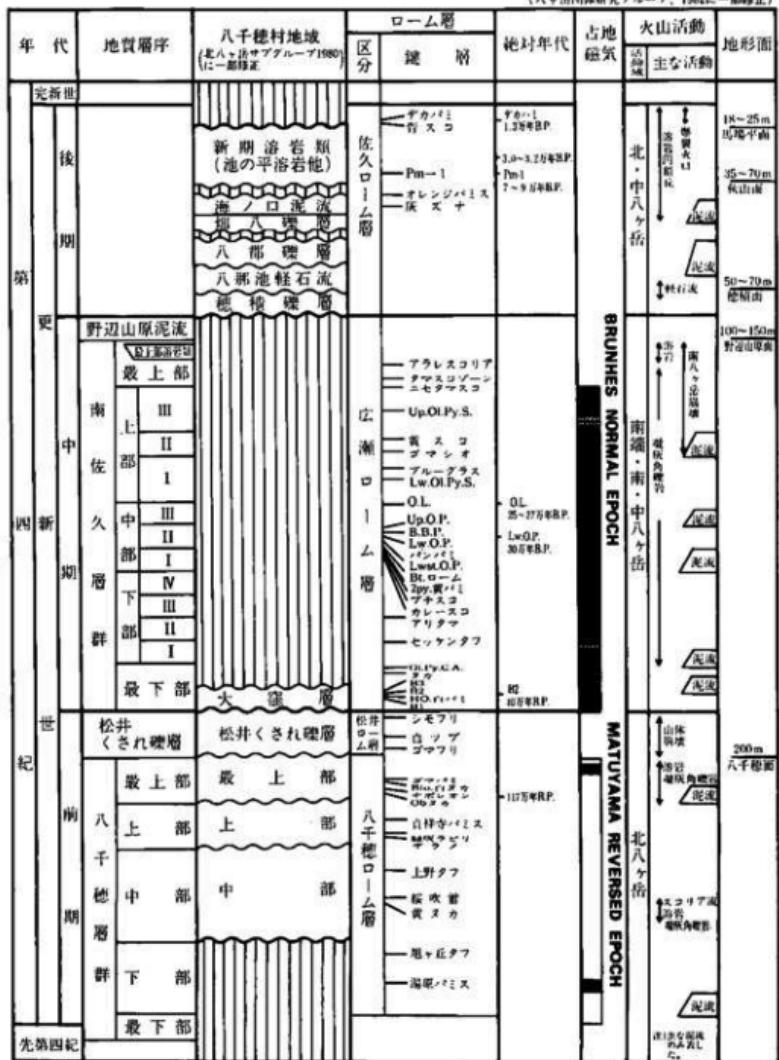
さらに、八ヶ岳団体研究グループ（1982）によれば、山麓に形成された湖盆は、前述の火山活動の中心の移動に伴って変遷したという。すなわち、火山活動の中心が北八ヶ岳にあった前期更新世には、その山麓に当る北麓や東北麓に堆積盆が形成され、中期更新世には、火山活動の中心が南へ移動するとともに、堆積盆も東麓から南東麓へと移動している。後期更新世に火山活動の中心が再び北八ヶ岳にもどると同時に、湖盆も北八ヶ岳の西麓に移っている。このように、湖盆の変遷は火山活動と密接な関係にあることが知られている。

b. 八千穂村の地質

発掘地を含む八千穂村に発達する第四系は、八千穂層群、松井くされ疊層、大窪層および上部更新統の段丘疊層、溶岩類である（第7図）。

第2表 八ヶ岳山麓の第四系層序表

(八ヶ岳固体研究グループ、1982年に一部修正)

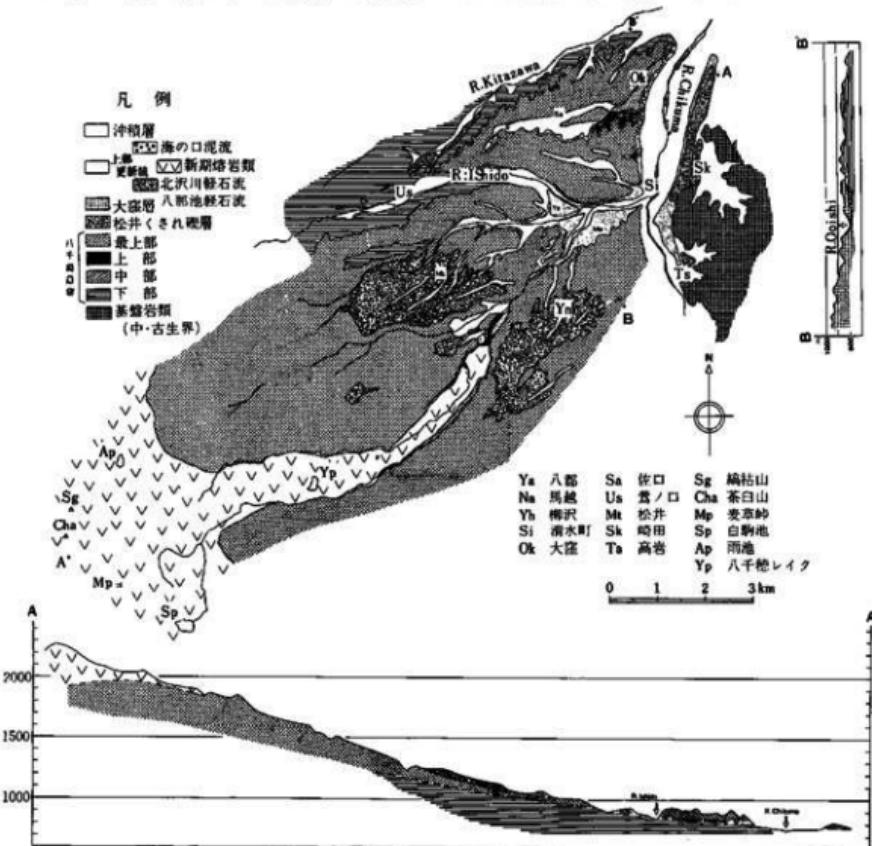


■ Normal Polarity ■ Intermediate

□ Reversed Polarity

八千穂層群は不整合により5累層に区分されているが、本地域にはそのうち中部累層以上が分布する。中部累層は、岩相から2部層に区分される。下部部層は主として火山角礫岩層や降下スコリア層より成り、上部部層は下位よりスコリア流堆積物、降下スコリア層、軽石層より成る。上部累層は主として角閃石安山岩質の泥流堆積物や降下スコリア層からなる。最上部累層は、本地域において最も広い分布を示す地層であり、岩相や不整合などによって4部層に区分されている。主として降下スコリア層や火山角礫岩層、砂礫層、熔岩などから成る。

八千穂層群は前期更新世の北八ヶ岳火山の活動に由来する地層であり、本地域の主要地形である開析山麓緩斜面を構成する。また、麦草峠や雨池がある2,100m高原面にも点々と露出することから、この面の原面は、八千穂層群の開析をまねがれた緩斜面である可能性がある。



松井くされ礫層は、松井面を構成する扇状地性の礫層であり、風化の進んだ安山岩礫(いわゆるくされ礫)を多量に含む。

大窪層は、八千穂村大窪周辺にのみ発達する段丘礫層、軽石層、泥流堆積物などにより成る一連の地層であり、比高60~80mの段丘面(大窪面)を構成する。本層を整合におおう火山灰層を鍵層として、本層は南佐久層群中の最下部累層に対比される。

上部更新統は、千曲河沿いに発達する段丘礫層や後期更新世の北八ヶ岳火山活動に由来する噴出物などからなる。それらは、下位より穂積礫層(八ヶ岳団体研究グループ、1976)、八都礫層(新海、1973)、畠八礫層(八木、1928)、海の口泥流(八ヶ岳団体研究グループ、1976)、池の平熔岩(稻垣、1972)を含む新期熔岩類及び佐久ローム層(八ヶ岳団体研究グループ、1976)である。新期熔岩類は、後期更新世の北八ヶ岳の熔岩円頂丘の形成にかかわる熔岩類であり、北八ヶ岳の山麓部と熔岩流面を形成している。池の平熔岩は、含かんらん石複輝石安山岩熔岩で、いく層かのflow-unitからなり、発掘地に分布する大反熔岩もそのうちの一層である。これらの熔岩流の噴出源はいずれも茶臼山付近と推定されている。

B. 佐久ローム層

八ヶ岳周辺には、後期更新世の風化細粒火山灰層が厚く堆積している。これらの火山灰層は、佐久ローム層と呼ばれている。佐久ローム層は、その大半が八ヶ岳火山の噴火活動によってもたらされたものである(八ヶ岳団体研究グループ、1986投稿中)、本層は、顕著な風化帯または斜交関係によって、大きく4層に区分されている(第3表)。

下部層は、主として八ヶ岳東麓に発達し、特徴的な軽石層“オレンジバミス”(般島ほか、1968)(以下^{**}内の名称はフィールド・ネームを示すものとする)をはさんでいる。中部層には御岳火山起源の“Pm-1”、“Pm-1A”、“Pm-2B”、“Pm-3D-F”(酒井・下野、1972)軽石層や、立山火山に起源をもつ“Dpm”(中谷、1970)軽石層がはさまれており、八ヶ岳起源の粗粒な降下火碎物は、ほとんどみられない。

上部層は、発掘地の周辺が最も厚く、全体の層厚は3m近くに達する。上部層は、軽微な斜交関係によって5部層に区分される。上部Ⅰは、全体にやや暗色を帯びた褐色ローム層である。下位の中間ローム層とは不規則な凹凸をもつ明瞭な境で接している。本層上半部には青灰色の火山礫が点在している。また、中間には火山ガラスがわずかに含まれる層準がある。上部Ⅱは、青灰色火山礫層“青スコ”(八ヶ岳団体研究、1976)から成っている。“青スコ”は、北東麓では4層以上のfall-unitから成っている。上部Ⅲは、黄褐色ないし褐色のローム層で、比較的細粒である。上部Ⅳ

* フィールドネーム“B₁₋₃”とよばれる中部地方における広域火山灰層で、年代は約40万年前とされている。

** 河内(1961)は本熔岩を池の平泥流としている。河内(1974)は同じものを池の平牧場熔岩としているので稻垣(1972)に従った。

は黄白色軽石層“デカバミ”(飯島ほか、1968)

からなっており、両輝石をふくむ発泡のよい軽石と、黒曜石片をふくむ。また、本層の中部以上の層準には火山ガラスの密集層が確認されている(小浦、1985 MS.)。“デカバミ”的分布は八那池から抜井川流域までであり、その噴出源は発掘地のすぐ西側の雨池周辺であると推定されている(福島、1974 MS.)。また、本層中の黒曜石のフィッショング・トラック年代は、およそ13,000±650Y.B.P.(SUZUKI、1974)という値が報告されている。上部Vは、黄色褐色の細粒火山灰層からなっており、八那池では青灰色の火山疊層“青ヒゲ”をはさんでいる。佐久ローム層最上部は、黄褐色で軟質なローム層である。全体に極めてルーズである。

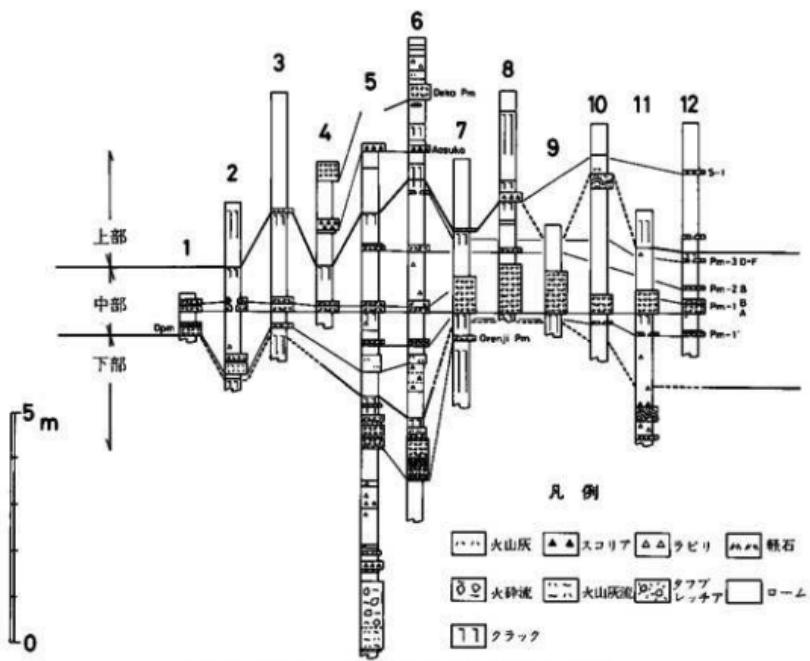
これらの佐久ローム層を覆って、完新世の黒色火山灰層が分布する。黒色火山灰層は、佐久ローム層を不整合に覆い、現在の地形面を形成している。

下部層以上の佐久ローム層と、八ヶ岳東麓の相木川に発達する段丘との層序関係は、第9図に示すとおりである。各段丘とそれを覆うローム層の層序区分との関係はそれぞれ一致している。

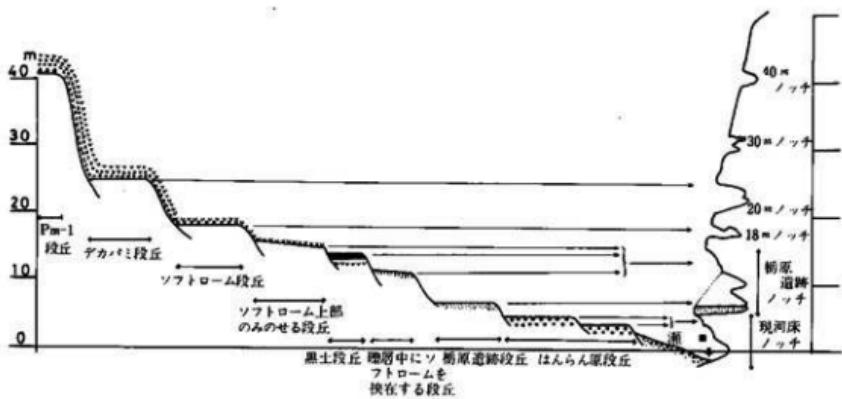
第3章-Eでは、佐久ローム層の砂粒分析結果について報告している。これによれば、“デカバミ”層準及びその直上、“青スコローム”の中位、“Pm-3 D-F”と“Pm-2B”的あいだ、さらに“Pm-2 B”的直下の層準にガラス質火山灰層がはさまれていることを示している。これらの火山灰層のうち、下位の2層は、木村(1986、投稿中)のO-Tf(御岳高原火山灰層)およびK-Tf(柿沢火山灰層)にその層準から対比される。また、“デカバミ”直上のガラス火山灰層は、町田ほか(1980)によれば、A T(姶良一丹沢火山灰層)に対比されている。小浦(1985、第四紀学会講演要旨集15)は、この層準中から尖頭器が出土することから、A T火山灰層と火山ガラスの屈折率はおなじものの、それより新しい層準であることを指摘している。今回、“青スコローム”中から僅かではあるが火山ガラスがみつかったことは、小浦の結論を指示するものと考えられるがこの問題については、さらに検討を要する。

第3表 佐久ローム層の標準層序

地質時代	層序区分	層名	層厚	基準
中新世	上部			
	上 部 層	V 青 色 層 青 色 層 1	150 (cm)	黄褐色の軽石でボソボソした層理風化水由来 M 上部I-Hは発達すると全体にクラックが発達する。
後	久 留 中 部 層	Pm-3D-F Pm-2B Pm-1B Pm-1A	200	黄褐色細粒風化火山灰。赤かっ色スコリア、青灰色スコリアが点在する。西側では青灰色のやや粗い風化火山灰となる。上部には風化帯が発達する。
新 世	下 部 層	Pm-E Dpm	150	黄褐色ないし赤褐色の赤土質細粒風化火山灰。北側では赤かっ色スコリアが点在する。Pm-1A付近が早く発達する地域では、全体に地下水面の影響とみられる現象がすみ、灰色を呈する。
新 世	上 部 層	E M	300	黄褐色ないし赤褐色の細粒風化火山灰。風化は比較的良い。南及び北東では互たんし、赤褐色の粘土質風化火山灰(ナッコローム)がこの層準に対比される。



第8図 佐久ローム層対比柱状図(八ヶ岳団研, 1986)



第9図 ノッチと段丘の対比 (八ヶ岳団体研究グループ, 1978)

C. 発掘地周辺の地質

遺跡群が立地する地域を形成している池の平熔岩は、その地形的特徴から、いくつかのflow-unitより構成されることはすでに述べた。発掘地に分布する大反熔岩は、そのflow-unitの1つである。大反熔岩はより下位の熔岩については、その地形的特徴及びローム層の被覆関係から、2つのflow-unitより構成されることが明らかになった。それらのflow-unitについて下位より、池の平熔岩I及びIIと呼ぶ。

池の平熔岩Iは、含かんらん石複輝石安山岩熔岩で、標高1,000mの大石川・水無川合流点付近から標高1,300mの駒出池付近にかけて分布する。層厚は約25mである。被覆するローム層は、“Pm-1”に対比される黄白色うりだね型軽石層を挟在しており、中部佐久ローム層以上の層準に対比される。

池の平熔岩IIは、含かんらん石複輝石安山岩熔岩で標高1,300mの駒出池付近から標高1,530mの八千穂レイク付近にかけて分布する。層厚は約15mである。被覆するローム層は、下位より、紫灰色火山灰層を挟在する暗褐色から淡赤褐色ローム層、含かんらん石複輝石安山岩の角礫を多く含む暗紫灰色火山灰層、青灰色スコリアまじりの暗褐色から黄褐色ローム層、暗紫灰色火山灰層、黄褐色ローム層、明黄褐色軽石層である。これらのうち最上位の明黄褐色軽石層は、“デカバミ”に対比される。また、ローム層中に挟在される角礫を多く含む層準の礫は大反熔岩と岩質が類似しており、おそらく大反熔岩より由来するものと考えられる。すなわち、この角礫を多く含む層準が、大反熔岩流下時の層準を表しているものと推定される。以上のローム層は、“Pm-1”よりも上位の中部佐久ローム層から上位佐久ローム層に対比される。



第10図 池の平熔岩と被覆するローム層

大反熔岩は、含かんらん石複輝石安山岩熔岩で標高1,530m以上に分布し、発掘地に分布する熔岩である。層厚は約20mである。被覆するローム層は、上部佐久ローム層II以上に対比される(詳しくは次項で述べる)。

以上の各熔岩とローム層の被覆関係をまとめ第10図に示した。

D. 発掘地の地質

a. 層序の概要と対比・年代

発掘地では、大反熔岩上に厚さ約1~3mのローム層および黒色火山灰層が重なる。

ローム層は、下位より“青スコローム”、“デカバミ”、“デカバミローム”、“黄モヤ”、“ソフトローム”に区分され、“ソフトローム”的下底は不整合(斜交関係)によって境されている。これらのローム層は、第4表のように、佐久ローム層の模式層序と対比される。

黒色火山灰層は、下位より“黒モヤ”、“黒ボク”、“黒土”と呼ばれる黒褐色~黒灰色の土壤化した火山灰層であり、I・II・IIIの3層に区分した。IIの“黒ボク”中には、火山ガラスを含む灰褐色火山灰層(“こしあんアッシュ”)を挟在する。

発掘地に分布する佐久ローム層の堆積(もしくは降下)年代については、上部佐久ローム層IV(“デカバミ”)は前述のように、約13,000年前である。最上部佐久ローム層については、直接には測定されていないが、八ヶ岳団研(1978)によれば、千曲川支流の北相木川沿いに発達する段丘とノッチ、火山灰層、人類遺跡の年代などから、約11,500年前と推定されている。(第11図)。

b. 地質各説

■大反熔岩

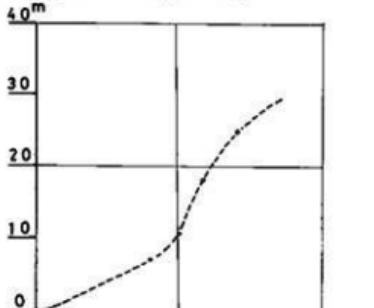
発掘地周辺のゆるやかな斜面を形成している含かんらん石複輝石安山岩熔岩である。大反地点では直接地表に露出している部分もあるが、塩くれ場地点では地表下3m付近より下に分布し、厚くローム層におおわれている。本熔岩は、現在の縄枯山・茶臼山付近より流下してきものと推定される。

■上部佐久ローム層II・III “青スコローム”

やや固結のよい火山灰黄褐色ローム層である。径1cm前後の青灰色~緑灰色の火山礫を多く含む。本層中には、暗青灰色粗粒火山灰層(“青ハイ”)が挟在される。

■上部佐久ローム層IV “デカバミ”

本層は岩相上A、Bの2層に区分される。



第11図 ノッチと段丘の比高から推定される北相木川の下刻曲線
(八ヶ岳団体研究グループ、1978)

ソフトロームの年代は、このローム層が整合にのる18m段丘の形成年代をこの図から引くと、約11,500年前と推定される。

A層

A層は、径1cm～4cmの明黄褐色軽石を含む黄褐色ローム層である。軽石中にはしそ輝石が含まれ、軽石の形は角ばっている。径5mm～2cmの灰色～青灰色安山岩礫および径5mm大の黒曜岩片を含む。本層中に火山ガラス密集層である池の平火山灰Ⅰを挟在する。

B層

B層は岩相よりさらにⅠ、Ⅱに区分される。

BⅠ

BⅠ層は、しそ輝石を含む明黄褐色軽石層である。軽石の径は1cm～8cmで、その形は角ばっている。軽石間の空隙が目立つことが特徴で、基質は少量の淡褐色ロームよりなる。5mm～1cmの灰色～青灰色の火山礫が点在し、径1cm～2cmの黒曜岩片を多く含む。

BⅡ

BⅡ層は、岩相よりさらに上半部・下半部に区分される。

下半部は、径5mm～5cmの明黄褐色軽石が散在する黄褐色ローム層であり、軽石中にはしそ輝石が含まれる。径5mm～4cmの青灰色～緑灰色の火山礫が点在し、径1cm大の黒曜岩片が含まれる。本層の上部は火山ガラスを含み、軽石の含有量が少ない(池の平火山灰Ⅱ)。なお、本層を含め上位の地層中から遺物が出土した。

上半部は、径5mm～2cmの明黄褐色～黄色の軽石を含む明褐色ローム層であり、軽石中にはしそ輝石が含まれる。径5mm～2cmの灰色～青灰色の火山礫が点在し、径1cm大の黒曜岩片を含む。本層中には火山ガラスの密集層(池の平火山灰Ⅲ)があり、その層準より上位はやや固結が悪い。

■上部佐久ローム層Ⅴ

発掘地においては、“デカバミローム”と“黄モヤ”的2層に区分される。

“デカバミローム”

径2cm～3cmの明黄色軽石を含む明黄褐色ローム層である。軽石は“デカバミ”中のものと同じ質のものであるが、形は丸味をおびている。径5mm大の青色および赤色の火山礫が点在し、黒曜岩片を含む。本層は大反地点では直接大反熔岩をおおう所が多く、径20cm前後の大反熔岩の礫や軟化した安山岩礫などを含んでいる。

“黄モヤ”

やや土壤化した暗黄褐色ローム層である。径2mm～1cmの暗黄色軽石が点在し、径5mm大の赤色岩片を含む。下位の“デカバミローム”との境界は起伏に富んでおり、層厚も0～20cmと変化が激しい。

■最上部佐久ローム層“ソフトローム”

固結の悪い黄褐色軟質ローム層である。上部佐久ローム層を不整合におおう。径1cm大の赤褐

色および青灰色のスコリアが点在する。

大反地点および塩くれ場地点より南西20m付近の林道沿いで局所的に分布している。層厚変化が激しく、上半部に風化帯が形成されている。

黑色火山灰層

発掘地における本層は、岩相より、I・II・IIIの3層に区分される。

■黒色火山灰層I “黒モヤ”

径5mm～5cmの風化した安山岩礫や赤色岩片を多く含む、やや粘土化した黒灰色火山灰層である。径2mm～1cmの黄色軽石が点在する。下位のローム層をブロック状にとり込んでいるところが見られ、かく乱された様相を示す。

■黑色火山灰層II “黒ボク”

植物片を含む黒色火山灰層である。径5mm~1cmの明黄褐色軽石が点在し、径1cm~5cmの灰色・赤褐色安山岩礫が含まれる。本層中には、火山ガラスを含む、やや粘土化した灰褐色火山灰層“こしあんアッシュ”が挟在される。

■黑色火山灰層III “墨土”

黒褐色火山灰層である。径1.5cmの明黄褐色鞋石が点在し、径1cm~8cmの赤色~灰色安山岩礫を含む。本層は直接表土におおわれる。

C. 発掘地付近の地質構造

大反壘岩は、大反遺跡で高まりをつくっており、地表に露出するところもある。北東に標高を下げていくが、大反一塙くれ 第4表 発掘地の層序表

下がっていくが、太反一塙くれ 第4表 発掘地の層序表

する。このように、“青スコローム”および“デカバミ”は塩くれ場地点において大反熔岩のつくる谷を埋めるような堆積構造を示し、堆積環境も類似していたと推定される。

それに対して、“デカバミローム”および“黒モヤ”は、堆積構造が異なる。すなわち、大反遺跡から塩くれ場遺跡付近までほぼ同じ層厚で原地形を被覆しているが、塩くれ場遺跡では削削されてほとんど分布しない。

“ソフトローム”は、その分布が限られており、発掘地近くの林道沿いで2ヶ所確認される程度である。“デカバミローム”および“黒モヤ”が一部侵食された凹所にのみ分布する。

黒色火山灰層は、三層とも大反遺跡から塩くれ場遺跡にかけての発掘地付近全域に分布する。

d. 各グリッドの地質の特徴

以上述べてきたように、各層の分布が異なるため、各グリッドに発達する地層も各々ちがっている。以下、各グリッドにみられる地質の特徴についてまとめる。

〈塩くれ場遺跡〉

塩くれ場遺跡付近では、大反熔岩は地下約3m付近にあり、それを“青スコローム”“デカバミ”が被覆し、“デカバミローム”も部分的に重なっている。さらにその上位を“黒モヤ”・“黒ボク”・“黒土”的黒色火山灰層が、東にやや斜交し重なる。表土は、これら各層の侵食面に堆積し、現地表を形成している。この様子は、タ-10グリッドにおいて顕著にみられ、第13図の東南東一西北西方向のグリッド側壁スケッチの地質断面に示されている。

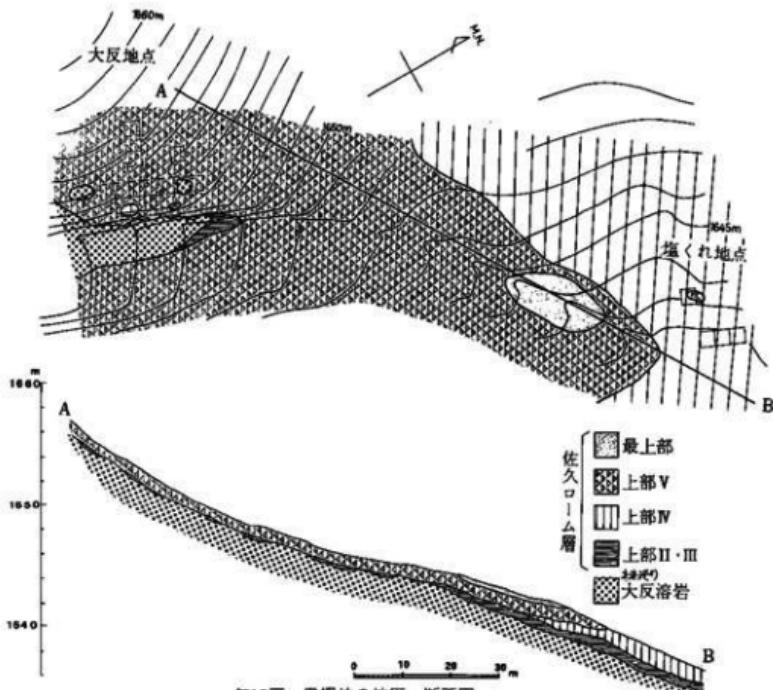
タ-7・8・9グリッドでは、侵食により上部の層が欠如している。すなわち、タ-7グリッドでは“黒ボク”的一部と“黒土”が、タ-8・9グリッドでは、“デカバミBII”的一部と“黒モヤ”・“黒ボク”・“黒土”が欠如している。これらの様子は第14図の北北東一南南西方向のグリッド側壁スケッチの地質断面に示されている。

〈大反遺跡〉

こここの地点では、大反熔岩が高まりをつくっており、凹凸がはげしい。これを“青スコローム”・“デカバミローム”・“黒モヤ”・“ソフトローム”および黒色火山灰層が被覆している。その様子は第15図の北北東一南南西方向のグリッド側壁スケッチの地質断面に示した。

大反熔岩のつくる高まりは、イ-22グリッドの山側からイ-17グリッドの方向へ延びており、イ-22グリッド西側やイ-17グリッドでは、熔岩が直接地表に露出している部分もある。これらの熔岩露出地から道路側へは、ローム層が次第に厚くなり、イ-21グリッドでは1.5m以上に達する。これらのローム層中には、山側の熔岩の尾根状の高まりから崩落したと推定される巨礫が挟在される。

巨礫を挟在する層準は、“デカバミローム”と“黒モヤ”層準である。“デカバミローム”の中では、特に下底部と上部に多く、礫径は20cm程度のものが多い。“黒モヤ”中のものは、“黒モヤ”

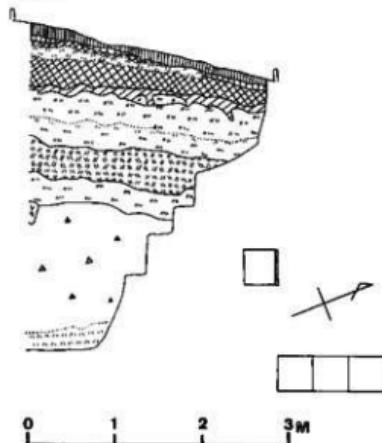


第12図 発掘地の地図・断面図

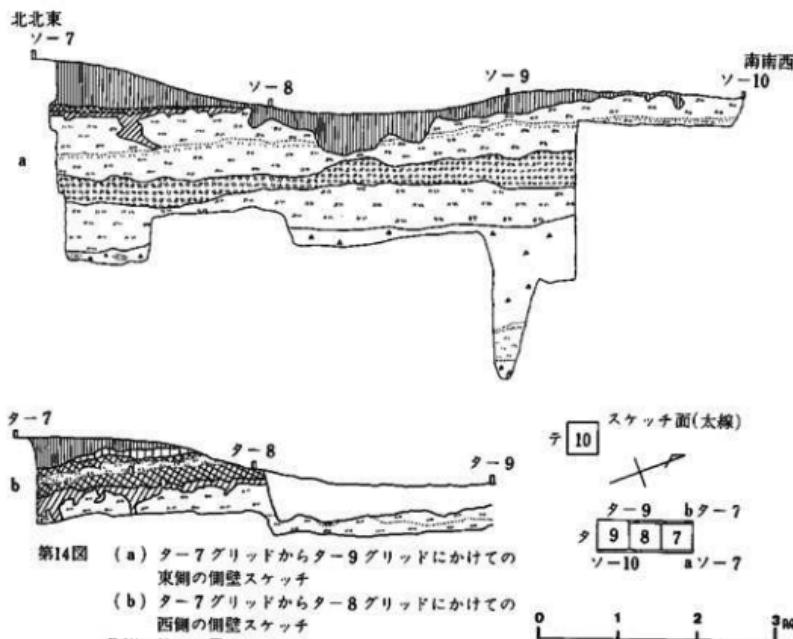
直上にのるものが多く、疊径は大きく、1mを越えるものがある。

巨礫の平面的分布には、2つの特徴があり、そのうちひとつは、旧石器遺物を産する地点(ユニット)には分布しないということである。また、第2には、大反熔岩の突出した尾根上の高まりの軸からはずれた斜面上にも分布しない。

これらのことから、巨礫の形成は、“デカバミローム”堆積時および“黒モヤ”堆積直後の2回にわたり、尾根を作っていた大反熔岩が崩落したことによると推定される。



第13図 テー10グリッドの北側の側壁スケッチ
凡例は第4表層序表に同じ



第14図 (a) ター7グリッドからター9グリッドにかけての
東側の側壁スケッチ
(b) ター7グリッドからター8グリッドにかけての
西側の側壁スケッチ
凡例は第4表層序表に同じ

E. 佐久ローム層の砂粒組成

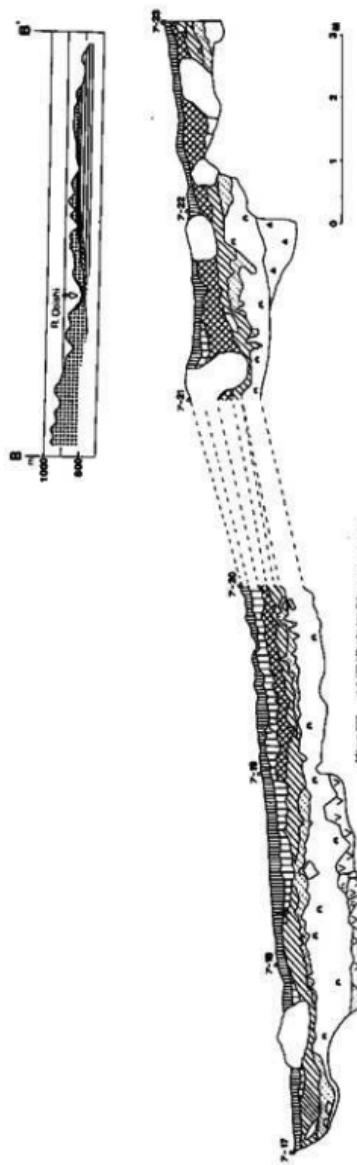
発掘地に分布する佐久ローム層上部から最上部の重鉱物組成は、すでに報告した（八千穂村池の平発掘調査団、1984）。今回は、1984年の発掘調査の層序の成果に基づき、模式地である八那池の佐久ローム層と発掘地の佐久ローム層の対比を目的として火山灰の分析を行った。

試料は平均3~5cmのブロックで連続して採取し、発掘地と八那池より計245サンプルの試料を得た。分析方法は、1/4~1/8mmの粒度の砂粒を双眼実体顕微鏡で約400~600粒鑑定する、野尻湖火山灰グループ（1980、1984）の方法に従った。砂粒は、重鉱物・軽鉱物・火山ガラス・岩片類に分類し粒子数百分率で表示した。尚、岩片の分類は、主に色調・表面形態から第5表のように6グループに区分した。

分析は、各地でグループ毎に分担し、検鏡結果をもちより検討した。本論の執筆者および火山灰分析参加者を末尾に記す。

a. 佐久ローム層の砂粒組成

佐久ローム層は、下部・中部・上部に区分されている（八ヶ岳団体研究グループ、1986、投稿中）。本論では八那池における中部II~上部佐久ローム層について検討した。砂粒組成を第16図に示す。



第15図 試験溝東側壁スケッチ

イー17グリッドからイー23グリッドにかけての東側（ア列縫）の側壁のスケッチ。凡例は層序表と同じ。各坑の間隔は3m。
杭から向って右側がその杭で表示されるグリッド。イー17とアー18の間がイー18の東側の壁。

第5表 岩片の分類

	不透明	半透明～透明
白色系 (白・黄・灰色)	シロ岩片	ハイ岩片
黒色系 (黒・灰色)	クロ岩片	
赤色系 (赤・橙色)	アカ岩片	オレンジ岩片
緑色系 (緑・緑灰色)	ミドリ岩片	

中部佐久ローム層

全体的に上位に向かって普通輝石・紫蘇輝石・シロ岩片が増加する。また、クロ岩片は“Pm-2B”より下位で減少する。クロ・アカ・オレンジ・ハイ岩片は3層準に、比較的含有率の高い層準(以下ピークと略す)がみられる。これらの層準は長石の減少する3層準に対応している。また“Pm-2B”的上位にかんらん石を含む層準がみられる。バブルウォールタイプの火山ガラスが3層準に含まれている(“Pm-1A”直上・“Pm-2B”直下・“Pm-2B”から“Pm-3D-F”的間)。

上部佐久ローム層

鉱物粒は普通輝石・紫蘇輝石・長石からなり、“青スコ”上位にはかんらん石が含まれる。“デカバミ”的下位には角閃石が含まれる。長石は鍵層に多く含まれる傾向を示す。火山ガラスは“デカバミ”中、“青スコ”上位の2層準にみられる。また、かんらん石を含む5層準がハイ岩片の増加傾向とほぼ一致している。

以上が全体的な特徴であるが、上部III・IV・Vについては、発掘地のローム層と対比を行うため、砂粒組成の特徴に基づき分帯をした。すなわち、上部IIIをa・b・cの3層に、上部IVをdに、上部Vをe・f・g・hの4層に区分した。以下その特徴について述べる。

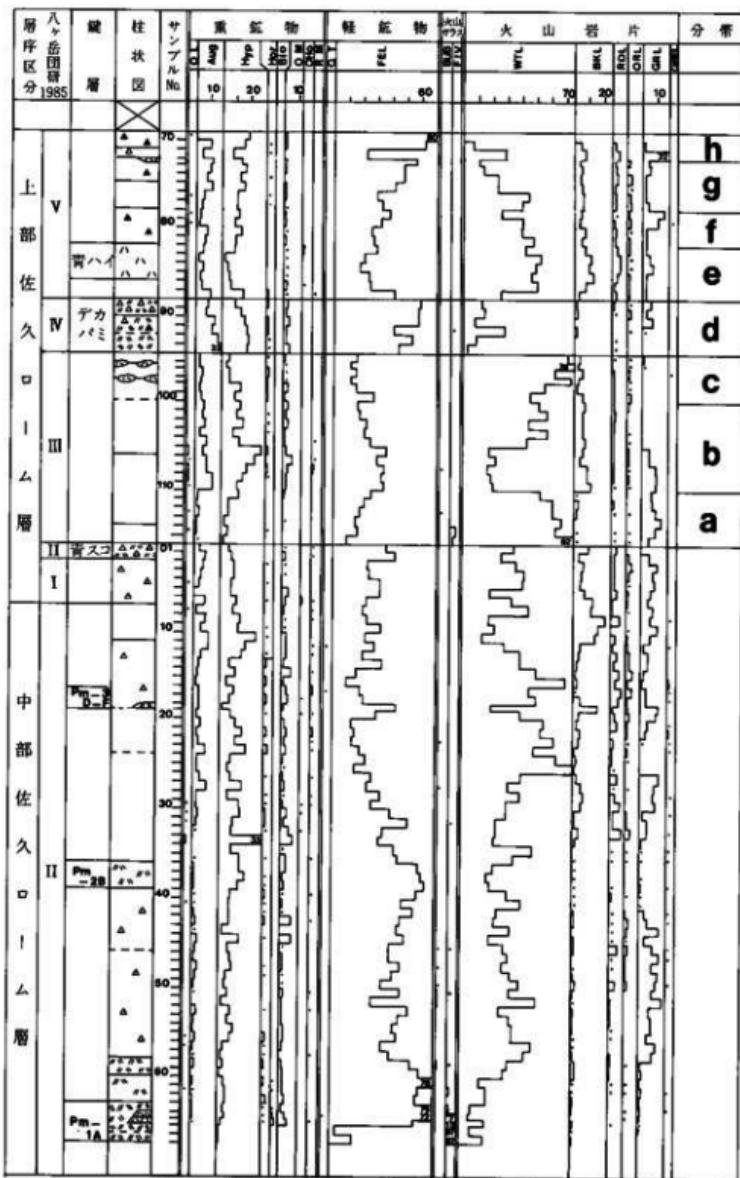
a：紫蘇輝石・長石は上位に向かって増加する。角閃石・かんらん石・火山ガラスを含み、シロ岩片が多くハイ岩片にピークがある。

b：普通輝石・長石が上位に向かって減少する。紫蘇輝石・シロ岩片にピークがある。下部にかんらん石・角閃石・ハイ岩片を含む。

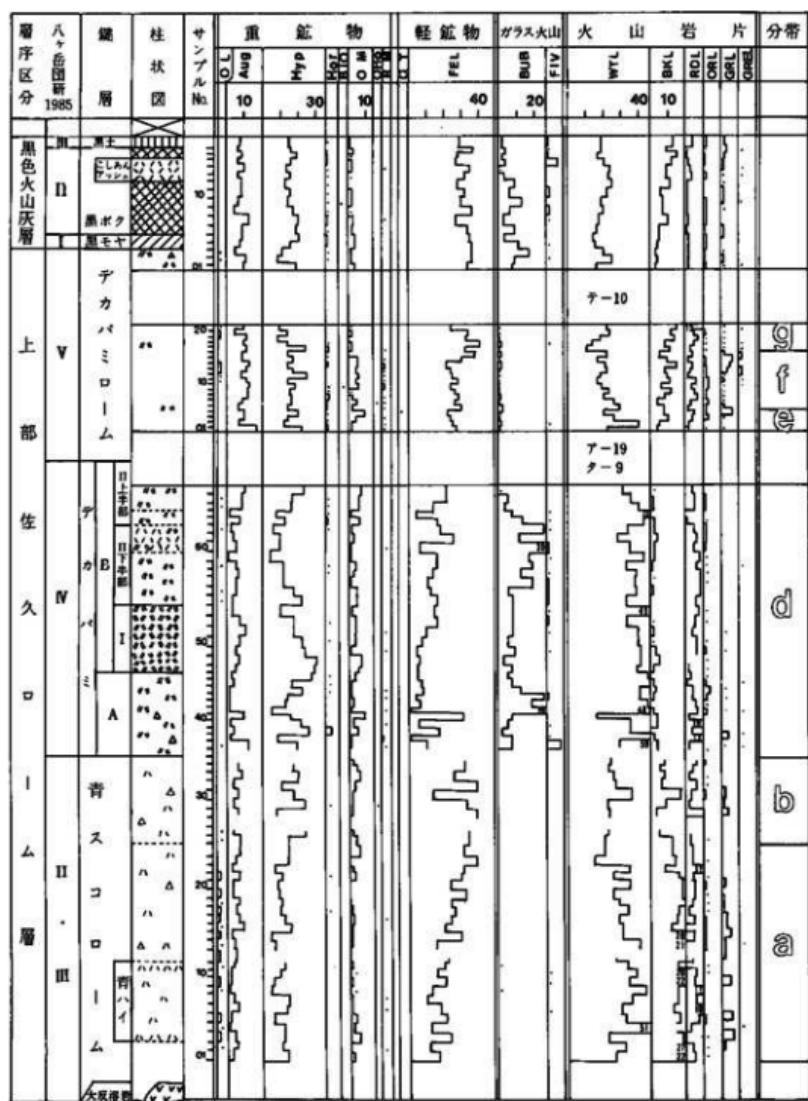
c：紫蘇輝石・普通輝石・長石は上位に向かって減少する。角閃石はピークを示し、ハイ岩片は上部にみられる。

d：普通輝石・紫蘇輝石は上位に向かい減少する。長石の含有率が高い。上部にクロ岩片・ハイ岩片を含む。

e：紫蘇輝石・普通輝石は上位に向かって減少し、長石も同様の傾向を示す。かんらん石・角閃石は含まれない。クロ岩片はピークを示す。



第16図 八那池における中・上部佐久ローム層の砂粒組成



第17図 発掘地のローム層の砂粒粗成

f : 紫蘇輝石・普通輝石は上位に向かって増加する。かんらん石が含まれる。ハイ岩片はピークを示し角閃石は含まれない。

g : 紫蘇輝石・普通輝石・長石は上位に向かって増加する。角閃石・かんらん石が含まれる。シロ岩片は上位に向かって減少する。

h : 紫蘇輝石・長石・ハイ岩片はピークを示す。かんらん石・角閃石が含まれる。

b. 対比

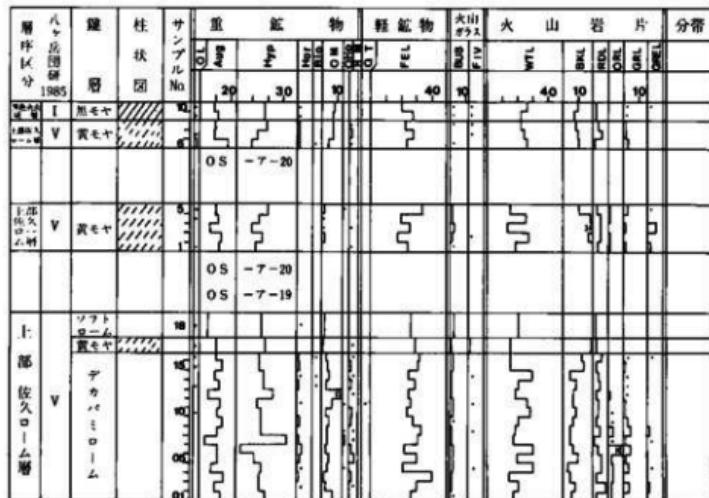
発掘地の試料は、テー10・アー19・ター9グリットの柱状サンプルを分析した。結果を第17図に示す。砂粒組成の特徴から、発掘地に分布する上部佐久ローム層のうち、“デカバミ”的下位、“青スコローム”および上位の“デカバミローム”について以下のように八那池のローム層との対比を試みた。

“青スコローム”下部：角閃石・かんらん石がみられること、長石が上位に増加すること、火山ガラスが含まれることから上部佐久ローム層Ⅲのaに対比される。

“青スコローム”中部：かんらん石・角閃石が含まれる。長石が上位に向かって減少する。火山ガラスを含まないことから上部佐久ローム層Ⅲのbに対比される。

“デカバミローム”下部：長石・普通輝石は上位に向かって減少する。シロ岩片がピークを示すことから上部佐久ローム層Vのeに対比される。

“デカバミローム”中部：紫蘇輝石・普通輝石が上位に向かって増加する。かんらん石・ハイ岩片はピークを示すことから上部佐久ローム層Vのfに対比される。



第18図 “黄モヤ”的砂粒組成

“デカバミローム”上部：かんらん石が角閃石を含み、長石は上位に向かって増加するので上部佐久ローム層Ⅷのgに対比される。

c. “黄モヤ”について

発掘地のア-19・20グリットの“黄モヤ”について分析を行った結果を第18図に示す。

ア-20グリット内のサンプルを検討した結果、角閃石・鉄鉱物・ハイ岩片の組成に違いがみられた。

d. まとめと今後の問題点

火山灰の砂粒組成分析を行い、佐久ローム層の模式地である八那池と発掘地のローム層の対比を行った。その結果第3章で述べた対比を裏づけることができた。また分析方法については、野尻湖火山灰グループの方法が八ヶ岳周辺の火山灰層にも適用できることが明らかとなった。

しかしながら、以下の点が問題点として残った。“黄モヤ”は発掘地の同一グリット内でも角閃石や鉄鉱物の組成に大きな違いが見られる。“黄モヤ”は現在は色調で区分しているが層準として区別するには問題があると思われる。その上下の層準を含めたより詳細な分析が必要である。また、発掘地の“デカバミ”層準中にみられる火山ガラスは、八那池では検出されなかった。これは、“デカバミ”層準のガラス質火山灰の分布もしくは八那池の堆積環境に原因があると考えられる。今後の検討課題である。

火山灰分析参加者

新井 寿 新井英樹 市川督郎 伊東公夫 井上昌美 柿原仁志 片野辰夫 金川知人 亀井豊子 神戸多恵子 ○木村純一 小池淳夫 小池千秋 小林和宏 ○小林雅弘 斎藤佐知 斎藤尚人 佐藤玲子 鈴木義昭 関口真由美 高橋陽一 ○田辺智隆 田村祐美子 中村正芳 ○増田信吾 ○三原 哲 武藤泰司 ○矢口裕之 吉野信幸 ○執筆責任者 ○執筆者

F. "デカバミローム" 中の全窒素量

a. はじめに

火山灰層中の全窒素量を定量し、層序に沿ってその変化を調べることは、火山灰層の堆積環境を推定する手がかりとなることが知られている（倉林・野尻湖火山灰グループ、1980）。

大反遺跡では、デカバミローム中に遺物の出土層準が3層準確認されている（八千穂村池の平遺跡発掘調査団、1984）。

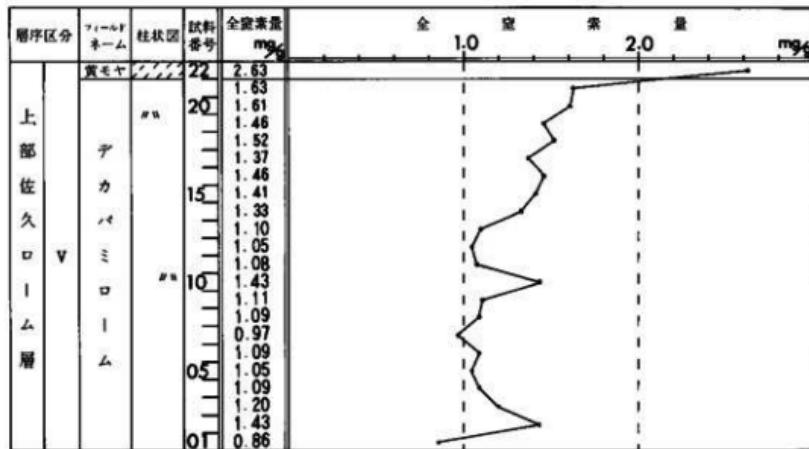
これらの遺物の出土層準が、旧石器人の生活面であるのかどうか、という問題を考える上で、デカバミロームの堆積環境を推定する必要がある。そこで今回、デカバミローム中の全窒素量を定量し、その分布からデカバミロームの堆積環境について考察を加えた。

b. 全窒素量の定量方法

今回の全窒素量の定量には、本田法（本田、1964）の一部を改変した倉林法（倉林、1977）を用いた。以下に方法を略述する。

風乾し、根を取り除いた試料に濃硫酸を加えて加熱すると、窒素化合物は分解されてアンモニア化合物となる。そのアンモニア化合物を蒸留し、アンモニア水として取り出す。得られたアンモニア水を塩酸で滴定し、アンモニアの濃度を求め、全窒素量に換算する。

定量に用いた試料は、アーチグリッドでデカバミロームから黄モヤまでを、3cm間隔に連続的に採取したものである。



第19図 “デカバミローム” の全窒素量分布

■以下、調査団と略称する。

c. デカバミローム中の全窒素量の特徴

デカバミローム中の全窒素量の分布を第19図に示す。

デカバミローム中の全窒素量は、ほぼ $1.0\sim1.6\text{mg/g}$ である。全体としては上位にむかって、わずかに増加する傾向が認められる。

しかし、下底付近(試料番号02)と中部(試料番号10)では、その上下に比べて全窒素量が著しく多い。さらに、上部(試料番号14~21)では、全窒素量が下位よりもかなり多くなっている。

以上のように、デカバミローム中には、全窒素量の特に多い層準として、下底付近・中部・上部の3つが認められた。

黄モヤ(試料番号22)の全窒素量は 2.63mg/g で、デカバミロームに比べてかなり多く含まれている。

d. 全窒素量からみたデカバミロームの堆積環境

デカバミロームは、大反溶岩上の斜面に堆積しているが、1) 砂粒組成により八那池と詳細な対比ができる(第3章-E)、2) 発掘地の重鉱物組成がどこでもよく似ている(調査団、1984)ことから、火山灰が順序よく降灰・堆積した地層であると考えられる。全窒素量の多い層準も、二次的な堆積などで生じたものではなく、その場で形成されたものである可能性が高い。

全窒素量は、土壤中の腐食量の指標の一つとして用いられる。全窒素が他より多く含まれる層準は、植物が生育し腐食形成作用が進行した、火山灰の降灰休止期に相当すると考えられている(関東ローム研究グループ、1965、倉林・野尻湖火山灰グループ、1980)。

以上のことから考えて、デカバミローム中の全窒素量の多い層準も、降灰休止期にあたり、少なくとも3回の降灰休止期があつたと推定される。しかし、試掘溝での観察では、デカバミローム中に土壤化や粘土化の進んだ層準は認められない。よって、この降灰休止期は、短期間のものだったと考えられる。

ア-19グリッドでは、発掘が行なわれていないため、遺物の出土層準との対応は明らかではないが、この降灰休止期が遺物の出土層準に相当する可能性は高いと思われる。

黄モヤについては、砂粒組成は一定していない(第3章-E)し、全窒素量もデカバミロームよりかなり多いことから、埋没土壤である可能性が高い。

e. まとめ

1) デカバミローム中には、全窒素量の多い層準が3層準確認された。これらは、短期間の降灰休止期に形成されたと考えられる。

2) 黄モヤの全窒素量は、デカバミロームに比べてかなり多く、埋没土壤である可能性が高い。

3) 全窒素量の分布により、野外では識別できない短期間の降灰休止期を推定する手がかりが得られる。

G. "デカバミ" 中の火山ガラスの屈折率について

塩くれ場地点では、"デカバミ"中より火山ガラスの密集するゾーンが3層準発見されている(第20図)。下位より、"池の平火山灰Ⅰ" "池の平火山灰Ⅱ" "池の平火山灰Ⅲ"と呼称する。ここでは火山灰層の対比の1つの手段としてこれらの火山ガラスの屈折率・形態の記載を行った。

a. 試料の処理・測定方法

試料は、塩くれ場採集のものを使用し、水洗・超音波洗浄、乾燥した1/4~1/16の粒度のものについて測定した。

屈折率の測定は、YOSHIKAWA (1984)に準じ、標準ガラスで補正を行う分散法で、1試料あたり約40個測定した。

形態は、YOSHIKAWA (1984)に準じ、偏平型・中間型・多孔型と分け、さらに偏平型で板状のものをHa、それが接合して3本以内の稜をもつものをHb、中間型で板状の火山ガラスが接合して稜が4本以上のものをCa、泡状となり接合したものをTa、気泡が細かくスポンジ状となつたものをTbとした。

測定の結果を第21図に示す。

b. 測定結果

"池の平火山灰Ⅰ" (A-41,43)

"デカバミA"中に挟在され、オレンジ色軽石を多く含む黄褐色ローム中に火山ガラスが密集するゾーンである。屈折率は、1.497~1.501および1.508~1.513と2つのモードを持ち、また形態も、偏平型と多孔質型が多い。これは、デカバミの黄色軽石のガラス部分の混入と考えられ、池の平火山灰Ⅰの火山ガラスは、屈折率1.497~1.501の偏平型を主とするものだと思われる。

"池の平火山灰Ⅱ" (A-60~62)

"デカバミBII"下半部の上部に挟在されるゾーンで、肉眼的には最もはっきりと確認できる。オレンジ色軽石を多く含む黄褐色ローム中に挟在される。屈折率は、1.498~1.502で偏平型の火山ガラスを主とする。

"池の平火山灰Ⅲ" (A-65~67)

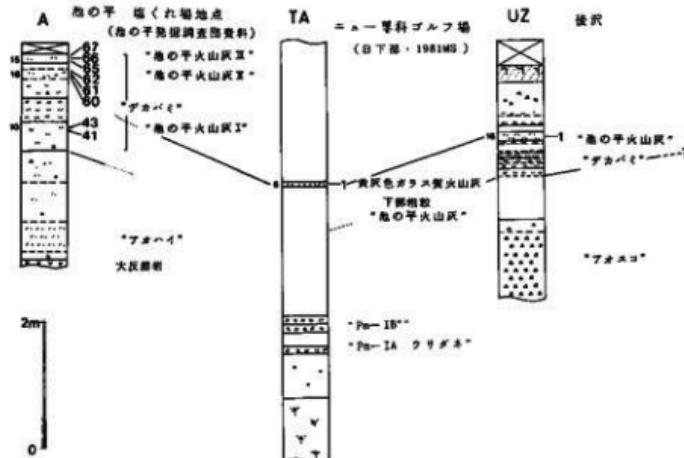
"デカバミBII"上半部に挟在され、オレンジ色軽石を多く含む黄褐色ローム中に火山ガラスが密集するゾーンである。屈折率は、1.498~1.501と、1.508~1.513と池の平火山灰Ⅰと同じく2つのモードをもち、また形態も多孔質型が多いが、これも"デカバミ"の軽石のガラスが混入したと考えられる。

c. まとめ

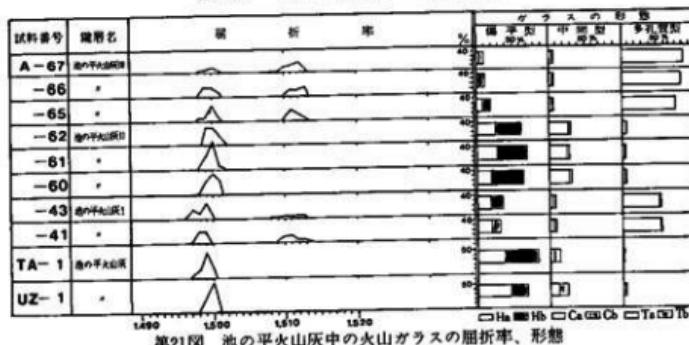
“デカバミ”の軽石の混入を除外すると、池の平火山灰Ⅰ・Ⅱ・Ⅲはいずれも屈折率1.498~1.502の偏平型を主とする火山灰層である。

なお八ヶ岳東麓で“デカバミ”直上にみとめられるガラス質火山灰層は、“池の平火山灰”と考えられ、屈折率・形態もほぼ等しい(第21図中のTA-1、VZ-1)。

また町田ほか(1980)は、“池の平火山灰”を“AT”に対比している。池の平火山灰は町田らの報告する“AT”と屈折率・形態も類似したものとなっているが、フィッシュン・トラック年代値(13000±650 Y. B. P. SUZUKI (1974))、および尖頭器が出土することより、異なる火山灰層だと考えられる。



第20図 “池の平火山灰”的対比柱状図



第21図 池の平火山灰中の火山ガラスの屈折率、形態

• 第四紀学会1985年大会での一般研究発表の講演の一部である。

4 遺跡・遺物の概要

A. 塩くれ場遺跡

a 遺物の出土層準と分布

塩くれ場遺跡での遺物の主要な包含層は下位より“デカバミB-II”、“黒モヤ”、“黒ボク”的3層である。“デカバミB-II”はその出土状況により下半部・上半部に分かれ、下半部の下底が最下位の出土層準となっている(第6表)。“デカバミB-II”の中で最も遺物が集中しているのは上半部で、大半のものがこの層準に属す。

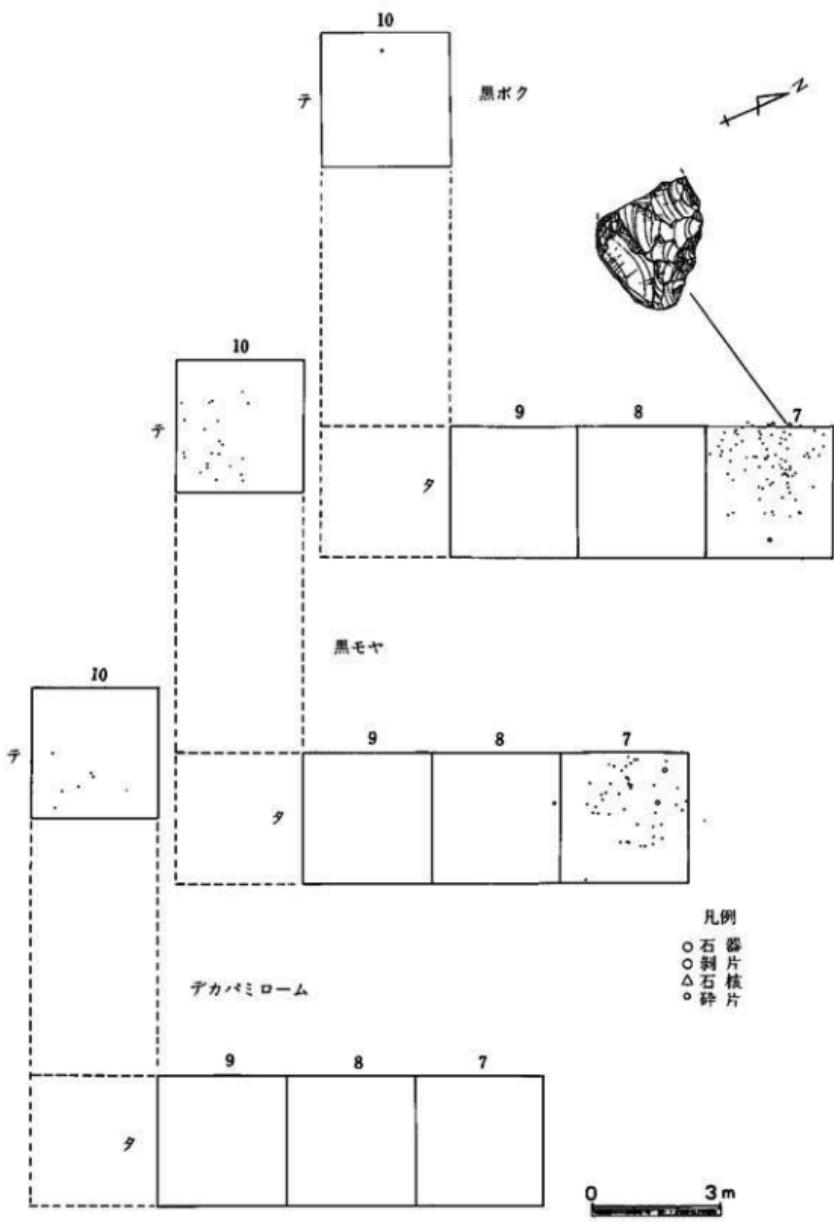
分布状態については以下の特徴がみられる(第22、23図)。“デカバミB-II”下部ではグリッド面がこの層準まで到達していないグリッドが多く、分布の傾向はわからないが、試掘溝では遺物は少なかった。“デカバミB-II”上部ではター7グリッドからター8グリッド北端部にかけて遺物が集中している。特にター8北端部では碎片が密集している。ター9グリッドではグリッド中央から東端にかけて遺物の集中分布がみられる。ター10では他のグリッドに比較するとややまばらであるが、南端部の西から東にかけての分布がみられる。“黒モヤ”はター7、ター10グリッドにのみ分布する地層でター7では“黒ボク”よりは遺物は少ないが、グリッド西から北にかけてやや集中する分布がみられる。ター10では数はそう多くはないが、南端の西から東にかけての分布がみられる。“黒ボク”も同じくター7、ター10グリッドにのみ分布する地層でター7グリッドで“黒モヤ”と同様の分布を示す。

b 出土遺物

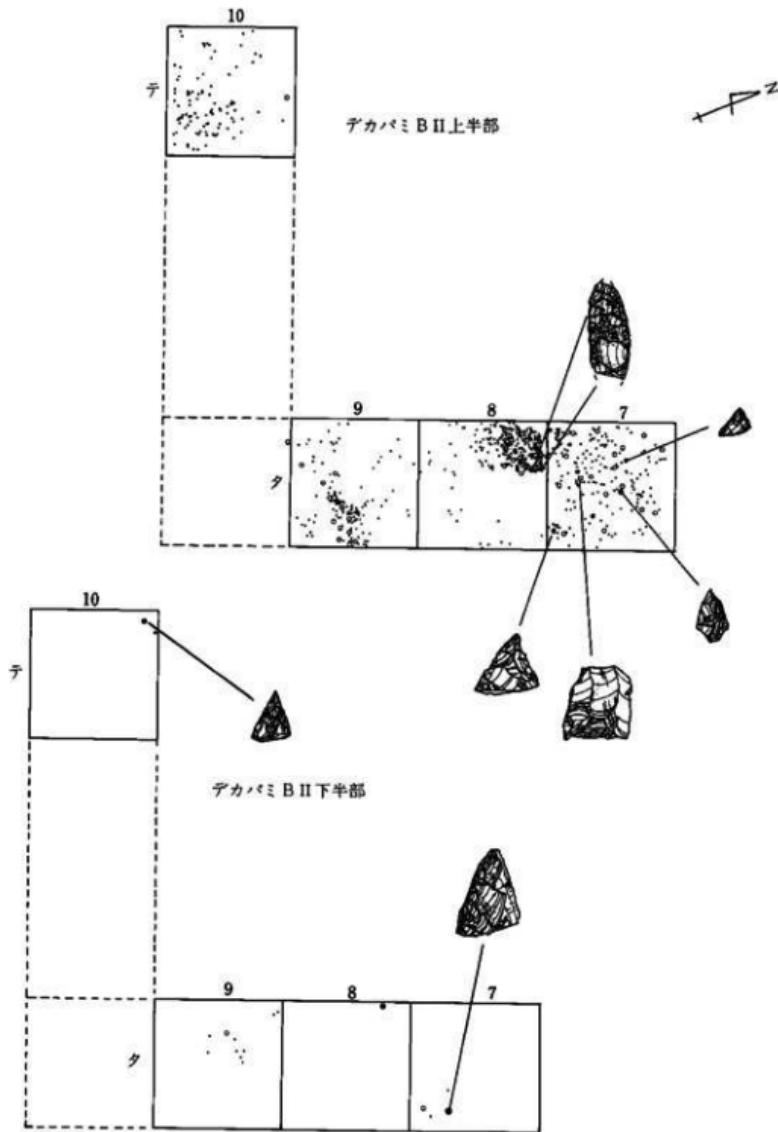
出土した遺物は総数1,422点で、石器は尖頭器9点、スクレイパー1点、使用された剝片4点の計14点である。尖頭器はすべて破損品である。その他剝片、碎片が多く出土しており、石材はすべて黒曜石で、気泡が多く透明度の悪い材質のものが多い。以下に下位の層準より主な遺物の概

第6表 塩くれ場遺跡における出土遺物点数表

(P: 尖頭器、U-1: 使用された制片、Sc: スクレイパー、Fl: 倒片、Ch: 破片)



第22図 塩くれ場遺跡における層準別出土遺物分布図1



第23図 塩くれ場遺跡における層準別出土遺物分布図2

要を述べる。(第24図、第25図)

1) "デカバミB-II" 下半部

尖頭器 2点、剥片 2点のほか、碎片が若干出土している。

尖頭器

尖頭器は2種類のものがある。13は半両面調整尖頭器である。横長剥片を素材とし、一部に自然面を残している。調整は剥片の打点側より両面におこなわれ、末端側には調整がほとんどなく、剥片の縁辺が残っているので断面が三角形を呈している。裏面側の粗い加工後、表面の調整加工の途中で切断したものと思われる。14は両面調整尖頭器である。粗い両面調整で加工されており、先端部の破損品である。

2) "デカバミB-II" 上半部

尖頭器 5点、スクレイバー 1点、使用された剥片 1点、剥片 41点のほか碎片が多く出土している。塩くれ場遺跡では最も遺物が多く出土している層準である。

尖頭器

調整加工によって次の2類に分けられる。

半両面調整尖頭器 (12)

12は縦長剥片を素材とし、剥片の表面に粗い半面調整がおこなわれた尖頭器で、断面が厚い三角形を呈し、裏面には周縁に浅い調整加工がなされている。

両面調整尖頭器 (6、7、8、9、11)

粗い剥離の両面調整のものである。11は比較的大きな巾広の尖頭器の先端部の欠損品で、大きな剥離で整形し、その上から表面右側縁に細かい調整加工がほどこされている。6と7は接合する。小形の粗い調整加工のもので両側縁に細かい急角度の調整がなされていて、断面は薄く平らな形を呈している。基部が欠損している。8、9は両面調整尖頭器の先端部の欠損品である。

使用された剥片 (10)

10は薄い縦長剥片の表面左側縁に連続して使用痕が残されている剥片である。

3) "黒モヤ"

尖頭器 1点、剥片 4点および碎片が出土している。

両面調整尖頭器

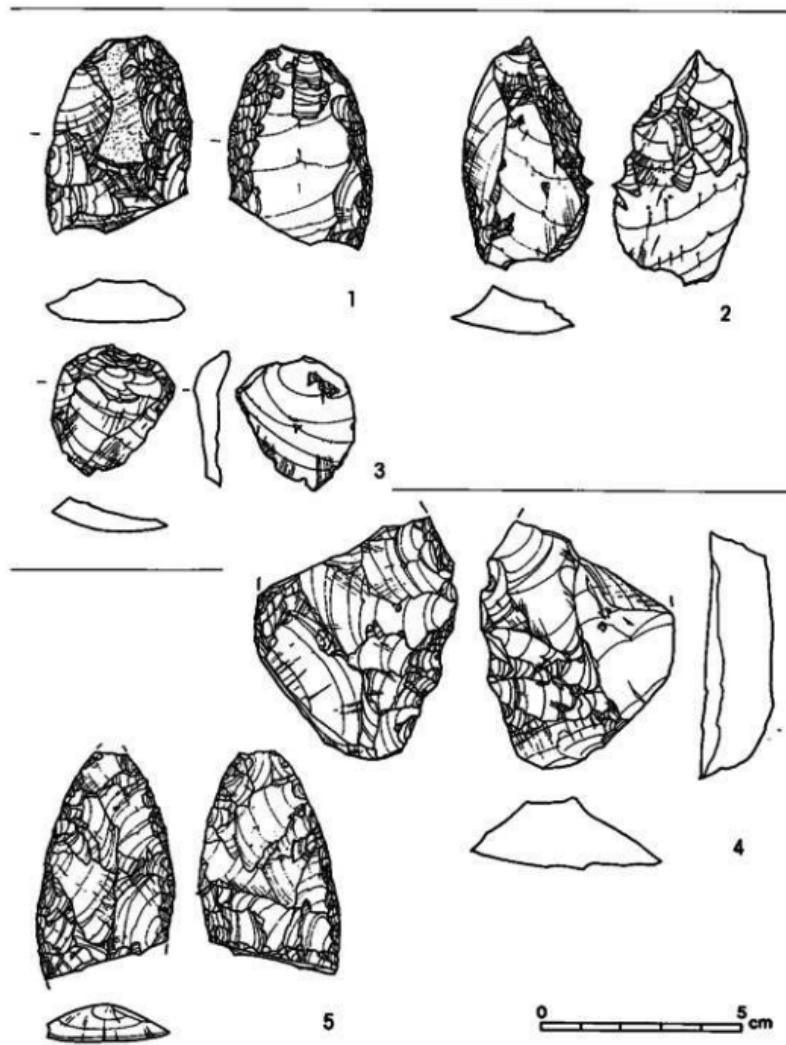
5は入念な剥離により両面に調整加工がほどこされており、木葉形を呈する尖頭器である。裏面は平らであるので断面は片凸のレンズ状である。縁辺には細かい調整加工がほどこされている。先端の一部と基部が欠損している。

4) "黒ボク"

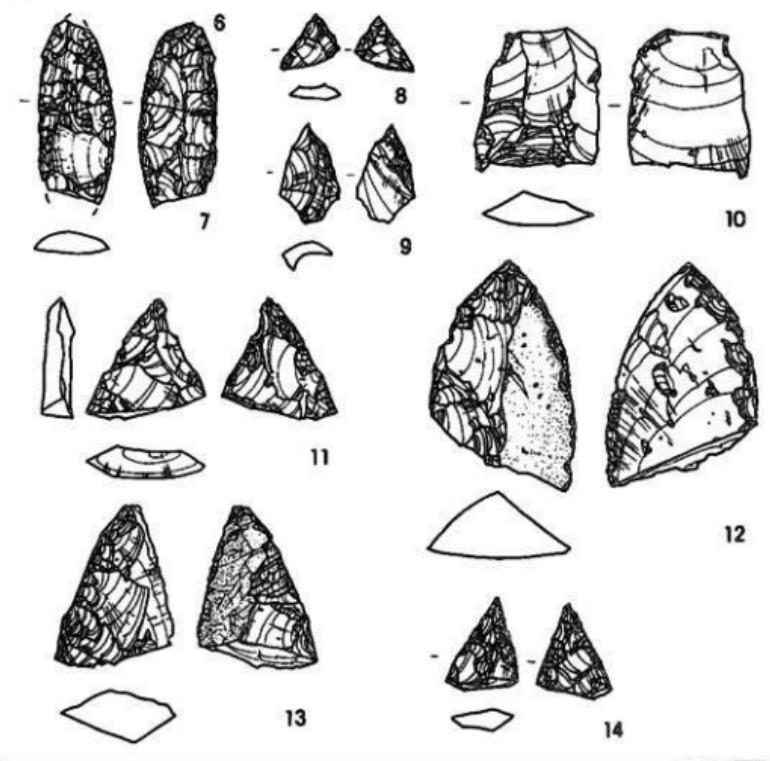
尖頭器 1点、使用された剥片 1点、剥片 1点などが出土している。

尖頭器

4は尖頭器未成品である。両端が折れているために明確な大きさはわからないが、大型の剥片



第24図 塩くれ場遺跡出土石器(1)
1~3:表採・層準不明、4:黒ボク、5:黒モヤ



第25図 塩くれ場遺跡出土石器(2)

6-12: デカバミB II上半部、13-14: デカバミB II下半部

0

5 cm

が素材と思われる。両面に粗い調整加工が深く入っており、断面は厚い三角形を呈す。

5) その他

1は発掘地より約30cm北東の道路際で表採されたもので、半両面調整尖頭器である。表面に自然面を残した粗い調整がなされており、裏面には周縁に浅くて粗い調整がなされている。2は縦長剥片を素材としたスクレイパーである。表面の左側縁に細かい調整で刃部を形成している。3は使用された剥片で薄い剥片の裏面の左側縁に使用痕が残されている。

第7表 塩くれ場遺跡の主な出土遺物

実測図番号	名 称	番 号	出土層準	出土標高(m)	重 盤(g)	大きさ(cm)	発見者	備 考
1	尖頭器	SK-H-2-ゾ-0	層準不明	(表様)	21.3	4.9*3.1*1.2	中村 由克	
2	スクレイバー	SK-T-7-35	層準不明	(埋土)	17.4	5.8*3.3*1.9	竹村 錠一	
3	U-フレ	SK-T-8-8	層準不明	(1604.48)	4.8	3.3*3.0*0.8	井出 和宏	
4	尖頭器未成品	SK-T-7-113	黒ボク上部	1641.953	47.3	6.0*5.0*1.8	岸本 真樹	
5	尖頭器	SK-T-7-268	黒モヤ	(上げ土)	19.8	5.6*3.5*1.0	金子 庄一	
6	尖頭器	SK-T-8-79	デカバミ 8日上半部	1641.683			小林 雅弘	7と接合
7	尖頭器	SK-T-8-78	"	1641.683	5.2	4.4*1.9*0.5	島田 徹	6と接合
8	尖頭器	SK-T-7-305	"	1641.563	0.5	1.4*1.5*0.4	金子 庄一	
9	尖頭器	SK-T-7-565	"	1641.463	1.4	2.4*1.5*0.8	山口 健	
10	U-フレ	SK-T-7-300	"	1641.663	7.5	3.7*3.1*0.8	中村暢一郎	
11	尖頭器	SK-T-7-76	"	1641.213	5.2	3.0*3.0*0.8	北爪 智啓	
12	尖頭器	SK-T-7-136	"	1641.483	26.5	5.3*3.9*1.6	三沢 智之	
13	尖頭器	SK-T-7-100	デカバミ 8日下半部	1641.043	9.8	4.0*3.0*1.3	竹村 錠一	
14	尖頭器	SK-T-10-6	"	1642.922	1.9	2.3*1.8*0.7	大島 浩	

U-フレ: 使用された削片

B. 大反遺跡

a 遺物の出土層準と分布

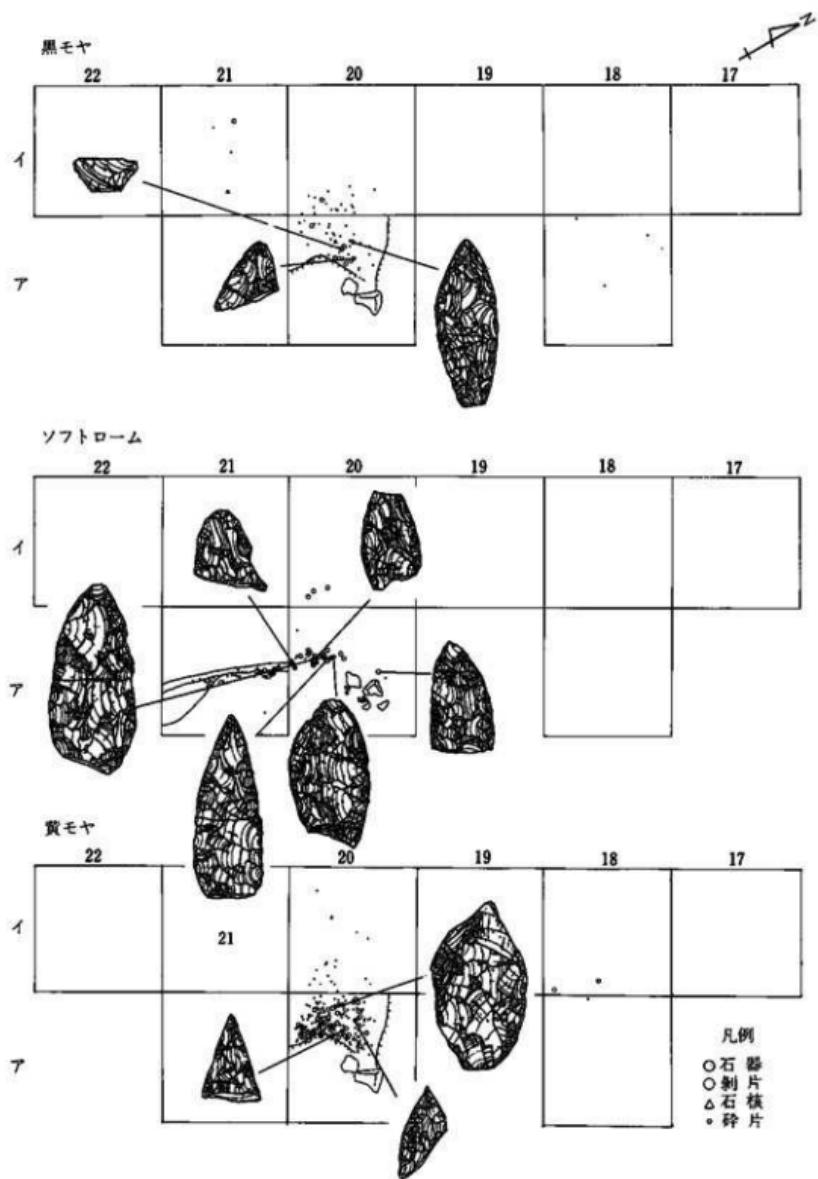
大反遺跡での遺物の出土層準は6層準みとめられている。下位より“デカバミローム”下部、同中部、同上部、“黄モヤ”、“ソフトローム”、“黒モヤ”である。“デカバミローム”は層位的に境界がみとめられないが、遺物の出土層準が下部・中部・上部に分かれるため、下位よりそれぞれ“デカバミロームI”、“デカバミロームII”、“デカバミロームIII”と呼称することとする。なお層準ごとの遺物点数を第8表に示す。

“デカバミローム”より下位の“デカバミ”的F・T年代が13,000±500y.B.P.であり。“ソフトローム”的堆積年代が段丘との関係より約11,500年前と考えられることより、大反遺跡は約13,000年前位から11,500年位の年代にわたっているものと考えられる。

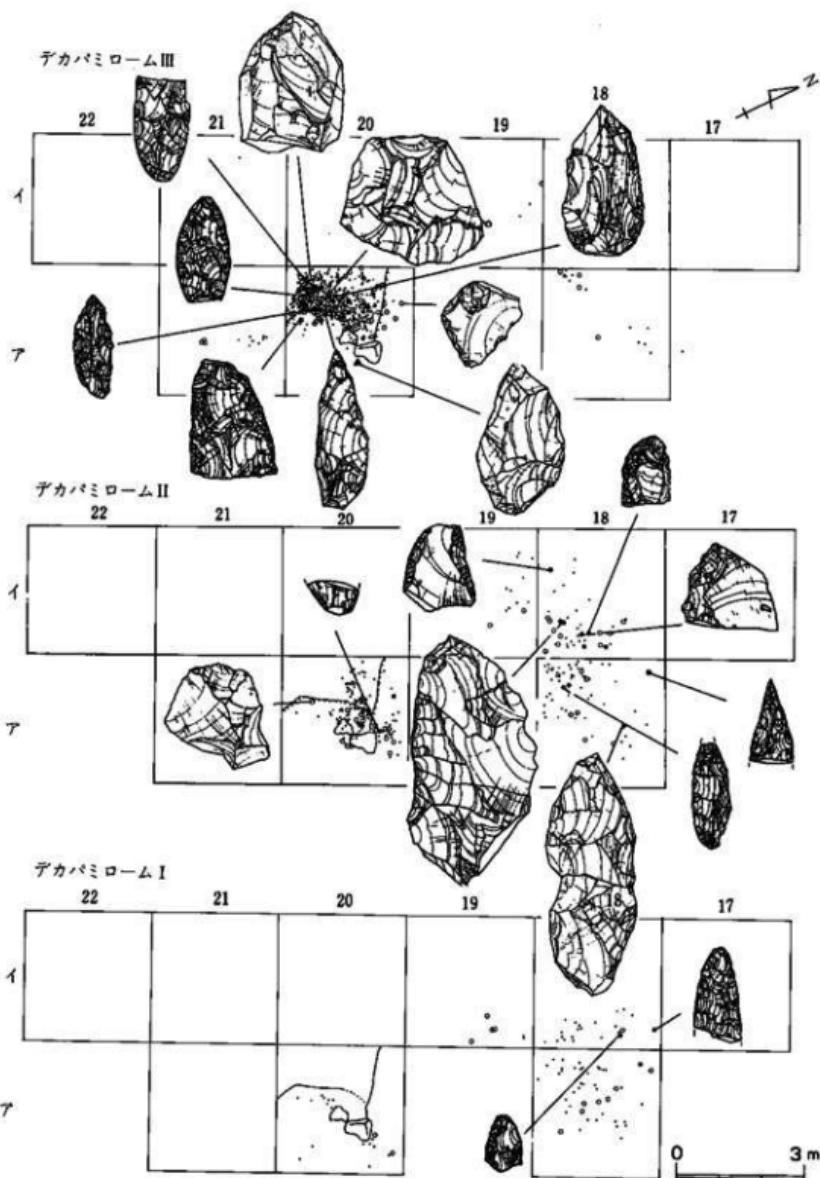
また、遺物はア-20グリッド及びイ-18グリッドを中心とする区域に集中し、2つのユニットを形成している(第26図、第27図)。

ア-20グリッドを中心とするユニットでは遺物は多くの層準に出土しているが、なかでもデカバミロームIIIと“黄モヤ”に集中する。ここでは各層準ともにイ-20-21にある径1m前後の巨礫の近くにはほとんど遺物がみられず(第28図)、ア-20グリッドの中に分布の中心をおく半径1m位の範囲に出土している。ただし、“ソフトローム”においてはア-21グリッドから遺物の出土が見られるため、このグリッドを完掘すれば南北方向に遺物の分布が広がる可能性もある。主な遺物は、尖頭器20点、スクレイバー3点、尖頭器未成品1点、石核1点である。

イ-18グリッドを中心とするユニットでは遺物は“デカバミローム”中にのみ出土し、特に“デカバミロームI”“デカバミロームII”に集中する。“デカバミロームI”はア-18、イ-18グリッドにまたがる半径1.5m位の範囲で出土遺物がまとまっており、直径50cm以下の礫を共伴する(第28図)。また、“デカバミロームII”では、ア-18、イ-18・19グリッドにまたがる東西方向・



第26図 大反遺跡における層準別出土遺物分布図1

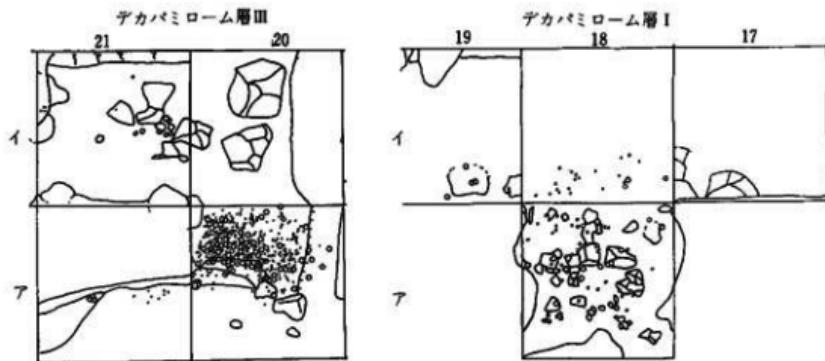


第27図 大反遺跡における層単別出土遺物分布図 2

第8表 大反遺物における出土遺物点数表

層 準	第1回発掘						第2回発掘					
	ア-18			ア-20			P	U-fl	Sc	Fl	Ch	
	P	Sc	Co	Fl	Sp	Ch						
その他の	4											
黒モヤ	2	1	2									
ソフトローム	6			4	1	1882						
黄モヤ	1			1								
デカバミロームIII	1		1	1					4			
デカバミロームII	7	1		1			1		3			
デカバミロームI	2			3							16	

P: 尖頭器、U-fl: 使用された剥片、Sc: スクレイパー、Co: 石核、Fl: 制片、Sp: スポール、Ch: 砕片



第28図 大反遺跡における巨礫と遺物の分布

に長軸をもつ楕円形の分布を示す。尖頭器4点、スクレイパー2点、尖頭器未成品が主な遺物である。

b 遺跡と出土遺物

得られた遺物は1、2回発掘で総数4028点におよび、そのうち主な石器類は、尖頭器29点、スクレイパー5点、使用された剥片2点、尖頭器未成品3点、石核3点である。また1976~1984年までの表採料が約4,000点あり、この中には尖頭器29点、スクレイパー6点、石核2点などが含まれている(第37図、第10表)。これらの石器類を層準ごとに第9表、第29図~36図、図版8~11に示した。以下、層準ごとに出土遺物の記載を行う。

1) "デカバミロームI"

尖頭器2点のほか剥片、碎片が出土している。

尖頭器 (48、49)

2点とも粗い加工の両面調整尖頭器である。いずれも欠損しているが、残存部をみるとかぎりは左右対称である。全面が平坦剝離でおおわれ、多くは深形調整で中心付近にまで剝離がおよんでいる。裏面周縁には急角度の浅い調整が施されている。48は先端部であり、浅形の周縁調整が施されている。49は基部のみで、周縁に極浅形調整がみられる。ともに裏面の調整途中で破損したものと考えられる。石材は、47が透明度の高い黒曜石、49が不純物の多い透明度の低い黒曜石を使用している。

2) "デカバミロームII"

尖頭器3点、スクレイバー2点、尖頭器未成品3点などが出土している。

尖頭器 (37、38、39)

いずれも粗い加工の両面調整尖頭器である。調整は粗く両面全面に施されている。裏面は平坦に剝離されており、正面は平坦剝離を主とし、2、3の階段状剝離による凹凸がみられる。37は、小形、細身のもので正面の加工に角度があり、断面が三角形に近い形を呈している。製作途上のもので、尖端部は未調整である。38は先端部で、その角度は35度である。周縁には不連続な極浅形調整がみられる。39は基部の破片で、裏面での剝離途中で欠損している。

尖頭器未成品 (40、41、42)

40は筋理面でわれた板状の石片を素材とし正面全面に平坦剝離が施されている。正面左側縁中央部付近で、剝離の際破損している。裏面には、自然面が多く残存している。41は大形の横長剝片を素材とし、基部と先端部を残して両側縁に調整が進められている。正面左側縁の調整の際に破損したものと考えられる。42は縦長剝片を素材とし、正面がすべて自然面で、裏面には主剝離面が残存している。周縁からの調整途中で欠損したものと思われる。

スクレイバー (43、44)

2点ともサイドスクレイバーで、薄手の剝片を素材とし、形状は類似している。ともに一部破損している。43は縦長剝片の一側縁に刃部が設けられたもので、末端は欠損している。44は横長剝片を素材とし、打点側と末端側に刃部調整が施されている。

剝片 (45、46、47)

45、46は台形状の調整剝片である。47は自然面を残した横長剝片である。

石材は、39、40、41が灰白色を帯びた流理構造・筋理の目立つ透明度の低い黒曜石を使ってい る。43、44、45は比較的透明度が高いが、残りは透明度の低い気泡の多い黒曜石である。

3) デカバミロームIII

尖頭器8点、スクレイバー1点、使用された剝片1点、石核1点などが出土している。

尖頭器 (23~30)

尖頭器は粗い加工による両面調整尖頭器(26~30)と、入念な加工による両面調整尖頭器(23~25)の2類に分けられる。

① 粗い加工による両面調整尖頭器

裏面は両側縁より平坦剥離がなされ、裏面→正面に比較的角度のある鋸歯状の加工が施され、三角形ないしはD形の断面を持つ。26は小形・細身で、裏面は剥離の大きさが一定ではなく湾曲している。断面は厚く三角形を呈する。正面には自然面が残存している。未成品と考えられる。27は中形で断面はD形を呈する。正面に自然面が残り、粗い加工で器形を作り出しており、未成品と考えられる。正面右側縁には細かい調整があり、スクレイパーともみられる。28はやや大形で、基部は欠損している。尖頭器の未成品である。両面とも左側縁からの加工の角度が大きく、断面は平行四辺形に近いレンズ形を呈する。裏面を調整中に破損したためか、先端部と正面左側縁の一部は未調整である。29は大～中形尖頭器の左側縁のみの破損品である。30は裏面→正面の剥離途中に欠損したもので、先端部のみのものである。

② 入念な加工による両面調整尖頭器

なめらかな平坦剥離で両面を加工し、木葉形を呈する。深形の調整で面を整えた後、極浅形の周縁調整で全周縁を仕上げている。23は正面の調整加工の際に、先端部と基部が欠損したものである。24は左右対称であるが、正面中ほどに右側縁から反対縁に至る深い剥離痕があり、その剥離の際に破損したものである。25は、63度の角度をもつ先端部のみの破損品である。

スクレイパー (31)

大形剥片の破損品を素材とし、下端に鋸歯状の刃部を作り出している。

使用された剥片 (32)

大形・巾広の継長剥片で、主剥離面右側縁に細かい剥離痕がみられる。

石核 (33)

巾広の小さな剥片をはがしている。細身の尖頭器の未成品の可能性もある。

剥片 (34～36)

34は台形・巾広の剥片で、正面は打点の転移が認められる。35は巾広の剥片の打点部分が欠損したものである。

石材は、25が気泡が少なく透明度の高い黒曜石で、22、23、26が気泡の目立つ黒曜石でやや透明度は低い。24、27～30は灰白色を帯びた透明度の低い黒曜石である。

4) "黄モヤ"

尖頭器4点、スクレイパー1点が得られた。

尖頭器 (18～21)

尖頭器は、デカバミロームⅢと同様、粗い加工による両面調整尖頭器 (19、20、21) と入念な加工による両面調整尖頭器 (18) の2類に大別できる。

① 粗い加工による両面調整尖頭器

全面に平坦剥離が施されており、正面には階段状剥離もみられる。また裏面→正面に角度のある調整加工が施され、断面はD形を呈する。19は小形で、正面の調整の際に破損し先端部のみのもので、先端の角度は64度である。20は中形で、40度の角度をもつ尖頭器の先端部破損品である。

片凸の断面を有する。正面側縁部からの剥離の際破損している。21は中形・厚手で、裏面→正面の剥離に角度があり断面はD形を呈す。先端部は剥離途中で両側面が欠損している。

② 入念な加工による両面調整尖頭器 (18)

18はなめらかな平坦剥離が施され、細かい周縁調整が全側面に認められる。断面は薄いレンズ状を呈す。裏面調整中に破損した基部である。

スクレイパー (22)

自然面を大きく残す不安定な剥片を素材とし、背面右側縁に細かい剥離が施され刃部を作り出されている。

石材は、19、21がやや透明度が高く、18、22が灰白色を帯びた透明度の低い黒曜石を用いている。22は節理が顕著である。

5) "ソフトローム"

尖頭器 (12~17)

いずれも入念な加工による両面調整尖頭器である。全面になめらかな平坦剥離と細かい周縁調整が施されている。14以外は薄手である。12は基部が一部欠損している。また、正面を調整する際に、中央部で破損している。13は裏面に自然面を残したもので、裏面調整の際基部が欠損し、さらに裏面左側縁より剥離する途中で中央部で破損したものである。14はやや巾広で正面に節理面を残し、基部・先端部とともに正面の側縁調整の際に欠損している。15はやや小形であるが厚く、断面はD形を呈す。先端部は裏面調整の際に、基部は正面の調整の際に欠損している。16はわずかに左右非対称で、裏面調整の際に基部が欠損したものである。17は基部のみで、正面右側縁に大きな剥離が施され、くびれを持っている。裏面より調整する際に欠損したものである。

石材は、12、16が白濁した流理の目立つ黒曜石で、13が灰色で透明度が低い黒曜石である。14、15、17はやや透明度が高い黒曜石である。

6) "黒モヤ"

尖頭器 2点、使用された剥片 1点が得られた。

尖頭器 (8、9)

入念な加工による両面調整尖頭器である。平坦な剥離が施され薄形である。8はやや左右非対称で、先端は59度の角度を持つ。裏面調整の際に基部が欠損し、また中央付近で破損している。9は基部のみの欠損品で、正面を調整中に破損している。

使用された剥片 (10)

剥片の碎片の末端部に極浅形の剥離痕の認められるものである。

剥片 (11)

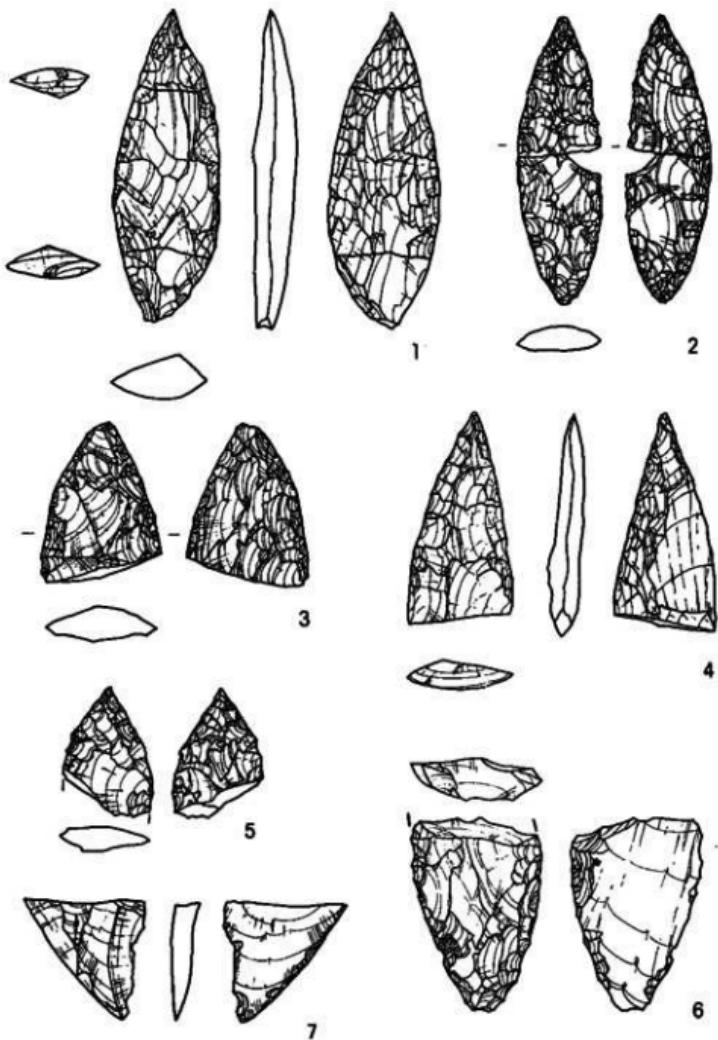
薄くて巾広の調整剥片である。

石材は、9が最も透明度が低く白い流理が認められる黒曜石である。10、11はかなり透明度が高く、8は9と10の中間的な黒曜石である。

第9表 大反追跡の主な出土遺物

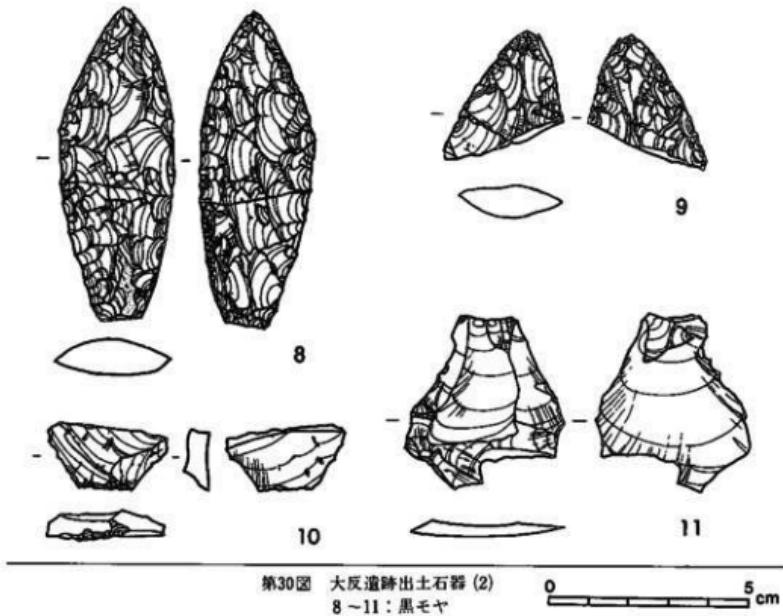
実物番号	名 称	番 号	出 土 種 別	出 土 高 (m)	重 量 (g)	大 き さ (cm)	発見者	備 考
1	尖 頭 器	80-I K-1005 82 I K-21 83 7-20-H-70	表探		13.4 1.7 2.7 3.7 5.3	77*27*11		
2	尖 頭 器	76 I K-1	表探		3.7	71*21*7		
3	尖 頭 器	83 TAK-45	層準不明		9.5	40*30*9		
4	尖 頭 器	83 7-20-H-2	表探		4.3	32*23*6		
5	尖 頭 器	84 7-20-H-16	表探		9.2	52*27*9		
6	尖 頭 器	83 GOM-1	層準不明		16.2	48*33*11		
7	U - フ レ	84 7-20-H-15	表探		4.1	30*31*7		
8	尖 頭 器	83 7-20-194 83 7-20-H-1 (表土)	黒モヤ	1654.75	11.0 6.9	77*29*8	竹内 錠造	
9	尖 頭 器	83 7-20-191	黒モヤ	1654.63	6.4	32*30*8	名和 敏	
10	スクリイバー	83 7-20-149	黒モヤ	1654.79	2.6	30*16*7		
11	刺 片	83 7-20-130	黒モヤ	1654.71	5.3	40*43*4		
12	尖 頭 器	83 7-20-2 82 I K-30 (表土)	ソフトローム	1654.32	10.2 15.3	87*33*9	実川順一	
13	尖 頭 器	83 7-20-3 82 I K-29	ソフトローム	1654.33	17.7 22.8	88*41*11	実川順一	
14	尖 頭 器	83 7-20-1	ソフトローム	1654.39	28.0	77*29*8	近藤洋一	
15	尖 頭 器	83 7-20-18	ソフトローム	1654.54	14.6	45*28*12	寺尾真純	
16	尖 頭 器	83 7-20-11	ソフトローム	1654.46	17.7	52*30*11	中村由克	
17	尖 頭 器	83 7-20-19	ソフトローム	1654.52	9.6	38*33*9		
18	尖 頭 器	84 7-20-68	黒モヤ	1654.122	10.2	44*30*9	森下 恵	
19	尖 頭 器	84 7-20-141	黒モヤ	1654.632	5.9	43*23*9	橋井修一	
20	尖 頭 器	84 7-20-42	黒モヤ	1654.552	6.9	40*28*11	森下 恵	
21	尖 頭 器	84 7-20-25	黒モヤ	1654.712	68.0	78*45*21	荻野谷静子	
22	スクリイバー	84 7-20-152	黒モヤ	1654.702	21.7	34*47*17	山田あきら	
23	尖 頭 器	84 7-20-368	デカバミロームⅢ	1654.732	10.0	48*26*7	橋重徳也	
24	尖 頭 器	84 7-20-1088	デカバミロームⅢ	1654.522	11.3	48*26*8		
25	尖 頭 器	84 7-20-988	デカバミロームⅢ	1654.722	0.3	8*10*3.5	石原二傳子	
26	尖 頭 器	83 7-20-129	デカバミロームⅢ	1654.63	8.2	47*19*12		
27	尖 頭 器	84 7-20-544	デカバミロームⅢ	1654.632	44.4	69*38*17	眞下哲紀	
28	尖 頭 器	84 7-20-1060	デカバミロームⅢ	1654.382	31.8	55*41*12		
29	尖 頭 器	84 7-20-939	デカバミロームⅢ	1654.432	13.5	73*26*11	田辺智隆	
30	尖 頭 器	84 7-20-67	デカバミロームⅢ	1654.382	2.6	28*21*9	中村由克	
31	スクリイバー	84 7-20-5	デカバミロームⅢ	1654.505	44.5	59*46*17	荻野谷静子	
32	U - フ レ	84 7-20-476	デカバミロームⅢ	1654.592	78.5	65*44*18	橋重徳也	
33	石 核	83 7-20-12	デカバミロームⅢ	1654.06	58.4	70*41*25		
34	刺 片	83 7-21-26	デカバミロームⅢ	1654.38	50.0	60*66*16	中村由克	
35	刺 片	83 7-19-2	デカバミロームⅢ	1654.23	12.6	28*61*10	白井 実	
36	刺 片	83 7-20-34	デカバミロームⅢ	1654.33	7.8	40*38*7	名和 敏	
37	尖 頭 器	83 7-18-15	デカバミロームⅢ	1653.8	8.8	49*18*11	岡本都栄	
38	尖 頭 器	84 7-18-90	デカバミロームⅢ	1653.605	5.3	39*21*8	寺島宏伊	
39	尖 頭 器	83 7-20-170	デカバミロームⅢ	1654.12	2.3	17*23*7		
40	尖頭器未成品	83 7-18-22	デカバミロームⅢ	1654.16	45.6	112*43*17	増田高也	
		83 7-18-30	デカバミロームⅢ	1653.535	39.8		岡本都栄	
41	尖頭器未成品	83 7-18-5	デカバミロームⅢ	1654.34	61.2	118*62*15	高木信彦	
		83 7-18-6	デカバミロームⅢ	1654.34			高木信彦	
42	尖頭器未成品	83 7-18-3	デカバミロームⅢ		27.4	39*46*18	高木信彦	
43	スクリイバー	83 7-18-36	デカバミロームⅢ	1654.12	5.4	32*22*7	成瀬達也	
44	スクリイバー	83 7-18-64	デカバミロームⅢ	1654.88	10.2	41*34*7	橋重徳也	
45	刺 片	83 7-20-100	デカバミロームⅢ	1653.86	19.0	50*49*9		
46	刺 片	83 7-18-8	デカバミロームⅢ	1654.29	26.9	46*58*14	平原弘久	
47	刺 片	83 7-19-6	デカバミロームⅢ	1653.99	16.2	35*60*8	田辺智隆	
48	尖 頭 器	83 7-18-55	デカバミロームⅢ	1653.82	2.8	26*17*6	草野佐知	
49	尖 頭 器	83 7-18-32	デカバミロームⅢ	1653.79	8.2	44*22*9	龜山正義	

U-フレ: 使用された刺片



第29圖 大反遺跡出土石器 (1)
1 ~ 7 : 表採・層準不明

0 5 cm



第30図 大反遺跡出土石器 (2)
8~11: 黒モヤ

0 5 cm

7) "表採及び層準不明"

尖頭器が6点、使用された剥片が1点得られている。

尖頭器 (1~6)

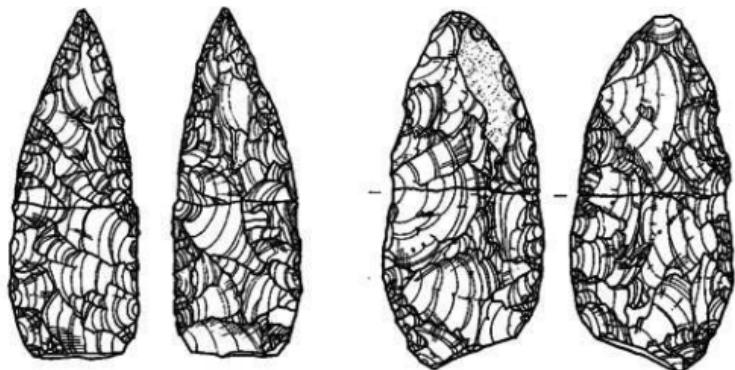
入念な加工による両面調整尖頭器 (1~5) と、半両面調整尖頭器 (6) に分類される。

① 入念な加工による両面調整尖頭器

平坦剝離によりなめらかな形で薄手のものである。1は左右対称で、先端・基部ともに裏面の調整途中で破損したものである。2は左右対称・細身で、正面での調整中に破損している。5は左右やや非対称で、縦長剥片を素材とし、裏面に主剝離面が残存している。裏面は左側縁にのみ調整が行われている。正面調整中に破損したものである。3は横長剥片を素材とし、左右やや非対称の基部で、正面調整中に破損している。5は先端部で、裏面調整中に破損している。

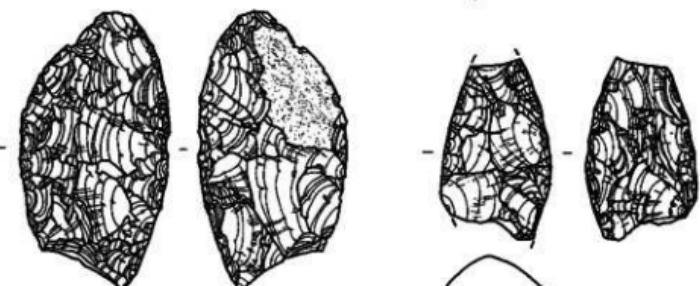
② 半両面調整尖頭器

6は基部の欠損品である。縦長剥片を素材とし、裏面に主剝離面を多く残すもので、正面には粗い平坦剝離が施されている。なお、正面両側縁に、裏面左側縁に細かい周縁調整が施されている。正面調整中に破損している。



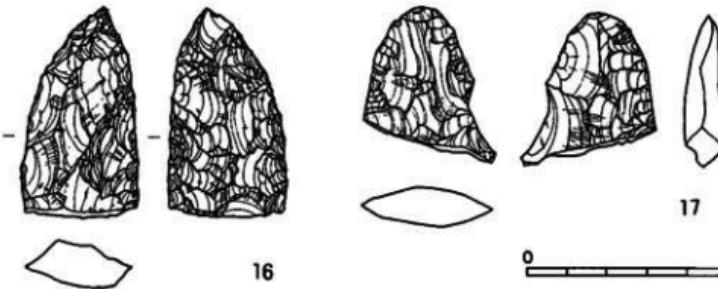
12

13



14

15

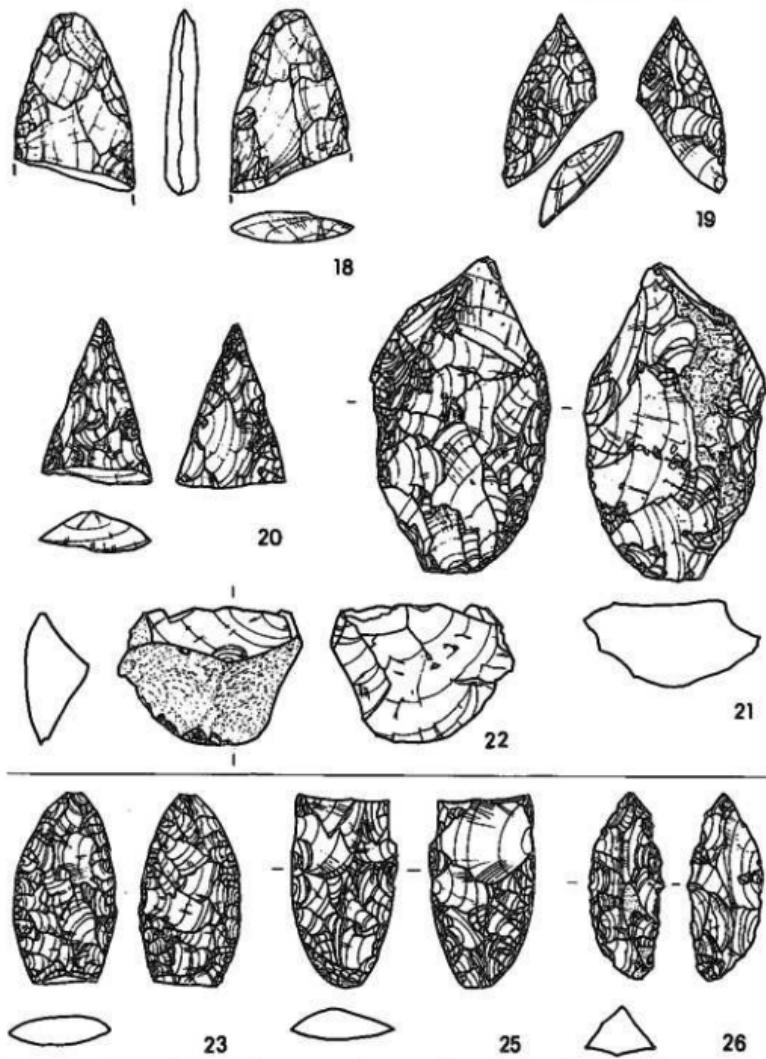


16

17

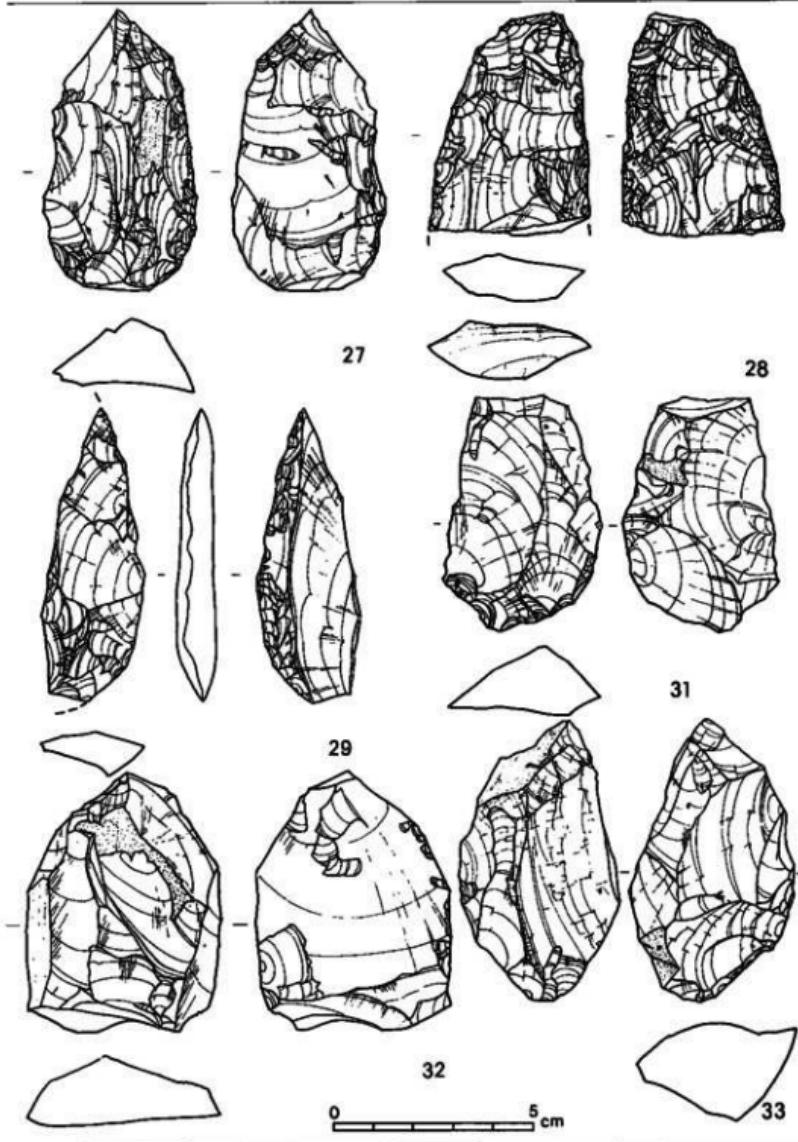
0 5 cm

第31図 大反遺跡出土石器(3)
12-17: ソフトローム

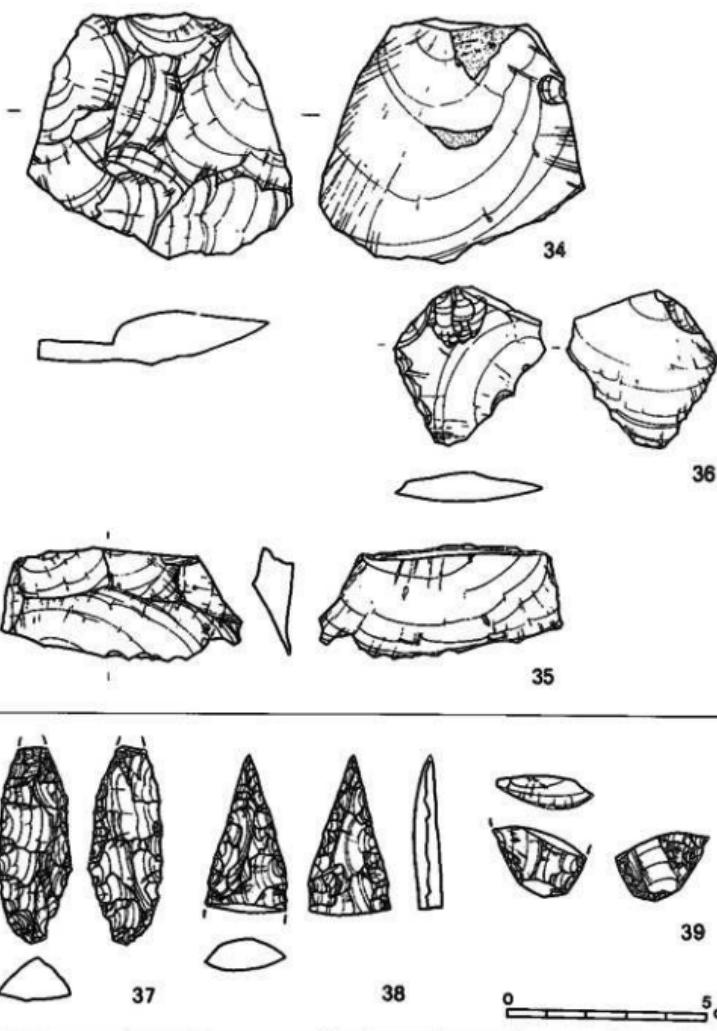


第32図 大反遺跡出土石器(4)
18~22:黄モヤ、23~26:デカバミロームIII

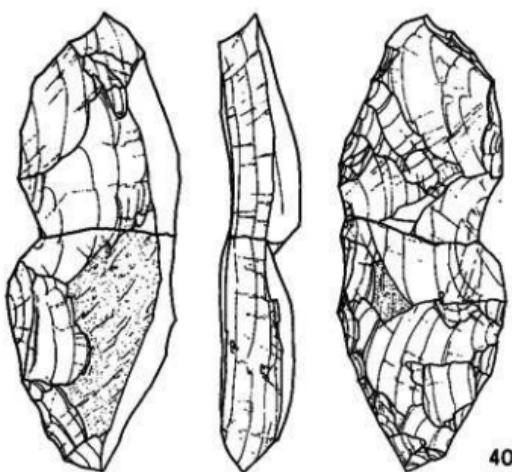
0 5 cm



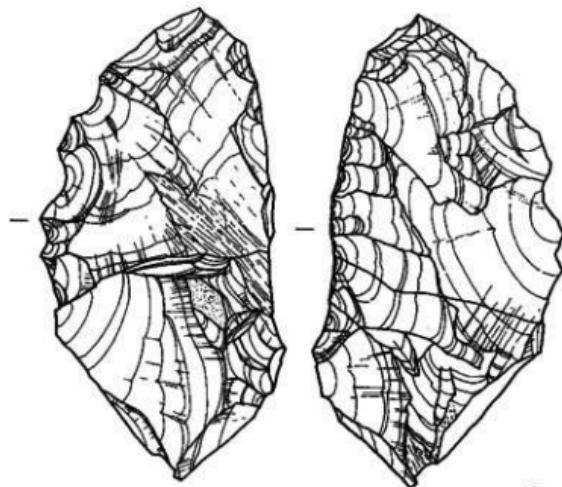
第33図 大反遺跡出土石器(5)
27-33: デカバミロームIII



第34図 大反遺跡出土石器 (6)
34~36: デカバミロームIII、37~39: デカバミロームII



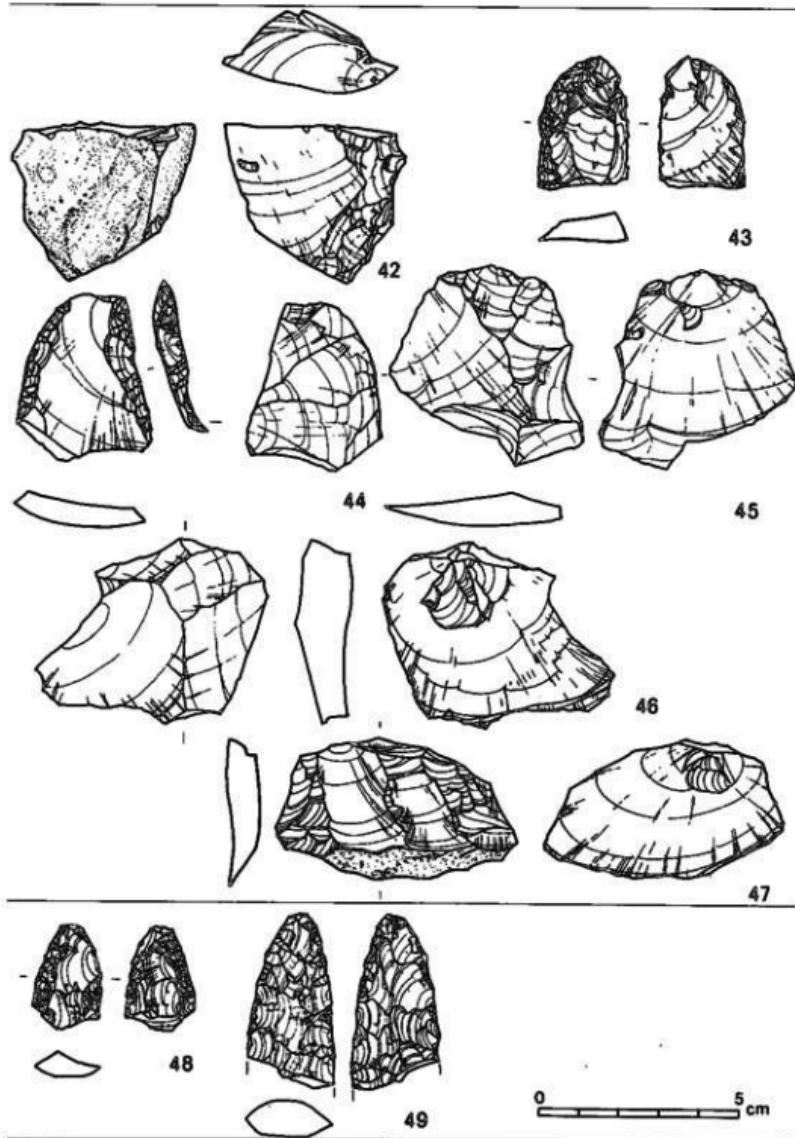
40



41



第35図 大反遺跡出土石器 (7)
40・41：デカバミロームII



第36図 大反遺跡出土石器(8)

42-47: デカバミロームII、48・49: デカバミロームI

使用された剝片 (7)

三角形の剝片末端部の破損品で、主剝離面の側縁に剝離痕がみられる。

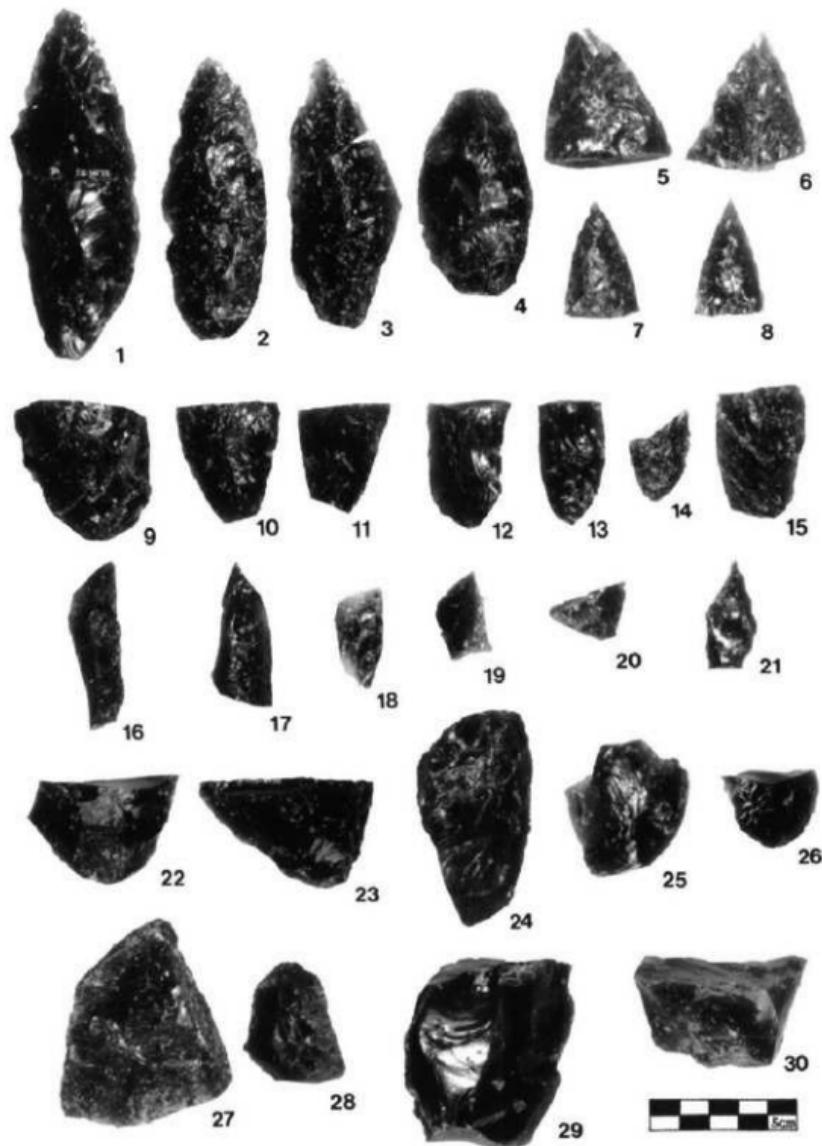
石材は、6が最も灰白色を帯び、2、3、4が透明度の低い灰白色を帯びた黒曜石である。1、5は透明度が比較的高く、7は最も透明度が高い黒曜石である。

塩くれ場・大反遺跡室内作業参加者

石塚二侍子	大金 齊	奥田 達夫	織笠 暢	鶴田 知幸	熊井 久雄
小浦 和子	小林 恵子	小林 純子	小林 雅弘	小宮山一美	近藤 洋一
坂本 孝洋	佐々木徳治	実川 順一	杉田 正男	関本 真一	竹内 健
深沢 哲治	中村 敦子	中村 由克	矢嶋 勝美		

第10表 大反遺跡における表探資料一覧

No	遺物番号	名 称	保 存 長	重 量
1	76 I K-3 82 I K-25	両面調整尖頭器	半折(接合)	10.8cm 56.8g
2	82 I K-20 76 I K-6	" "	" "	9.0 31.7
3	76 I K-8	" "	" "	8.6 30.2
4	82 I K-18 82 I K-19	" "	" "	6.5 31.1
5	82 I K-25	"	先端部	4.4 19.2
6	82 I K-14	"	"	4.9 15.0
7	76 I K-10	"	"	3.8 6.5
8	82 I K-28	"	"	3.8 4.3
9	82 I K-24	"	基 部	4.6 30.9
10	80 I K-1001	"	"	3.9 14.3
11	82 I K-27	"	"	3.5 9.4
12	76 I K-5	"	"	4.2 12.6
13	80 I K-1004	"	"	4.0 7.4
14	82 I K-15	"	"	3.0 3.4
15	82 I K-35	周縁調整尖頭器	"	4.3 10.2
16	82 I K-40	両面調整尖頭器	側 縁	5.3 7.2
17	76 I K-12	"	"	4.6 8.0
18	82 I K-22	"	"	3.3 2.5
19	I K-261	"	基 部	2.9 3.1
20	I K-262	"	"	1.7 3.6
21	82 I K-17	周縁調整尖頭器	先端部~中央部	3.6 4.3
22	76 I K-4	尖頭器未成品	基 部	3.4 33.7
23	80 I K-1002	"	"	4.1 39.2
24	76 I K-11	"	先端部	7.0 42.8
25	76 I K-9	"	基 部	4.5 13.2
26	76 I K-7	"	"	2.5 9.4
27	I K-142	"	不 明	6.5 61.5
28	I K-123	スクリエイバー		3.8 16.7
29	76 I K-13	石 株		6.2 144.2
30	I K-110	"		3.3 80.6



第37図 大反遺跡出土石器 (9)
1~30: 1976~1984年の表採資料

C. 大反、塩くれ場遺跡における尖頭器製作に伴う 碎片(chip)の特徴について

a はじめに

大反、塩くれ場遺跡では狭い発掘面積にもかかわらず、多くの遺物が出土しており、とりわけ尖頭器製作に伴う碎片が多数をしめている。尖頭器は大きく分けて3類に分けられ、層位とともに変遷している現象がとらえられている。しかしに、層位の明らかな尖頭器そのものの固体数は約40点とあまり多くはないので、多数をしめる碎片を分析することによって、層位ごとの傾向を統計的にとらえることができれば、石器群の変遷の実体を明らかにすることが可能と思われる。そこで、筆者らは大反、塩くれ場両遺跡出土の碎片を層位ごとに分け、その形状を統計的に分析した。

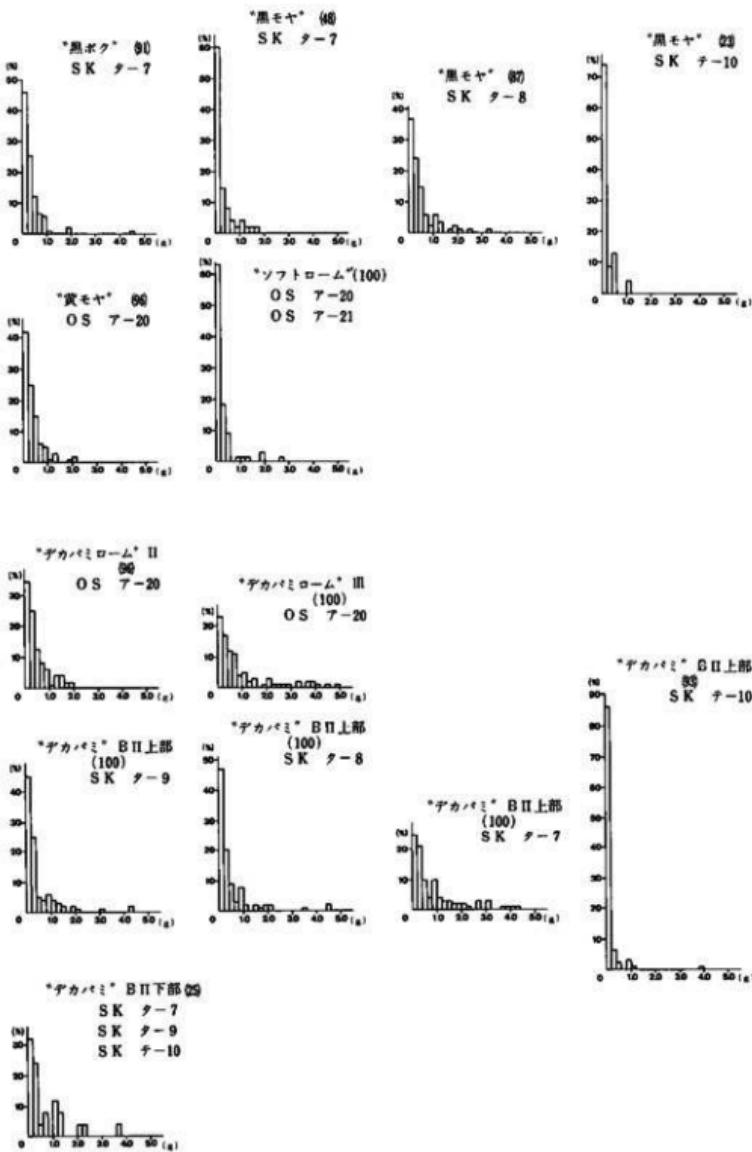
b 碎片の統計的処理の方法

碎片の統計的処理は次の手順で行った。

- ① 層準別に分けた遺物の中から石器、剝片等を抜き出し、残った碎片のみを集める。
- ② 碎片を水洗する。碎片には注記ができないので、専用のカードに遺物番号等を記入したのち、碎片とカードを5×8cmのチャック付ビニール袋に入れるように統一をとった。
- ③ 計測にあたっては、碎片の長さ、巾、厚さのそれぞれの最大値をノギスにより、0.1mm単位で測定し、重量は上皿天びんにより、0.1g単位で測定した。なお、測定資料数は各層準、グリッド別に任意に100個を抽出したが、それ以下の場合は総数を計測した。
- ④ 統計は、各層準、グリッド別に各測定値の平均値、標準偏差を求めた。また、碎片の大きさのばらつき度を出すために重量を0.2g単位でヒストグラムを作成した。

c 各層準の碎片の特徴

各層準、各グリッドごとの重量ヒストグラム(第38図)によると、“黄モヤ”、“ソフトローム”、“黒モヤ”、“黒ボク”的各層準では0.2g以下の微小の碎片の割合が37~74%と高率を示し、それ以上の大きさの碎片はわずかである。“デカバミ”B II及び“デカバミローム”では、テ-10グリッドを除くと、0.2g以下の碎片は23~47%で5gまでの範囲にちらばる傾向がみられる。層準ごとの傾向をとらえやすくするために、長さ、巾、厚さの平均値及び重量の中央値を求めた(図39図、第11表)。これによると、ヒストグラムでみると、 “黄モヤ”~“黒ボク”的層準と、“デカバミローム”そして“デカバミ”B IIの3つに分類して碎片の特徴をつかむことができる。すなわち、“黄モヤ”~“黒ボク”的層準では、重さ0.14~0.31g、長さ8.9~12.4mm、巾7.9~13.9mm、厚さ1.6~2.3mmと小形の薄い碎片が多量である。標準偏差も4.4~5.5と下位層に比べて小さく、大きさ、形状の比較的そろっていることがわかる。

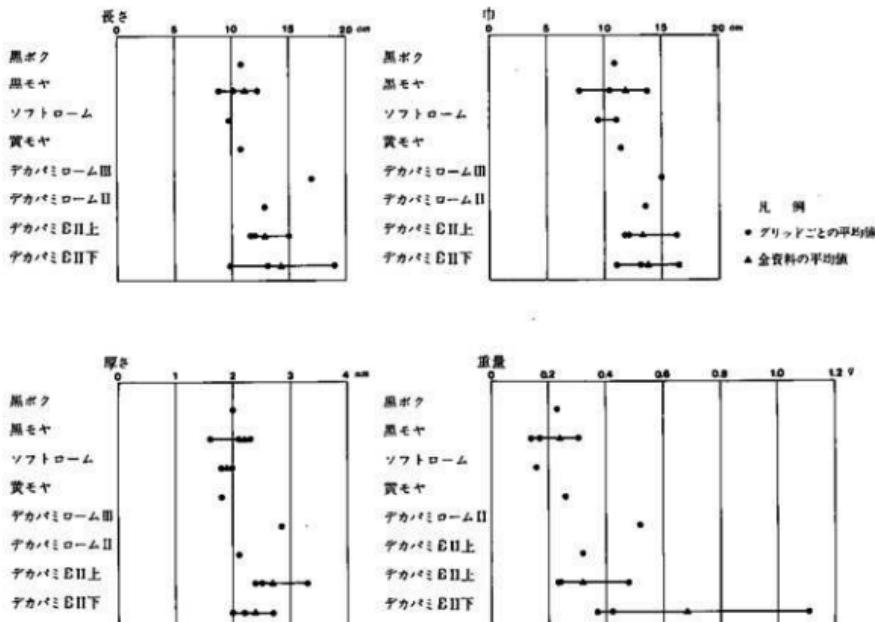


第38図 層準別の碎片の重量分布(ヒストグラム) ()内は資料点数

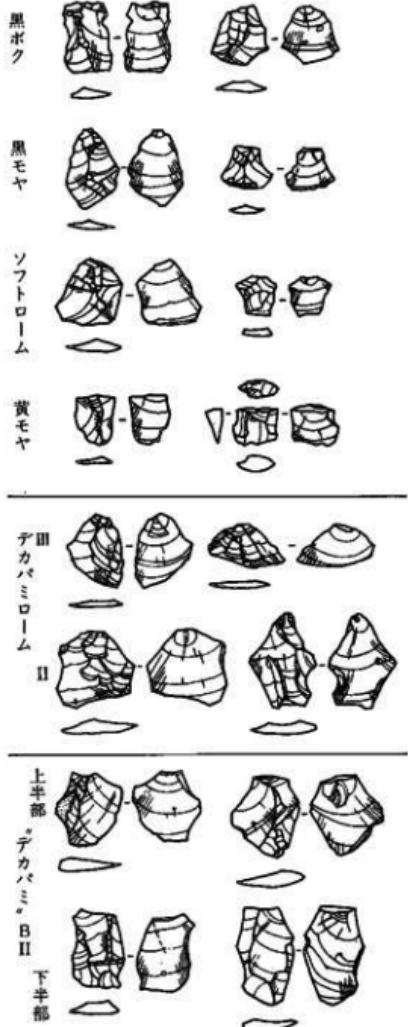
"デカバミローム"は、重さ0.32~0.52g、長さ12.9~17.0mm、巾13.6~15.0mm、厚さ2.1~2.7mmで上位層に比べて大形となる。

"デカバミ" B IIは、重さ0.27~1.11g、長さ9.9~19.1mm、巾11.0~16.6mm、厚さ2.0~3.3mmで、碎片の大きさにバラつきがみられ、一定していない。標準偏差も6.5~7.2で、碎片が特定の大きさに集中していないことを示している。テー10グリッドは、重量中央値0.12gで0.2g未満のものが85%をしめ、"デカバミローム" B II上部層では特殊なものである。

以上の碎片の形状の特徴から調整加工について言及すると、下位層の"デカバミ" B II及び"デカバミローム"では加工が粗く、大小様々な碎片が残され、"黄モヤ"以上の層準では細かくそろった調整加工がなされ、微小の碎片が残されたことが考えられる。



第39図 碎片の長さ・巾・厚さの平均値及び重量の中央値



第11表 碎片の長さ・巾・厚さの平均値及び標準偏差

層準	長さ		巾		厚さ	
	平均(cm)	標準偏差	平均(cm)	標準偏差	平均(cm)	標準偏差
黒ボク	10.9	5.10	11.0	5.08	2.0	1.05
黒モヤ	11.2	4.41	12.0	5.89	2.2	1.38
ソフトローム	9.7	5.53	9.6	5.56	1.9	1.38
黄モヤ	10.8	5.54	11.5	5.70	1.8	1.19
デカバミロームIII	17.0	9.13	15.0	7.96	2.7	3.57
デカバミロームII	12.9	5.69	13.6	6.05	2.1	1.11
デカバミロームI上部	12.9	6.55	13.4	7.23	2.7	1.89
デカバミロームI下部	14.4	6.84	13.8	6.62	2.4	1.42

執筆者：萩原文江、鴨田知幸、木村洋子、
中村敦子、中村由克〇、大塚真由子、
坂本孝洋〇 〇印：執筆責任者

協力：北関東野尻湖友の会



第40図 各層準における代表的な碎片

5 池の平遺跡群の分布

A. はじめに

大石川源流から北東へ大石川と水無川にはさまれた池の平溶岩の細長く続くなだらかな斜面には、多くの旧石器時代の遺跡が分布する。これらの遺跡は地形的にひとまとまりのもので、後述するように尖頭器文化期のものであるという共通性があることから、遺跡群として認識でき、池の平遺跡群と呼ぶことにする。

池の平遺跡群には、標高1,290mの駒出池遺跡から、1,750mの水無川上流遺跡(湧水地点)までの少なくとも7遺跡が確認されている(第41図)。この地域は深い森林で地表踏査がほとんど不可能であり、道路や滝池のまわりなど人工的に開拓された所にのみ遺跡が発見されているにすぎない。したがって、将来さらに多くの遺跡がこの地域内に確認される可能性がある。

池の平遺跡群の分布調査およびその遺物の研究は、すでに1954年頃から黒木利雄氏によって注意され、1954年には芹沢長介、佐藤達雄氏によって駒出池周辺が調査されるなど、1971年の発掘までに断片的に進められていた(井出、1982)。その後、八千穂村の佐々木德治、小宮山一美氏等によって表探が進められた。1983年からの池の平遺跡群の第1回・2回調査によって、遺跡群の全体的把握がせめられ、1984年10月に道路沿いにではあるが、溶岩流の全般的調査を行った。ここでは、これまでに明らかとなった遺跡の概要を記載する。

B. 遺跡の各論

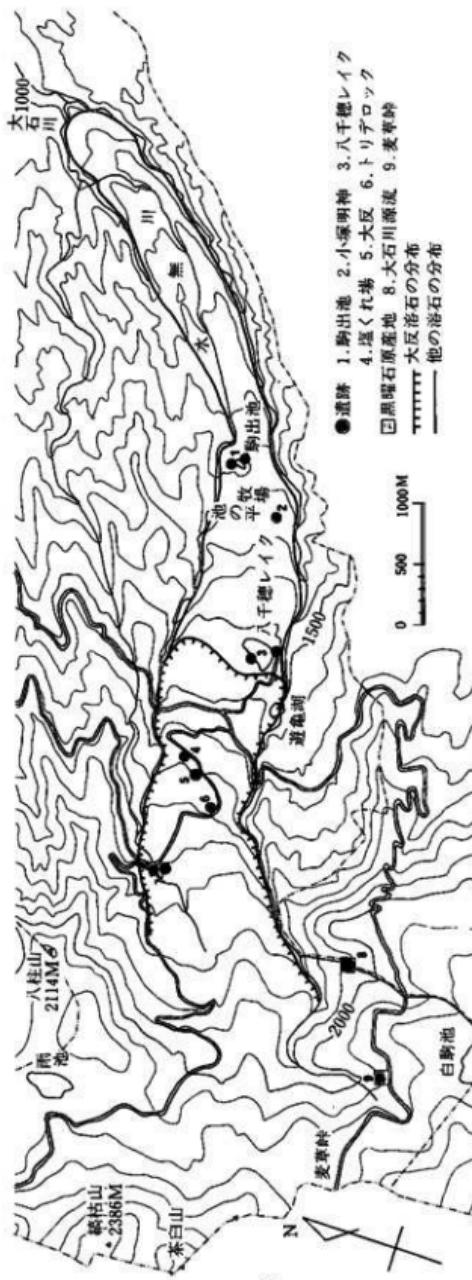
a 駒出池遺跡

i) 位置

駒出池は1958年に農業用水と観光を目的としてつくられた溜池である。池の北岸の標高1,300m

第12表 池の平遺跡群の遺跡と原石産地一覧

番号	遺 跡 名	標高(m)	主要遺物	その他の遺物	備 考
1	駒 出 池	1,300	尖頭器	エクレーバー、石器、剣片	池北岸のはか、南東岸にも分布する
2	小 塚 明 布	1,370	—	剣片	
3	八 千 穂 レ イ ク	1,505	—	剣片、原石	池の北岸(北端点)と南東岸(南端点)の2地点ある
4	塙 く れ 場	1,645	尖頭器	エクレーバー、U-フレ、剣片	1971年、1984年発掘
5	天 穂 及	1,655	尖頭器	エクレーバー、U-フレ、剣片	1983年、1984年発掘
6	ト リ デ ロ ッ プ	1,690	石 刃	舊文早中期土器	1971年発掘
7	水 無 川 上 流	1,750	—	剣片	東部の湧水地点(1971年発掘)と西部の水無川沿い高高地の2地点
8	大石川源流原石産地	1,950	—	—	二次的な堆積物
9	麥 草 岐 原 石 産 地	2,065	—	—	溶岩



第41図 池の平沿岸部の古道と原石産地

前後の微高地に遺跡の中心地がある。遺跡の大部分はキャンプ場になっており、一部は駐車場として包含層が破壊されている。また、池の南東岸の斜面上にも遺物が散在する。

駒出池の西側には溶岩流の末端があり、水量の豊富な湧水が存在している。このため、駒出池をつくる以前からこの付近は低湿地であった可能性がある。

ii) 遺物の記載

包含層の一部が露出している駐車場やキャンプ地内からは、大量の黒曜石製の石器、剝片が採集されている。石器は、尖頭器が最も多く11点あり、スクレイバーが2点得られている。尖頭器はほとんどすべて破損品である。大反遺跡や塩くれ場遺跡に比べて、良質の石材が多いことが注目される。なお、南地点からは剝片類がわずかに得られているにすぎない（第42図）。

片面調整尖頭器（1、10）

剝片の形を生かし、主

剥離面はバルブや縁部に

沿って調整されている。

両面調整尖頭器（2、

3、4、6、11）

両面に入念な調整がほ

どこされた尖頭器で、2、

3は全体の形がつくり出

されたのち片面の縁部に

細かい調整が加えられて

いる。4、5、6、11に

比べるとより完成度の高

いものの、破損品である。

大反・塩くれ場遺跡に多

くみられる形態の尖頭器である。

第42図 駒出池遺跡採集石器

1～11：尖頭器、12・13：スクレイバー

縁部調整尖頭器（7、8、9）

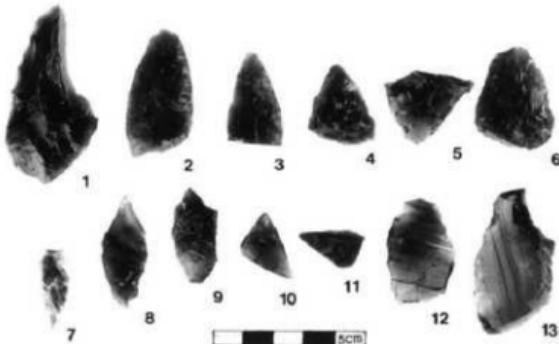
縦長剝片の形を生かし縁部に沿って細かい調整がされている。大反・塩くれ場遺跡では表掲の1点を除き、発掘では確認されていない形式ものである。

削器（サイド・スクレイバー）

縦長剝片の左側縁に縁部調整がほどこされている。刃部は粗い加工で鋸歯状を呈する。

iii) 石器群の特徴

尖頭器は、片面調整、両面調整及び周縁調整のものからなり、入念な調整加工のほどこされた形態のものは全く含まれない。このことから、大反・塩くれ場遺跡の下層グループ（デカバミ・デカバミローム層）の石器群に近いものと考えられる。



また、スクレイバーが高率に含まれていることも特筆される。スクレイバーが多いことは、石器製作の工房的性格とともに、厨房的性格をもった遺跡であることを示唆すると思われる。

b 小塚明神遺跡

i) 位置

駒出池より一段高い溶岩流の先端部付近に溶岩が突出しており、その頂上が小塚明神となっている。遺跡は明神のすぐ南側の林道沿いであり、標高は1,370mである。

ii) 遺物（第43図）

黒曜石製の剥片1点が得られている。不純物を多量に含んでいる石材を用いたすびまりの剥片である。

時期、組成等は不明である。

c 八千穂レイク遺跡

i) 位置

八千穂レイクは大反溶岩がつくる崖線のすぐ下に位置し、緩斜面となっているところを1973年に農業用温水溜池として開さくした。遺跡は池の北岸（北地点）と南東岸（南地点）（堰堤を含む）に確認されている。標高はおよそ1,505mである。南地点のすぐ南側は大石川の渓谷となっており、地表付近には円礫が散在すること、対岸にも谷沿いに平坦面が認められることから、ら、小規模な段丘と思われる。

ii) 遺物（第44図、第45図）

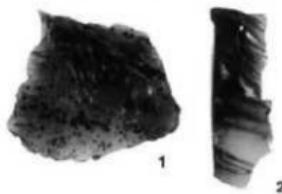
南地点からは黒曜石製の剥片4点と、黒曜石の原石（円礫）7点が得られている。剥片・原石ともきわめてよい材料のものである。

原石は長径7.8cm～1.4cmの円ないし亜円礫で、不純物をほとんど含まない黒色の良質の黒曜石である。

この原石は、遺跡直下の小規模な段丘礫層中に含まれているものである。

時期・組成等は不明である。

北地点からは碎片1点と、黒曜石原石3点が得ら



第43図 小塚明神遺跡(1)、トリテロック遺跡(2)採集石器



第44図 八千穂レイク遺跡採集石器、原石1～4：剥片、5～11：黒曜石原石(新鮮な面はハンマーによる破断面)

れている。原石は、直径3.7~4.6cmの亜円錐の黒曜石である。

d 塩くれ場遺跡

遺跡は標高1,640~45m付近の林道沿いに分布し、小さな沢に沿った裸地となっている。1971年に林道開発によって遺跡が発見され、発掘が行われた（井出、1982）。

1984年の第2次発掘では、総計1,422点の遺物が出土した。

この中には尖頭器9点、スクレイバー1点等の石器が含まれている（第4章参照）。

e 大反遺跡

塩くれ場遺跡より約100m南西に位置し、標高1653~57mの林道沿いに位置する。

1983年、84年に発掘調査が行われ、総計4,028点の遺物が出土した。うち石器は、尖頭器58点、スクレイバー11点などである（第4章参照）。

遺跡出土の石器は、粗悪な黒曜石を使用していることが特徴である。

f トリデロック遺跡

i) 位置

大反遺跡より約300m南西の林道沿いに位置し、標高はおよそ1,690mである。

トリデロックという名称は、大石川の谷を望む位置に溶岩が尖塔状に突出していることから、1971年に森嶋稔氏によってつけられたものである。

ii) 遺物（第43図）

1971年の発掘では、やや大型の石刀と縄文早期茅山式土器が出土したという（井出、1982）。発掘地にはローム層中に礫群が残されており、その中より石刀状剥片1点が表採された。

g 水無川上流遺跡

i) 位置

大反溶岩流の北端で標高1,740~50mにかけての水無川右岸の平坦地に遺跡が分布する。遺跡は1971年に発掘された東部の湧水地点と、西部の水無川沿いの微高地から構成される。

ii) 遺物（第46図）

湧水地点からは剥片が4点得られ、不定形のものである。

水無川沿いからは、多くの剥片・碎片が得られている。剥片は巾広の縦長剥片が多い。

いずれの地点からも



第46図 水無川上流遺跡採集石器

1~5:湧水地点、6~9:水無川地点

* 第1回報告書では、水無川上流遺跡を2遺跡にしていた。

完成品としての石器は未発見で、時期、性格等は不明である。石材には、良質の黒曜石が含まれている。

h 麦草峠原石産地

麦草峠の東方で、白駒池の北方約800mに位置する。国道299号線の開通で標高2,065m付近に黒曜石の露頭が発見された。また、そこより北東方約500mの大石川源流の河床（標高約1,950m）にも黒曜石原石が露出している。

麦草峠では黒曜石溶石が5m以上の厚さで分布している。この黒曜石中には、大変多くの不純物を含んでいることがひとつの特徴である。大石川源流では、二次堆積の崖錐疊層中に黒曜石の直径15cm程度の礫が含まれている。

6 池の平尖頭器文化の特徴

A. 尖頭器の形態と変遷

大反、塩くれ場遺跡出土の尖頭器は、調整加工の状態によって、次の3類に分けられる。

A類——半両面調整で、片面と他面周縁に調整があるもの。

B類——両面調整で、調整の角度が大きく奥行が浅いので、全体として粗い調整もの。

C類——両面調整で、調整の角度が斜めで奥行が大きく入念な調整のもの

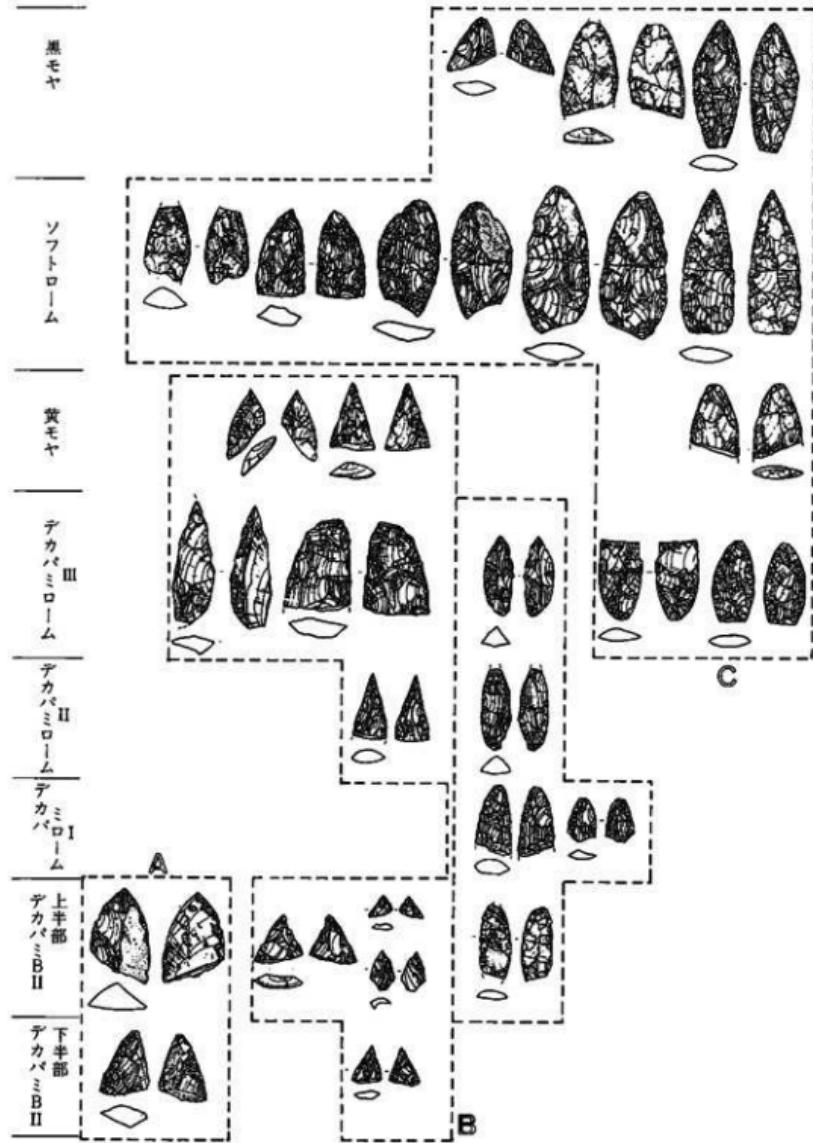
大反、塩くれ場遺跡のA・B・C類の尖頭器の個数を層準別に整理すると。第47図のとおりになる。A類は今のところ“デカバミ”中に出土しているだけであり、B類と共存する。B類は“デカバミBII下半部”から“黄モヤ”まで連続するが、“デカバミ”BII上半部と“デカバミローム”IおよびIIIの層準に多く見られる。C類は“デカバミローム”IIIに出現し、“ソフトローム”と“黄モヤ”で卓越する。

碎片の統計的処理のデータからは、“デカバミ”、“デカバミローム”（下層）と、“黄モヤ”以上の層準（上層）とでは、碎片の形状に明らかな差異が認められる。それによれば、下層では碎片の大きさ、形状が多様であるのに対して、上層では薄く整った形状の碎片が多い。このことから下層の碎片はA・B類尖頭器の製作にともなうものが多く、上層の碎片はC類尖頭器の製作にともなうものであることが推定される。したがって、碎片の統計的資料からみると、大反、塩くれ場遺跡では、“デカバミローム”以下の下層でA・B類尖頭器が主体をなし、“黄モヤ”以上の上層になってC類尖頭器が主体となっていた変遷が考えられる。これまでみてきたように大反・塩くれ場遺跡の尖頭器石器群は、大別して前・後2段階に区分できる。

池の平尖頭器文化は、ナイフ形石器や細石器などの他の石器群との関係がつかめないと云え、戸沢（1962）、稲田（1969）、白石（1979）らによって発展されてきた尖頭器の編年には確実な層位的基準を与えるものとなろう。異なる段階の2群の尖頭器石器群が層位的に出土した例は、長野県はもとより中部地方でもはじめてである。このように、尖頭器文化がたいへん発達した中部高地の中で尖頭器の変遷が層位的に確認されたことは、全国的にみても大きな意味をもつと思われる。

B. 尖頭器の製作過程

大反遺跡の尖頭器はほとんど未完成あるいは、完成途上の破損品である。“デカバミローム”IIからは尖頭器製作の初段階の資料が出土している（第48図）。3点の未完成品は、①背面がすべて自然面の綫長剝片、②横長剝片、③節理面でわれたと思われる板状の石片をそれぞれ素材としてお

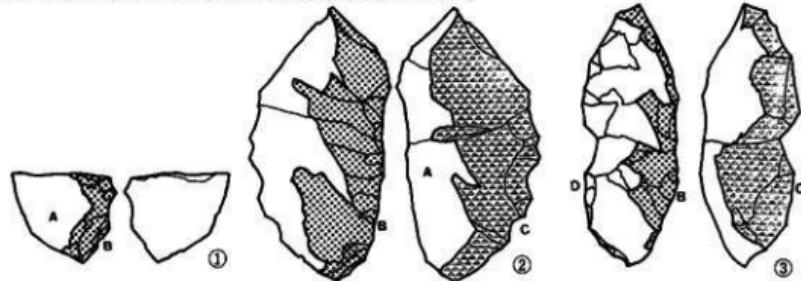


第47図 池の平大反・塩くれ場遺跡における尖頭器の変遷

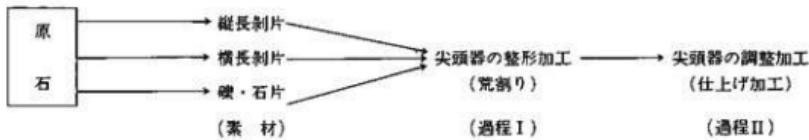
り（素材の主刺離面等を第48図でA面とする）、齊一性はみられないが、その後の調整加工は同一の手法をとっている。はじめの素材の大きさは、 $12 \times 6 \times 2$ cm程度と推定される。北跡場遺跡の尖頭器製作工程を分析した松沢（1960）と比較すると、①、②はII群に、③はI群に相当するが、④は節理面を利用して人為的に割ったものであるので厳密な意味では自然状態の石片（礫）をそのまま素材としたものではないと考えられる。

①調整は、まず素材の側縁の一面に浅形調整が加えられる（B面）。②次にB面の反対側の側縁を打面として深形調整が加えられ、概形が整えられる（C面）。そして、B面を打面として裏側に深形調整が加えられている（D面）。この①～③の段階では、半面単位に加工が進み、先端・基部は未調整のままで、おもに側縁の調整加工が主体となっている。この①～③の段階が尖頭器のおおよその形状をつくる整形加工の過程（過程Ⅰ）で、このあとさらに両面からの調整が加えられ尖頭器が仕上げられる（過程Ⅱ）（第49図）。

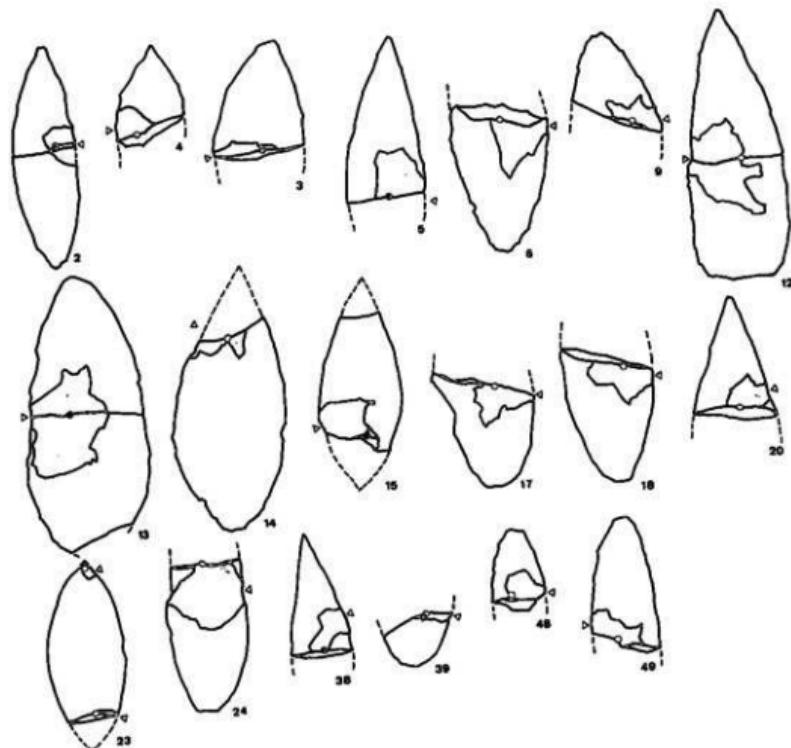
C類尖頭器では全体の器形を完成させたのち、縁部に細かく連続した調整をおこない仕上げている。第50図に製作過程の後半で破損した尖頭器の破損原因となった調整加工の位置を示してある。これをみると、大反遺跡の尖頭器はほとんどのものが、製作のかなり進んだ段階（過程Ⅱ）において、縁側からの剥離によって加えられた衝撃波が黒曜石中の不純物によつかり破損し放棄されたものであることがわかる。逆に、完成後に使用によって折れたものや切断・折損後再加工されたもの（森山、1978）はほとんど確認されていない。



第48図 尖頭器の製作過程（大反遺跡、過程Ⅰ）
A：素材となった刺片の主刺離面、B：1回目の刺離、
C：2回目の刺離、D：3回目の刺離



第49図 池の平尖頭器文化における尖頭器の製作過程



第50図 製作過程で破損した尖頭器（大反遺跡出土）
三角印：破損した剝離の打点（白：正面、黒：裏面）、黒丸印：破損面の“打点”

C. 池の平尖頭器文化の組成

大反・塩くれ場遺跡の尖頭器文化の性格を分析するために、信州の黒曜石原産地を中心とした代表的な尖頭器文化の石器組成を第51図に示す。まず、全出土遺物の中で石器の割合をみると、大反遺跡・塩くれ場遺跡ともに1%程度である。この値は、上の平、渋川IIA、八島遺跡の4~5%にやや近いとはいえ、多くの遺跡の10分の1以下という少なさである。次に、石器の内訳をみると、大反遺跡・塩くれ場遺跡とともに尖頭器、スクリイバー、U-フレイクのみから構成され、組成がきわめて単純であることがわかる。さらに、石器点数が少ないこともあり、尖頭器が非常に高率で含まれていることもきわだった特徴となっている。一方、組成が豊富な遺跡をみれば、男女倉B、鷹山、上の平、柏垂、武井IIなどにみられるようにスクリイバー（搔・削器）が比較的高率で含まれていることがわかる。

このように、大反、塩くれ場遺跡の石器群は、大量の碎片をもちらながら石器はきわめて少なく、その組成には尖頭器以外の器種がたいへん少ないという特徴がみとめられる。この組成はしいていえば八島遺跡にやや近いともみられるが、かなり特徴的な存在だといえよう。

そして、大反遺跡の尖頭器はほとんどのものが製作途中での失敗品であり、欠損率は馬場平遺跡の66.7%をはるかにこえ、90.0%（30分の27、ただしそれ以外の3点も完成前のものである）となっている。すなわち池の平の石器はまだ加工が可能な石核や剝片をほとんど含まず、大半のものが製作途中で破損した尖頭器の破片とその時までにできた碎片からなっている。大反、塩くれ場遺跡では黒曜石の原石をもちこみ、加工の途中でできた碎片と尖頭器の破損品が放棄され、製品はもちさられた場所であると考えられる。このため両遺跡は、上の平遺跡などの豊富な遺物組成をもつ遺跡とは異なり、一時的な加工の場であり、拠点的な遺跡はほかの場所にあったものと推定される。

各遺跡の単位面積あたりの遺物数（第13表）によれば、大反遺跡、塩くれ場遺跡は八島遺跡や浜川II A遺跡にはおよばないが、男女倉B遺跡に匹敵する規模であることがわかる。大反遺跡で2回の発掘と表探で得られた遺物の総重量は、約9.5kg（石器だけで約1.5kg）である。遺跡の中心部は林道開発によってすでに失なわれているが、仮に未発掘分とあわせて当初の遺物埋蔵量をこの10倍とすると95kgで、直径15cm程度の黒曜石原石が約2kgであるからこの大きさの原石なら47.5個分の量と計算できる。同様に、塩くれ場遺跡の発掘でえられた遺物の総重量は、約1.1kg（石器だけで約0.17kg）である。今回発掘したのは4グリッド、36m²であるが、ユニットの分布から少なくともこの25倍の約90m²程度に遺跡はひろがっていそうなので、分布頻度が同じだと仮定すると遺物埋蔵量は約27.5kgと推定できる。

第13表 単位面積あたりの遺物数

遺跡名	発掘面積(m ²)	出土点数(点)	1m ² あたりの出土点数
池の平・大反	90	4,028	45
池の平・塩くれ場	36	1,422	39.5
八島	18	5,000	278
浜川 II A	24	3,889	162
男女倉 B	360	17,474	49
丁子沢	27	529	20
馬場平	65	666	10
柏原	81	648	8
武井 II	140	4,803	34

D. 池の平遺跡群の立地と性格

池の平遺跡群は、急峻な八ヶ岳の山腹の中にあって周囲より低く比較的なだらかな池の平溶岩流の上に立地している。現在までのところ7遺跡が確認されており、標高1,290mから1,750mという高所に位置している。なぜこのように奥深い山中の高い標高のところに遺跡群が立地しているのか容易には説明できないが、このことが逆に池の平遺跡群の性格と特徴に密接に関連していると思われる。

池の平溶岩流のなだらかな地形は標高1,000m付近から2,100m前後の麦草峠までつづいている。麦草峠やその近くの大石川源流には黒曜石の原石産地が存在する。大反、塩くれ場遺跡から原石産地までは、直線距離にして2.5~3kmである。原石産地から1~3kmの男女倉遺跡や2.5km

の渋川遺跡などと並んで、池の平遺跡群は石材産地のふもとに立地する大規模な遺跡である。

そして麦草峠から西側におりれば、旧石器時代の遺跡がたいへん集中している諏訪地方に至る位置にあり、このルートは当時から交通路としても利用されていた可能性がある。

大反遺跡では径2~8mのユニット2基が巨礫をとりまして、斜面の地形にそって分布している。A20グリッドのユニットでは、礫のまわりにスクリレイバーと使用された剥片を伴って碎片が大量に集中分布することが確認された。さらに塙くれ場遺跡では5ヶ所のユニットが検出され、かなり大規模な遺跡であることが考えられる。大反遺跡のユニットは人類が巨礫を利用して、それを背にして南側斜面に居住していたことを示唆している。

前述したとおり、大反遺跡、塙くれ場遺跡は尖頭器の製作場であるが、この遺跡群を占有していた集団の拠点的な遺跡は別の場所にあったと考えられる。現在までに発見されている7遺跡をみると、駒出池遺跡が一番有力である。駒出池遺跡は、溶岩流の末端の崖下に位置し、湧水にもめぐまれた場所であり、今後の調査が望まれるところである。

池の平溶岩流のつくるなだらかな地形は、人類だけでなく動物の移動にも適していたと考えられる。巾1km、長さ3.5kmほどの範囲に点々と分布する遺跡は、石器製作のためにだけでなく、狩猟のキャンプ的な性格をもっていた可能性も考えられる。カナダのアルバータ州ヘッド・スマッシュト・イン遺跡では、せまい出口をもつ河川ぞいの盆地全体をバイソン狩りのワナとして、断崖へおいこむ狼をおこなっていた例が報告されている(リーブス、1983)。池の平の地形はこの例に似ているので、キル・サイトとしての性格も今後検討すべきだと思われる。

遺跡名	総数 1,723	石器 1,613	石器内訳		
			石器 1,613	石器・鉄器 1,613	石器 1,613
池の平 大反	4,028	4,995%	40	82%	尖頭器 33%
池の平 塙くれ場	1,422	4,995%	14	尖頭器 64%	ナイフ 7% U-ツレ 29%
八ヶ岳 (1977年)	3,000	15%	243	30%	尖頭器 27% Aツレ 2% U-ツレ 53% Uツレ 5%
御見野 (1978年)	1,182	45%	73	51%	石刀 77%
御見野 (1982年)	3,000	45%	255	22%	尖頭器 17% Uツレ 38%
御女合谷 (1982年)	17,475	45%	1629	47%	石刀 83%
丁子沢 (1983年)	529	45%	54	尖頭器 30%	ナイフ 55%
御前山 (1983年)	779		341	尖頭器 15% ナイフ 14% 鉄器 11%	石刀 46%
上高原 (1983年)	4,506	45%	180	尖頭器 43%	U-ツレ 35% 石刀 8%
馬場平 (1983年)	500	10%	104	尖頭器 33%	Aツレ 2% U-ツレ 41% 石刀 5%
猪之巣 (1983年)	548	12%	78	尖頭器 22%	スクリレイバー 16% ナイフ 26% U-ツレ 5% Uツレ 12%
赤坂丘 (1987年)	4,803	7.5%	365	尖頭器 20%	スクリレイバー 35% ナイフ 17% Uツレ 20%

第51回 尖頭器文化の遺跡の石器組成

7 池の平尖頭器文化の編年の位置

池の平遺跡群の尖頭器は両面調整の木葉形を主体とする。尖頭器以外の組成は顕著ではなく、多量の尖頭器調整剝片を伴う。石材はすべて黒曜石である。層位的な出土範囲はデカバミB II下半部から黒モヤまでを主とする。の中ではデカバミ・ロームII、IIIとソフトロームからもっとも多く出土する。それらの推定年代は、今からおよそ11,500年から13,000年前であるとされる。発掘範囲は限られているが、より広い範囲にさらに多くの遺物の包含されていることが予察されている。以上の事項に基き、石器文化変遷過程における池の平遺跡群の位置を考察する。

信州における尖頭器石器群の層位は、ローム層最上部、あるいはローム層の上位にかけてであるとされることが多い。池の平遺跡群と直接的に対比することは難しい。唯一対比可能な例は池の平と同じ佐久ローム層の分布域にある山梨県北巨摩郡高根町の丘の公園14番ホール遺跡（保坂1985）である。ソフト・ローム上部からその上位の漸移層にかけて尖頭器が出土している。デカバミは未確認であるが、そこで池の平→丘の公園14番ホールという層位関係が成立する。丘の公園14番ホールは報告にあるように先土器時代末か、縄文草創期にあたる。そして池の平では丘の公園14番ホールに特徴的な種類の尖頭器が皆無である。また長野県上水内郡信濃町向新田遺跡の黄モヤ下底付近からは細石刃と両面調整の木葉形尖頭器が出土している（野尻湖人類考古グループ1984）。以上により、池の平遺跡群の尖頭器は細石器以前の所産であることが理解される。

池の平遺跡群に類似する尖頭器石器群は、信州を中心として中部日本に広く分布している。しかし、明確な層位的出土例は少ない。その中でも尖頭器層年の示標となる地域、つまり良好な火山灰堆積と豊富な尖頭器の出土例という二条件をもつ地域は南関東相模野台地である。相模野台地でまとまった量の尖頭器が一定の組成をもって出土する範囲はB 1（第1暗色帯）からL 1 H（第1ハード・ローム）である（鈴木・矢島 1979）。このうち男女倉技法として提唱された石器（森嶋1975）に対比される東内野型尖頭器（戸田・篠原・並木 1977）をもつ石器群の出土層位はB 1にはば限定されている。月見野IのB 1下（明治大学考古学研究室・月見野遺跡群調査団 1969）、上草柳第3地点東B 1下（堤 1984）、深見諫訪山B 1下（諫訪間 1983、諫訪間・堤 1985）、下鶴間長堀B 1上（中村 1984）、横本L 2～B 1（金山・土井・武藤 1984、ただし削片のみ）等がそれである。栗原中丸（鈴木 1984）や寺尾（白石 1980）のようなL 1 Hからの出土例はいずれもL 1 H下部である。尖頭器がもっとも深層から出土したのは下九沢山谷B 2 U（第2暗色帯上部）であるが、これも東内野型である（中村 1979）。そしてL 1 Hの尖頭器にナイフ形石器がまとった量をもって共伴することはない。

池の平遺跡群では男女倉技法の片鱗もみられず、ナイフ形石器も共伴していない。それゆえナイフ形石器以降、尖頭器石器群の中でもやや新しい段階、つまり相模野台地で言えばL 1 Hに対

比される可能性がもっとも高いと考えられる。

ところで相模野台地のみならず、南関東の尖頭器石器群では信州産の黒曜石を石材とすることが多い。信州と南関東とは、その縄年関係とともに、黒曜石を媒介とする、より具体的な関係がみとめられる。池の平遺跡群はそうした黒曜石ネットワークの結節点のひとつとしての役割を担っていたのだろう。

8まとめと今後の課題

本報告書でとりまとめた八千穂村池の平遺跡発掘調査は、1983年と翌1984年のそれぞれ夏期に実施されたものである。1983年の第1回発掘は8月10日から16日までの7日間、大反遺跡で159名の参加者によって実施され、3m四方のグリッドを6ヶ所、総面積54m²を発掘した。第2回発掘は1984年8月2日から9日までの8日間、大反遺跡と塩くれば遺跡で実施された。発掘参加者は180名で、発掘したグリッド数は大反遺跡2ヶ所、塩くれば遺跡4ヶ所で計6ヶ所54m²であった。

発掘およびその後の研究によって得られた成果は大別して、古環境の復元・遺跡の形成年代等に係わる地質学的成果と、遺物・遺跡の性格・分布・変遷等に関する考古学的成果に区分することができる。以下に、その各々の成果をまとめ、最後にこれらの成果の上にたっての今後の課題を記す。

A. 地質学的成果と問題点

池の平遺跡群は後期更新世前半、御岳第1軽石層(Pm-1)降灰前後に茶臼山方向から流下した池の平溶岩の作る池の平溶岩面に立地する。この面は、周辺地域にくらべて比較的に平坦であるが、部分的にやや急な斜面を形成する。この急斜面は池の平溶岩の各flow-unitの末端を示すものである。遺跡は溶岩面の平坦部に位置するものが多く、ことにこの面上に発達する浅い谷の中およびその谷の斜面に分布することが多いようである。

発掘した塩くれば遺跡はそうした浅い谷の中に立地し、大反遺跡はその谷に面した斜面に形成されている。大反遺跡では、遺跡の形成中、つまり旧石器文化の生活面上に斜面を軒落してきたと推定される巨礫が分布する。その層準は“デカバミローム”と“黒モヤ”的層準である。この面には遺物も分布するが、その分布ユニットはこれらの巨礫をさけるように配置している。

塩くれば遺跡と大反遺跡の遺物包含層は後期更新世末期の上部佐久ローム層に対比される一連の降下火山灰層からなり、下位より“青スコローム”、“デカバミ”、“デカバミローム”、“黄モヤ”、“ソフトローム”に区分される。これらの降下火山灰層は完新世の黒色火山灰層に覆われる。これらの火山灰層のうち、“デカバミ”はフィッショントラック法による年代測定がなされており、約1万3千年前の降灰によるものと推定されている。また、千曲川流域の河岸段丘との対比から“ソフトローム”的年代は約11,500年前と推定される。

塩くれば遺跡と大反遺跡との間には火山灰層の堆積環境に相違があり、大反遺跡に厚く堆積している“デカバミローム”は塩くれば遺跡には部分的にわずかに分布するだけであり、反対に塩くれば遺跡で厚く発達する“デカバミ”は塩くれば遺跡には分布しない。この原因、すなわち、

わずか数10mしか離れていない両地域の堆積過程の復元は今後に残される。

“青スコローム”、“デカバミ”、“黒ボク”各層中の5層準から広域火山灰の可能性のあるガラス質火山灰が検出された。また、全窒素量の分析からは“デカバミローム”の中に3ヶ所の全窒素量の多い層準が認められ、これが降灰休止期かつ遺物出土層準(生活面)に対応する可能性が高い。これらの事は、今後更に目的意識的に追及すべき課題だと考えられる。

B. 考古学的成果と問題点

池の平溶岩面上には、標高1,290mから1,750mまでに7ヶ所の旧石器遺跡が存在し、池の平遺跡群を構成している。この遺跡群は、主に尖頭器文化によって特徴づけられる。

発掘した2ヶ所の遺跡のうち、塩くれば遺跡では“デカバミ”から“黒ボク”までの層準から石器14点を含む1,422点の遺物が出土した。このうち、尖頭器は9点あり、半両面調整尖頭器と両面調整尖頭器からなる。一方、大反遺跡では“デカバミローム”から“黒モヤ”までの層準で石器40点を含む4,028点の遺物を発見した。このうち尖頭器は30点あり、両面調整尖頭器が主体をなす。

両遺跡とも尖頭器と共に多量の碎片が出土している。また、尖頭器は製作途中で破損したものが多い。このことは、出土遺物の大半が尖頭器であることとあわせて、これらの遺跡が尖頭器製作場であることを示唆している。碎片の統計的処理によれば、“テカバミ”、“デカバミローム”と“黄モヤ”以上の層準とではその形状に大きな差異がみられた。これは、尖頭器の製作技術の違いに起因するものと推定される。

出土した尖頭器は、その出土層準によって、調整加工の過程に幾つかの相違がみられる。すなわち、出土層位の下位のものから、A、B、C、の3類に区分されるが、上位層準出土のものはほど精巧なものになっている。

これらの尖頭器を南関東の層位的出土例と信州の様相という2点から比較検討すると、男女倉型尖頭器が顕著ではなくなる尖頭器文化のやや新しい段階から細石器文化出現前後の時期に対比される。

池の平遺跡群が標高の高い位置に立地している理由については、近くに黒曜石の原石産地があることと、池の平溶岩面が周辺山地より平坦なため通行が容易であり、狩猟や黒曜石採取のためのルートになっていたことが想定される。このことは、今後、さらに周辺の遺跡の性格を明らかにして行く過程で明確になるであろう。

さらに、この遺跡群は八ヶ岳東麓の狭い地域の旧石器文化の変遷を示しているに止まらず、信州の黒曜石産地の一つとして、南関東など信州周辺の尖頭器文化の成立と発展に何等かの影響を与えていると予測される。このような観点での池の平遺跡群の検討が、今後重要な課題になると思われる。

C. 今後の課題

池の平遺跡群のうち、塩くれば遺跡と大反遺跡の発掘を通してこの遺跡群の性格がおぼろげながら浮き上がってきた。すなわち、これらの遺跡は約13,000年前から約11,500年前までの旧石器時代末期の尖頭器製作址であり、池の平溶岩面は黒曜石採取のための主要ルートであると共に、不斷の狩猟場であったらしいということである。

このような状況では、塩くれば遺跡・大反遺跡とも当時の狩猟生活のなかでは一時的な尖頭器製作址であり、比較的長期間のキャンプ・サイトは別の場所にあったとおもわれる。すなわち、これらの地点より水の便のよいところで、かつ、できればシェルターなどが存在しているような条件をそなえた場所がその候補地ということになる。

池の平溶岩面上の棘林の中には必ずそのような場所があるのではないかと確信している。このような遺跡を発見し、そこから得られるであろう多彩な遺物をもって、旧石器文化末期から縄文文化への生き生きとした祖先の生活を復元することが我々の夢である。

あとがき

この報告書を出版するにあたり、編集子等は、1971年以来この遺跡群の発掘を念願し、その求明を期してこられた八千穂村の佐々木德治さんの夢の一部を実現できたのではないかと自負している。ことに、この発掘を通じて郷土の太古の様子に思いをはせてほしいと考えていた地元の中学生がおおぜい参加したことは意義深いものがある。この中学生の記憶の中に、この発掘の経験がいささかでも残り、自分達の村の昔をいつくしみ、そこに展開したであろう古代人の営みに思いをはせ、悠久の歴史を感じれば、実に、そのことだけでもこの発掘の意義があったと思われる。

発掘の前までは、この遺跡の示す事実、すなわち、約1万3000年の火山噴出物（軽石）の中から尖頭器が出土する、ということだけしか知られていなかった。しかし、今回の発掘によって、この遺跡が約1万3000年前から約1万1000年前まで続く連続した遺跡であり、その間に石器の製作技法が進歩したこと、そして、その石器の製作過程の一部までをも解明したことの意義は大きい。さらに、調査結果はこの遺跡が単独でここに存在するのではなく、キャンプ・サイトから狩猟に向う、あるいは原石採取に出かけるいわば街道筋の遺跡であり、広い範囲におよぶ旧石器文化の一社会の一部であることを示している。この遺跡の周辺には豊富な遺跡群が確認されている。

したがって、この発掘で調査団は一定の結論は得たものの、それ以上の課題を負ったことを自覚している。ひとつの謎解きが、また沢山の新しい謎を生んでいくのは当然のこととしても、この新しい謎に新しい夢をえがいて、事実で証明して行くことは楽しみなことである。編集子等はこの楽しみゆえに発掘を行い、かつ次の発掘を展望している。

朝日に輝く黒曜石の槍先をかざしつつ白樺林の溶岩台地を行く旧石器人の行く先、帰る宿を、また生き生きとした狩りの様子を少しずつでも復元して行きたいものである。

著名な発掘がそうであるように、ひとつの偶然の発見から壮大な古代世界を復元したいものである。そのためには、シュリーマンのようなひたむきな息の長い発掘をしたいし、また、トリニールで亡き夫の遺志を繼いで精力的な発掘を続けたセレンカ夫人の情熱がほしいものである。

最後に、この報告書でまとめられた発掘後の研究、例えば石器の計測・記載や火山灰の分析などは学生や会社員・店員などの職種の人達に負うところが大きかった。恵まれない条件の中です暇をおしんであたった結果であるので、幾多の遺漏もあるうかと思われるが、その意気をくんで多くされたい。

引用文献

(地質関係)

- 飯島南海夫・田口今朝夫・片岡健治・六川忠信・小林将喜 (1968) 千曲川上流地方の第四紀地質 (その1), (その2) 地球科学, 22, 1-10, 78-85.
- 井出正義 (1982) 池の平遺跡 八千穂村教育委員会編 八千穂村の文化財 57.
- 福垣 進 (1972) 北八ヶ岳東麓の火山岩類の層序と古地磁気 信州大学理学部卒業論文, 1-63, MS.
- (1974) 北八ヶ岳北麓に分布する火山噴出物の層序学的研究 信州大学理学部専攻科論文, 1-47, MS.
- 河内普平 (1961) 八ヶ岳火山列 I・II 地球科学 55, 1-8, 56, 11-17.
- (1974) 麓山地域の地質、5万分の1地質図、同説明書 1-10 地質調査所、東京。
- 関東ローム研究グループ (1965) 関東ローム——その起源と性状——378P 建地書館、東京。
- 北八ヶ岳サブ・グループ (1980) 八ヶ岳北東麓における鮮新—更新統 島弧変動, no 2, 39-47.
- 木村純一 (1986, 投稿中) 中部地方における上部更新統——とくに火山灰層序について—— 第四紀研究。
- 倉林三郎 (1977) 火山灰土中の全窒素量・腐食炭素量の定量 風化研究会連絡紙, no 3, 29-34.
- ・野尻湖火山灰グループ (1980) 野尻ローム層・仲町層中の腐植炭素量および全窒素量から見た堆積環境の変化 地質学論集, no 19, 55-59.
- 小浦和子 (1985) 長野県相木川流域の地質と火山灰の中の火山ガラスについて 信州大学理学部修士論文, 1-151, MS.
- (1985) 中部地方の上部更新統中の火山ガラスについて 日本第四紀学会講演要旨集 no 15, 94-95.
- 小林国夫 (1961) いわゆる信州ローム 地質雑誌, 67, 32-47.
- 小林雅弘 (1983) 八ヶ岳東麓千代里周辺の第四系 信州大学理学部卒業論文, 1-85, MS.
- 酒井潤一・下野正博 (1972) 松本盆地と伊那谷における小坂田ローム層中の浮石層 信州大学理学部紀要, 7, 123-141.
- 新海正博 (1973) 八ヶ岳北東麓の地質層序 信州大学理学部卒業論文, 1-40, MS.
- Suzuki Masao (1973) Chronology Prehistoric Human Activity in Kanto, Japan—Part II Time-space Analysis of Obsidian Transportation. J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec. V., vol. IV, 395-469.
- 間 保幸 (1981) 八ヶ岳東麓小海町周辺の第四系 信州大学理学部卒業論文, 1-69, MS.
- 永井美亮 (1982) 北八ヶ岳南東麓の第四系 信州大学理学部卒業論文, 1-54, MS.
- 中谷 進 (1972) 大町テフラ層とテフロクロノロジー 第四紀研究, 11, no 14, 305-317.
- 野尻湖火山灰グループ (1980) 野尻湖層と野尻湖ローム層の砂粒組成 地質学論集, 19, 33-47.

- (1984) 野尻湖における第四系の砂粒組成 地団研専報, 27, 1—21.
- 本田義史 (1964) 全窒素定量法 ベトロジスト, 8, 57—59.
- 町田 洋・杉原重夫・横山秀司 (1980) 矢出川遺跡の地形・地質学的調査報告 野辺山シンポジウム
1980 報告書, 5—8.
- 松本俊幸 (1978) 北八ヶ岳東麓の第四系 信州大学理学部卒業論文, 1—48, MS.
- 八木貞助 (1928) 信州南佐久郡塙八村産象化石とその地層について 地学雑誌, 40, 308—322.
- 八ヶ岳団体研究グループ (1976) 八ヶ岳火山活動の概要——とくに中期洪積世以降の火山活動について 地球科学, 30, 87—94.
- (1978) ノッチの形成について——北相木川沿いのノッチを例に—— 第四紀, no23, 63—68.
- (1982) 八ヶ岳山麓に分布する更新統——火山活動とともにうなう湖盆の変遷について—— 「島弧変動」 地団研専報24号, 287—298.
- (1986, 投稿中) 八ヶ岳山麓の第四系 地団研専報
- YOSHIKAWA, S. (1984) Volcanic Ash Layers in the Osaka and Kobiwako Groups, Kinki District, Japan Jour of Geo Sci, Osaka City Univ., vol. 27, 1—40.
(考古学関係)
- 稻田孝司 1969「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」『考古学研究』15, 3, 3—18
- 金井典美・石井則孝 1964「長野県霧ヶ峰物見岩遺跡調査概報(第1次—第3次)」『考古学雑誌』50, 117—126
- 金山喜昭・土井永好・武藤康弘 1984「遺構と遺物」『橋本遺跡IV先土器時代編』第V章, 16—187 相模原市橋本遺跡調査会
- 白石浩之 1976「尖頭器石器群研究の現状と展望」『神奈川考古』7, 117—148 神奈川考古同人会
- 白石浩之 1980「第II文化層」「寺尾遺跡」89—122 神奈川県教育委員会
- 杉原莊介 1973「長野県上ノ平の尖頭器石器文化」 明治大学文学部考古学研究室
- 杉原莊介 1977「群馬県武井における二つの石器文化」 明治大学文学部考古学研究室
- 鈴木次郎 1980「第IV文化層」「寺尾遺跡」135—178 神奈川県教育委員会
- 鈴木次郎・矢島国雄 1978「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』1 144—169 有斐閣
- 諏訪間 順 1983「第IV文化層出土の石器」「深見諏訪山遺跡」 43—44 大和市教育委員会
- 諏訪間 順・堤 隆 1985「神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第IV文化層の石器群について」「旧石器考古学」30, 85—108 旧石器文化談話会
- 芹沢長介・柳沢和明 1982「馬場平遺跡」「長野県史 考古資料編全一巻(2)主要遺跡(北・東信)」 528—540 長野県史刊行会
- 芹沢長介・柳沢和明 1982「柏垂遺跡」「長野県史 考古資料編全一巻(2)主要遺跡(北・東信)」 541

—548 長野県史刊行会

- 戸沢充則 1958「長野県八島遺跡における石器群の研究。古い様相をもつポイントのインダストリー」
『駿台史学』8, 66—97 駿台史学会
- 戸沢充則 1965「尖頭器文化」『日本の考古学』I 145—160 河出書房新社
- 戸田哲也・篠原 正・並木良忠 1977「東内野遺跡発掘調査概報」東内野遺跡発掘調査団
- 中村喜代重 1979「神奈川県相模原市下九沢山谷遺跡の石器群」『神奈川考古』7, 89—116 神奈川考古同人会
- 中村喜代重 1984「第II文化層」「一般国道246号(大和・厚木バイパス)地域内発掘調査報告」III 107—164 大和市教育委員会
- 中村龍雄 1965 1968「長野県和田岬丁子沢遺跡の先土器文化」『信濃III』17, 663—671, 20, 316—320
- 野尻湖人類考古グループ 1984「野尻仲町遺跡と向新田遺跡の旧石器・縄文草創期文化」『野尻湖の発掘3(1978—1983)』213—245 地学団体研究会
- 保坂康夫 1985「山梨県北巨摩郡高根町丘の公園14番ホール遺跡範囲確認調査報告書」山梨県教育委員会・山梨県企業局
- 松沢亜生 1960「長野県調訪・北浦場石器群特に石器製作工程の分析を中心として」『第四紀研究』1 263—273
- 宮板英式 1962「渋川」茅野市立尖石考古館
- 宮板虎次 1982「鳩山遺跡・割橋遺跡」「長野県史 考古資料編全一巻(2) 主要遺跡(北・東信)」520—527 長野県史刊行会
- 明治大学考古学研究室・月見野遺跡群調査団 1969「概報月見野遺跡群」明治大学考古学研究室・月見野遺跡群調査団
- 森嶋 稔 1975「旧石器文化の中から——特に男女倉技法をめぐって」「男女倉」169—173 長野県道路公社・和田村教育委員会
- 森山公一 1978「切断・折損による両面加工石器の技法の復元とその変遷に関する一考察」「中部高地の考古学」48—62 長野県考古学会
- リーブス、B.O.K.(芹沢長介訳) 1983「6000年前のバッファロー狩り」『サイエンス日本版』13, 12, 70—83 日経サイエンス社

第1回池の平遺跡発掘参加者名簿

ひがし東京野尻湖友の会

草野佐知（大山口中教諭） 杉田正男（日本歴史学者大）

北関東野尻湖友の会

北爪智啓（群馬大） 坂本孝洋（群馬大） 矢口裕之（立正大）

東北信野尻湖友の会

鴻野晶子（日野保育園） 鴻野智良（日野小） 丸山輝樹（徳間小） 村松泰規（徳間小） 加藤 純（松代小） 加藤 啓（松代小） 小林 潤（松代小） 立岩尚之（松代中） 中島広聖（信大附属中） 平林正晴（久方中） 村松啓輔（北部中） 駒村桂徳（北部高） 薩田繁幸 関 克徳 田辺智隆（以上信州大）

新海正博（岸和田高教諭） 加藤きよい 鴻野久子

中南信野尻湖友の会

小沢範久 武居比呂志 広瀬達也 渡辺 徹（以上寿小） 青柳守宏（堀金小） 篠宮祐介（吉田小） 山口健（吉田小） 中田直志（三郷小） 降旗和章（三郷小） 久保沢秀夫（波田小） 百瀬孝治（波田小） 竹内健造（信大附属中） 幸原弘久（東部中） 北原祐子（美須々高） 清水雅子（東海大第三高） 増田高也（桜川高） 飯田和明 上田 光 牛山栄子 卵月武彦 大金 齊 大沢 匡 大島 浩 大村昭三 奥田述夫 小倉徹也 金川和人 兼松勇次 上加世田 聰 亀山正義 鴨田知幸 北爪 牧 木村純一 小浦和子 小林和宏 小林雅弘 小林美弥子 近藤洋一 末永和幸 敦土美幸 高木郁生 高木信彦 鷹野智由 竹内 健 竹村健一 立岩紀子 中田真也 西尾 聰 西田哲也 深澤哲治 水本秀明 森幹尋 森下 聰 矢島勝美（以上信州大） 青柳美保（NEC） 郷原綾乃（寿小講師） 山越正義（生板中教諭）

上越地区野尻湖友の会

石塚二侍子（自営） 岡本郁栄（新潟県庁文化行政課職員）

八ヶ岳団体研究グループ

熊井久雄（信州大助教授） 寺尾真純（信州大） 稲垣 進（川崎高教諭） 内山 高（三報工業） 浮島久幸（三報工業） 斎藤尚人（佐倉高教諭） 飛田健二（新潟大） 松本俊幸（国際航業）

野尻湖人類考古グループ

小林純子（跡見学園高） 田中美恵子（ブルー学院高） 磯貝千恵（武藏野美大） 小林恵子（国学院大） 間室幸仁（法政大） 岡田昭弘（矢野小教諭） 実川順一（国分寺恋ヶ窪遺跡調査会） 中村由克（野尻湖博物館準備室） 中村教子（群馬県立歴史博物館） 名和 敏（長谷川総合） 松橋 均（西野田高教諭） 織笠 昭八千穂村

八千穂小学校

井出佐知子 佐々木久彰 佐々木基至 佐藤和幸

八千穂中学校

井出 勤 井出文彦 今井光一 今井芳明 小沢なつ子 小宮山進一 舞水美加子 桜井いづみ 桜井久美子 佐々木秀幸 佐々木 透 佐藤幸司 佐藤友広 佐藤秀子 佐藤蓮子 笹崎孝幸 篠原 武志摩さとみ 島崎真由美 関 勝志 相馬和人 今井正宣 出浦祥子 内藤修司 畑 邦弘 古屋重徳 星山 生 松村孝史 山浦倫治 山田真奈美 渡辺修至 渡辺利幸 渡辺真美子 渡辺真理子

八千穂村公民館

小宮山一美 佐々木徳治 佐々木春藏、

八千穂村文化財調査委員会

井出正義 上村久三 佐々木広雄 佐々木宗昭 出浦晃彦

八千穂村教育委員会

笛崎源太郎 出浦 深 内藤 仁 中山貴美子

八千穂村史談会

岩崎謙三 舞水 敏 小林与之 小平瑞穂（八千穂中教諭） 白井 実（佐久史談会）

個人参加

西田知佐子（赤塚山高）

（以上160名）

第2回池の平遺跡発掘参加者名簿

ひがし東京野尻湖友の会

草野知知（大山口中教諭） 杉田正男（日本歴医高産大） 関 幸生（国学院高） 中尾高嶽（青山高職員） 西川栄一（足立東高職員） 树本輝樹（佐倉高） 山根紗子（東京家政大） 関本真一（建設業）

北関東野尻湖友の会

有坂秀樹 石井良直 石田新太 大橋 陽 小林洋行 田島淑充 田中 敏 中村暢一郎 早田典文 藤井洋則 藤井 拓 三侯和哉 横山武夫（以上 群馬大附属小） 岸 美由紀（長尾小） 濑山紀子（岩神小） 濑山真樹夫（岩神小） 山田隆三（船川小） 岡田恵明（境野中） 金子庄一（境野中） 佐藤嘉和（富岡中） 萩野谷彰子（茨城大附属中） 田村香苗（神川中） 谷田幸光（群馬大附属中） 田畠敦史（群馬大附属中） 桜口 康（群馬大附属中） 清水 勝（桜生南高） 矢口裕之（立正大） 大塚真由子 神戸多恵子 北爪智啓 木村洋子 小林晚生 坂本孝洋 高橋陽一 萩原文江 町田 香 松嶋良枝（以上 群馬大） 高野佐知子（福島病院） 山田 彰（群馬大学教職員組合） 山中友子（群馬組合運輸） 岸 美津子

東北信野尻湖友の会

畔上正人（上田四中） 仲谷善浩（上田四中） 上平真哉（上田五中） 寺島宏伊（上田五中） 駒村桂徳（北部高） 小代 進 小池淳夫 小山保男 田辺智隆 三原 哲（以上 信州大） 上條 隆（長野地方裁判所）

中南信野尻湖友の会

工藤和明 細萱徹也 宮澤秀治（以上 泉小） 逸見 潤（岡田小） 山口 健（丘中） 錦宮祐介（丘中）
武居比呂志（筑摩野中） 成瀬達也（筑摩野中） 大林泰彦（總高中） 勝野 誠（總高中） 小野容正 岸
本真樹 酒井 鍵 島田 稔 千葉武俊 根本 泰 藤沢高穂 細井俊一 溝上志朗 望月一彦（以上
信州大附属中） 増田高也（梓川高） 関 恒明（立正大） 飯田和明 大金 齊 大沢 匠 大島 浩 太
田 篤 大林市幸 小倉徹也 柿原仁志 加藤慎夫 金川和人 上加世田 啓 鴨田知幸 北爪 牧
木村純一 萩原直樹 小浦和子 小林和宏 小林美弥子 小松史子 末永和幸 敷土美幸 鷹野智由
竹村健一 田中義文 中平啓二 野井 健 深澤哲治 増田信吾 三澤智之 宮尾さやか 宮東靖浩
森 幹尋 森下 聰 山崎桂子（以上 信州大） 山越正義（生板中教諭）

八ヶ岳団体研究グループ

熊井久雄（信州大学助教授） 小林雅弘（直江津高講師） 西尾 謙（姫崎高教諭）

野尻湖人類考古グループ

伊澤朋宏（大谷場中） 真下智紀（大谷場中） 金井章子（大宮開成高） 小林純子（跡見学園高） 蛺尾
まどか（南野高） 高杉安彦（國立高） 寺島次郎（國立高） 藤澤裕美（國立高） 小林恵子（国学院大）
齊藤文男（大正大） 間室幸仁（法政大） 岡田昭弘（矢野小教諭） 石塚二侍子（自営業） 近藤洋一（野
尻湖博物館） 新堀友行（城北高教諭） 富田京子（自営業） 中村敦子（信濃中職員） 中村由克（野尻湖
博物館） 西村玲子（公務員）

八千穂村

八千穂村小学校

佐々木久彰 佐々木基至

八千穂村中学校

井出和宏 井出和幸 井出博美 井出美和 小澤みえ子 木内 宏 菊池秀樹 木次 恵 小宮山智子
桜井ゆかり 佐々木妙子 佐々木孝尚 笹崎次郎 佐藤和幸 佐藤徳三 鎌原直美 須田勝敏 須田
清 須田 謙 須田宗夫 西沢和美 畑 浩治 星山 圭 山口智恵子 渡辺秀樹

八千穂村公民館

井出 豊 小宮山一美 佐々木徳治（八千穂村役場）

八千穂村教育委員会

小宮山喜利 佐々木春彦 笹崎源太郎 出浦 深 内藤 仁 中山貴美子

個人参加

中嶋 剛（國立第2小）

（以上170名）

発掘組織



図 版



大反遺跡発掘地全景(第1回発掘)



塙くれ場遺跡発掘地全景(第2回発掘)

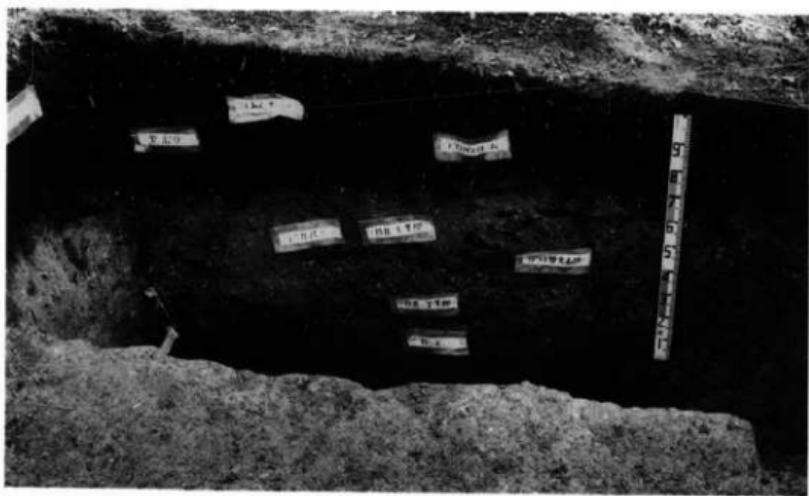


大反道跡発掘調査風景



塩ヶ丘場道跡発掘調査風景

大反遺跡
グリッド壁面



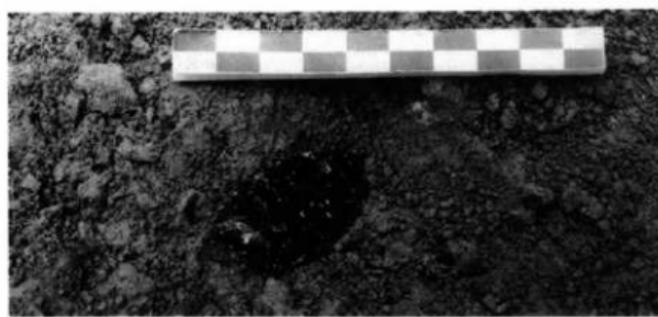
塩くれ場遺跡グリッド壁面



遺物出土状況
大反遺跡
ア-20グリッド



遺物出土状況



遺物出土状況



大反遺跡発掘終了後



塩くれ場遺跡発掘終了後

発掘風景



塩くれ場遺跡
埋め戻し作業

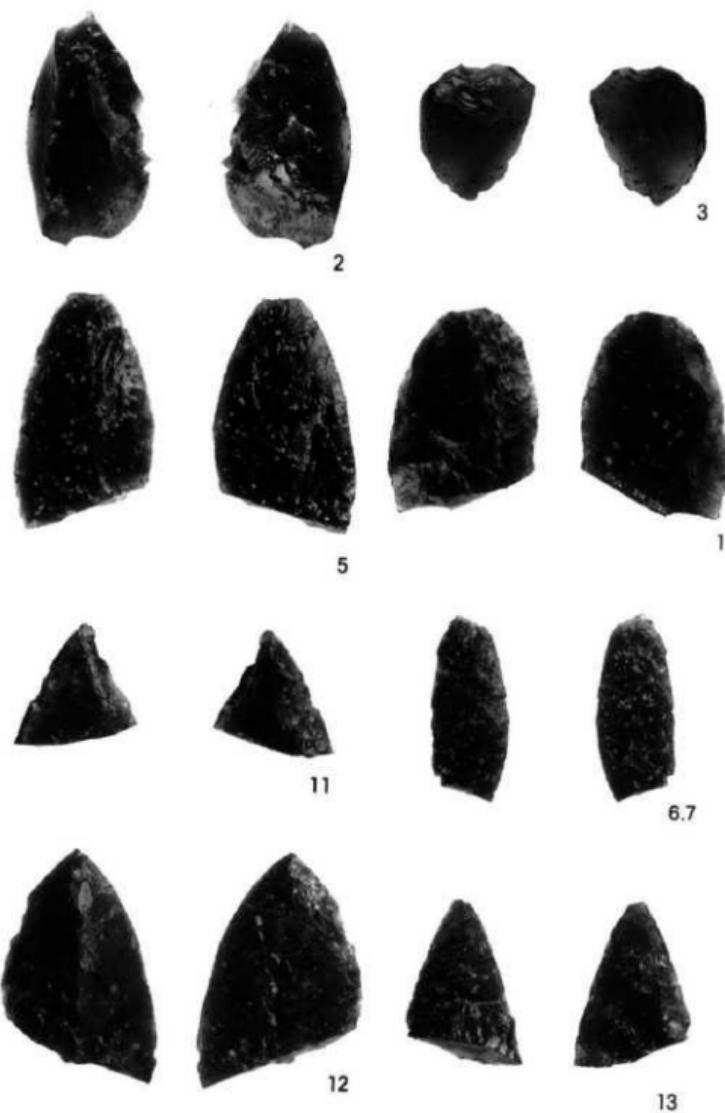


夜の学習会



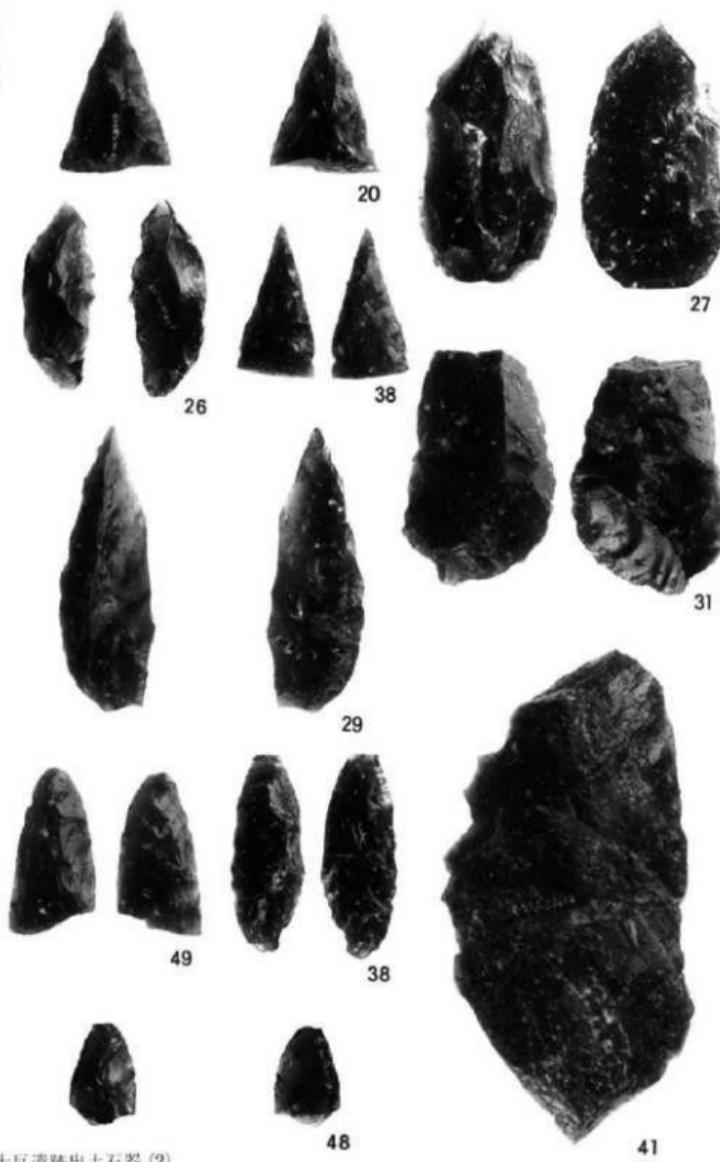
発掘を終えて乾杯



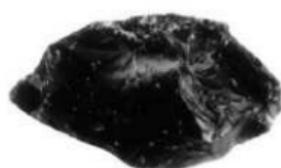


塩くれ場遺跡出土石器





大反遺跡出土石器(2)



47



34



35



45



47



40

大反遺跡出土石器 (3)

池の平遺跡群

——八千穂村大坂遺跡・塙くれ場遺跡の尖頭器文化——

1986年3月31日 白刷

編集・発行：八千穂村池の平遺跡発掘調査団
事務局

〒390 松本市旭3丁目1-1

信州大学理学部地質学教室気付

八千穂村事務局

〒384-07 南佐久郡八千穂村畑143

八千穂村教育委員会気付

印 刷：ほおづき書籍株式会社
〒380 長野市中越293 柴崎第一ビル

